

あまやどり

持山保信

山

が  
好  
き

花  
が  
好  
き

そ  
う  
し  
て

人  
が  
好  
き



## 持山さんのこと

——まえがきにかえて——

毎年もつちゃんからの年賀状には本年の三大目標が書かれている。これは目標達成に協力せよということのようだ。今年は「本の出版」が目標の一つに挙げられていた。

我々は「チルダイ会」という遊びの会を作っている。何回もケンカになって「もう解散や！」と言いなながらもズルズルと続いている。チルダイとは沖繩弁で「筋が緩む」という意味で、「今の社会の流れに惑わされしないで、緊張することのない時空を持つとう。」ということである。もつちゃんは最年長のリーダー的存在であるが、もつちゃんのペースにはまってしまうと誰かがコケることが度々ある。「ワシは今回は大入しくしとくわ。」と言いなながらも、いつのまにかもつちゃんが中心になっていて誰かがトバツチリを食らい側で倒れるのである。我々はこれを「側（がわ）倒し」と呼んでいる。

山と花が好きなのロマンスというののもつちゃんの第一印象であった。今でも毎年初夏には花を見に山へ登っており、この印象は概ね変わらないが、付き合いが長くなった今では「一見ロマンス実はわがまま、しかし純である。」と訂正し

たい。

加えて人が好きで、誰とでも親しくなれる。活動的でじっとしておらず、北へ南へ、東へ西へと飛び回っている。このエネルギーには感心させられてしまう。だから方々でいろいろなエピソードを残している。「もっちゃんと行動すれば何かが起こる。」というのが我々仲間内では定説になっているが、どうやらこれは少年時代から変わらないらしい。

しかし意外にも着実なところがあって、目的があるとコツコツと積み上げ、目的を必ず達成する。この「思い出集」『あまやどり』にしてもそうだ。マイペースのようであるが、実行力があるのである。

この「思い出集」は少年時代から青年時代の事が中心であるが、読んでいてもなるほどと思わせるもっちゃんらしいエピソードが多くある。それとちよつと普通でない感性が少年時代からキラキラしている。側倒しも少年時代からだ。要するに今もやっていることはさほど変わっていないということである。

平成十五年七月

友人代表 梶本 耕嗣

目次

目次	
持山さんのこと	1
発心の道場	3
あまやどり	9
父の死の日	10
市電は六番が好き	12
ゴリ金と小夜子ちゃん	14
恐怖のスキップダンス	16
柿の花	18
夜づけ	20
シュロの実	22
インドりんご	25
特二等の切符は緑の線入り	28
アイスクャンデー売り	30
バスの車掌さんと水筒	32
父の思い出	34
アーモンドチョコレート	36
弟と袋入りジュース	39
	41

目から火が出た作戦	44
へたつきリンゴ	46
弟の世話	48
紙芝居	50
恐怖のハチノス取り	53
弁当箱の穴	55
頭を使え	57
ホックと肩ひも	59
修行の道場	62
岡山の祭り寿し	63
レールが止まって見えた	65
高崎駅と七千円	68
ラーメン当番	71
フルヤブリアキン	74
弥四郎小屋の男中さん	76
スピッツのジュリー	80
アルバイトアラカルト	82
すれちがい	85
ある青春の十九日間	88

目次

豊橋のオバサン	92
困った時のあと一歩	95
学生寮のオジサン・オバサン	98
人生の意義（山本 正 君著）	101
特急まつかぜ	103
春の雨	106
秋の雨	107
菩提の道場	108
深夜の芋掘り	110
三扇寮 一一号室	113
龍の行進	116
にぎりが一個四百円	118
ケムシのガンバリ	120
青森での泣き別れ	121
北海道の友	123
阿寒湖の歌	125
算盤の先生	127
スプーン・コレクシヨン	130
ちよっとおたずねします	133
幸せの質量	135

星と季節	180
大阪寮です	176
カレイ釣り	174
ヒコーキ	169
ぼえむ いん	168
まい	167
ちやいるどぶつど	164
ケーキ作り	161
好きな歌	160
ハレー彗星を見た	159
ヨット物語	156
迷いながらの人生を	153
交遊抄より	152
釣り師は根性悪	151
かちどき橋のトリさん	147
私の好きな詩	146
涅槃の道場	137
塩江家・原家 媒酌人挨拶	131
私の嫌いなもの	91
ミーとムーとクマ	76
母の死の日	18

目次

母に贈ったオルゴール	84
九官鳥のレナ君	86
春奈卒園のお礼文	89
高知の日曜日	92
祖谷倫代さん結婚式の祝辞	95
ハイサイおじさん	98
M氏作、マル秘宣戦布告	102
私のお父さん	105
サミュエル・ウルマンの詩「青春」	109
タケノコの話	120
薬王寺	121
印象的な言葉	142
北窓看春	162
四国霊場八十八箇所巡り	182
托鉢の三者三様	182
映画「タイタニック」に学ぶ事	242
今も変わらぬ春	262
高山植物に魅せられて	282
かがりび	232

	あとがき	34
	持山家の様子（イラスト・次女春奈・六歳のとき）	62
付録	「あまやどり」に頂いた礼状集	72
葉書		73
書簡		247
編		23

# 発心の道場

## あまやどり

小学五年生か六年生の夏だった。入道雲が青い空の一部をくつきりと白く占領している真夏の昼下がりで、近くの小川に鮒を釣りに行く私に声をかけた娘さんがいた。二軒向こうのパーマ屋の娘さんで、もちろん美容師だが年の頃は二十歳前後だったろうか。仕事が休みだったのか、私と一緒に釣りをしてみたいとのことだった。

その日の釣果がどうであつたかは記憶にないが、とにかく釣りを始めて一時間もしない内にゴロゴロと遠くで空が鳴っているなどと思う間もなく、ドサーッときた。町外れの小川だったので家までは帰る余裕も無く、慌てて駆け込んだのがお風呂屋さんの物置小屋。その小屋の中はオガクズの山であつたが当時の銭湯の燃料だったのだろう。そのオガクズの山の中で私とお姉さんは夕立の通り過ぎるのを待つことになる。

トタン屋根に弾ける雨の音がバリバリともの凄く、ピカッと光ってゴロゴロを聞くまでの数を勘定しては、どうか雷様が落ちないようにとお姉さんと二人で祈つたものだった。

やがて屋根のバリバリはパリパリに、そしてポツポツへと優しく変化すると同時

に暗かった空も明るくなってきた。

二人の心にもゆとりが出来たのだろうか、お姉さんのほうから、ずぶ濡れになった私が大丈夫かと心配してもらった。その言葉に何だか言うに言われぬ照れを感じつつ私も精一杯、大人ぶって、やはり、ずぶ濡れの彼女を心配してみせたものがある。

「服、ぬれてしもたなあ」とたつたひとこと言っただけなのに、随分長い話をしたような感じがしたのは、何故なんだろう。

服が濡れていることを心配して無意識に私の手のひらが、白いブラウスの上からお姉さんの胸に触れたからだった。

お姉さんの胸は豊かだった。そつと触れたつもりの手のひらだったが、止めども無く沈み込んで行く感じがした。柔らかくて温かだった。そして何よりも濡れた布地が胸の肌色を優しく透かせていたのが眩しかった。

「もう帰ろうか」

「うん」

「すぐ乾くわよ」

「うん」

「また釣りに来ようね」

「うん」

なんだか恥ずかしくて「うん」以外なにも言えなかったのは何故だろう。

## 父の死の日

父が死んだのは「母の日」の翌日だった。五月十日が命日だから、当時の母の日は五月九日ということになる。死の前日が母の日とは少し残酷な組み合わせであるが、ともあれ幼稚園の遠足で家族揃って動物園に遊んだのが最後になるうとは本人も知る由も無かった筈である。予感があったのか、妙に家族揃っての記念写真を撮っているのが気にかかる。私が六歳、弟はわずか一歳になったばかりであった。

幼稚園の四角い帽子をかぶりキリっとした表情の私と、ベソをかいてゴムの乳首をおしゃぶりしている弟を、どこか寂しそうな顔をした母が両腕で抱きかかえていて、一番端に父がニッコリして写っているのがその写真であり、今も仏壇の側に置いてある。

家族サービスを終えた父は当時経営していた店の集金に出かけたまま、帰らぬ人となった。その忌まわしい知らせが入ったのは確か朝の七時頃だったと記憶しているが、母の狼狽ぶりがひどかった事の方がもっとはつきりと記憶している。

神戸の自宅から三宮の店までは電車で二つ目。通い慣れたはずの母が国電の上りホームと下りホームの階段を間違えて登り、もう一度向かい側のホームへ走った事がやけに生々しく思い出される。

電車を待つ僅かの中に、蒸気機関車に牽引された列車が入ってきて、思わず嬉しくなった私が、その列車に乗れないかと母に尋ねて叱られた。何故叱られたかの理由が分かるまで、それから随分な年月を要した。

死因はショック性の心臓麻痺だった。とにかく父は瞬時に死んでしまった。

## 市電は六番が好き

私は神戸生まれ、五歳まで三宮の街に育った。戦後まだ日の浅い昭和二十五年頃の神戸はまだアメリカの兵隊さんがたくさんいて、ガムやチョコレートを貰った記憶がある。カマボコの形をした兵舎も高いフェンス越しに見られた。

主だった道路には路面電車の線路が整備され、路線ごとに番号が違う電車が走っていた。

例えば六番は大好きな上筒井のお婆ちゃんの家へ行く電車、十三番はオネシヨをした朝、癖にならないようにと將軍通りの鍼灸院へ灸に連れて行かれる電車といった具合である。

後から知った事だが、この灸を母に教えたのは祖母だったそうだ。そうと知っていれば彼女を好きでいられるわけもないのだが、当時は母の事を悪魔のように思っていた。

そんな理由で私は六という数字が好きであった。

三宮の市電の停車場は国電のガード下にある。ガードをくぐる架線が少し低くなっているの、入ってくる電車のパンタグラフが自然とおじぎをするのだが、何かそのパンタグラフが面白くて記憶に残っている。

そこで乗った電車が、ほどなく加納町の三叉路に差しかかるのだが右に行けばお婆ちゃんの家、左に行けば悪魔の灸屋である。私にとって命がけの選択をどこで見極めれば良いか、という知恵は電車に付いている番号札の発見に繋がった。すなわち十三番の電車に母が乗ろうとする時には必死に抵抗したものである。

私の父は当時、商売をしていて羽振りも結構良かったと聞く。そんなわけで幼年期の私は幸せな境遇にあった。父は当時まだ珍しかったスクーターを乗り回し、膝の上に乗せてもらった私の仕事は方向指示器である。右も左も分からなかったが、父の指示通りに小さな手を上げたり下げたりしたものだ。

そんな父が、私が六歳になったばかりの春、突然他界した。母の苦労の始まりであったが私は特別な感情を記憶していない。死というものを理解するには余りにも小さすぎた。そのせいも、本来六歳の時の六を忌むべきと思われるが、今もって六という数字が好きである。

## ゴリ金と小夜子ちゃん

五歳か六歳の頃の友達に金魚屋のゴリ金と氷屋の小夜子ちゃんというのがいた。ゴリ金は勿論あだ名で本当の名前は忘れてしまったが、ゴンタの金魚屋が訛ったものだろう。とにかく悪党で近所中の憎まれ小僧だった。一方の小夜子ちゃんなのが、私の恋人である。決して美人ではないのだが、近所に女の子は彼女しかいなかったものだから仕方なくガールフレンドにしていた。しかし、この三人が揃うときはには必ずなにか仕出かすものだから祖母は「男の子というものは五歳や六歳の時は石垣の穴にまで憎まれるものや」とよく母を説得していた。なぜ石垣の穴でなければいけないのかは今もって分からないが、とにかく小悪党だった事は確かである。

そしてその日はついにやって来た。寒い冬の日で、小夜子ちゃんの家の火鉢には炭が入っていた。三人でママゴト遊びをしていたが、ゴリ金は不機嫌であった。もしかすると私と小夜子ちゃんが仲の良いのを面白く感じていなかったのかもしれないが、なんとと言っても彼女は私のガールフレンドなのだ。

ともかく事件はママゴト遊びを始めて数分後に起こった。ぶつつけ玉、或いはカシヤク玉といったであろうか、ポケットに忍ばせていたゴリ金が、何を血迷ったかママゴト用の鍋にその火薬をいっぱい詰めて、蓋を閉じて火鉢の五徳の上に置いた。私は私でその尻馬に乗り、新聞紙をまるめて炭の上に置くやゴリ金と一緒に表

へ飛び出した。

パンパンパンと三回位は確かに聞こえたが後は音でなく正に爆発であった。走って逃げるゴリ金に私はただただ必死について行くだけで何が起こっているかも分からず、事の重大性なども当然ながら意識する暇などなかった。

その後、どのような結末が待っていたのかは記憶していない。小夜子ちゃんのお鍋がどうなったのか、火鉢が無事だったのかも定かではなく、間もなく私は引越して行き彼らとは離れ離れになってしまった。ゴリ金が写っている写真は無いが小夜子ちゃんとは手を繋いでニッコリしている写真が今もある。二人とも良きパパ、良きママになっっているだろうが、その子供たちのイタズラに悩まされているに違いない。



## 恐怖のスキップダンス

幼稚園時代の私の思い出の中で、今でも印象深く残っているものが二つある。一つはクレゾールの匂い。教室の入り口近くに高い足で支えられているホーロー引きの洗面器があり、昼食が近くなるといつの間にか消毒用のクレゾールで薄めた液が満たされる事になっていて、独特の匂いが教室に立ち込めたものだった。人によってはこの匂い、耐えがたいものだったかもしれないが、私にとってはすぐ、お弁当が食べられる合図みたいなのであって、やがてはこの匂いがすっかり好きになつてしまった。

三十年以上を経た今日でも、このクレゾールの匂いをかぐと、お腹がグーツとなる時がある。いわゆる条件反射の一種に違いないが、むやみにタマゴ焼きを食べなくなるのは当時のお弁当のおかずにお母がタマゴ焼きを作ってくれていた証拠でもある。

クレゾールとタマゴ焼きとは全く変な組み合わせの条件反射だが、私の友人には仏壇の鉦の音を聞くと腹が鳴るといふ輩もいるから、別に特殊なことではなさそうだ。

もう一つの思い出は恐怖の「おゆうぎのじかん」である。毎日一度はお遊戯の時

間と称して他愛も無いダンスを真面目な顔して、しかも女の子と一緒に踊るのがたまらなく苦痛であった。特に教室の中で輪になって座り、女の子一人がその中をスキップして回り、好きな男の子とか、お行儀の良い子がいるとパートナーに誘い、手を繋いで仲良くスキップしながら楽しそうに遊ぶのをいちばんの苦手としていた。だからわざと、お行儀悪く座っていたり、隣の男の子とふざけていたりして、難を逃れていたものだったが、そんな時は決まって先生のお叱りが待っていた。どちらに転んでも面白くなかった。

今になってよく考えてみると私もかなりの天邪鬼だったなと反省する。本当は女の子と踊りたいのについて心にもなくツツパツてみたりするのは、今と全く変わらない。もつと素直に考えればよいものかと思ってみても、つい態度や口が反対のことをやってのける。全く困ったものである。

スキップが下手だったことは確かであるが、それでも幼稚園の帰り道、誰も居ないのを確かめた上でこっそり練習をしたこともあった。しかしどうしても上手にはなれなかった。

片足で二度ずつ跳べばうまく行くのが分かるまでは、その後十年を要した感じがする。

勿論、今なら上手に出来るが残念な事にパートナーに誘ってくれる女の子が全くいない。返すがえすも残念だ。

## 柿の花

柿の花は小さくて白いベルのような形をしていて、花びらがひとつひとつ散らずにポトリポトリと花そのものが落ちるのである。

五月も半ばを過ぎる頃には一斉に落花し始め、庭の一角を真っ白にするものだが、私は何故かこの光景を見るたび悲しく思い出す事が一つある。

五歳年下の弟と二人兄弟の私だが、遊ぶ時はいつも弟と一緒にであった。私が好んで一緒にいたわけではなく、弟が必死に私にくっついて来るものだから、いつも一緒にいるだけの事ではあった。

その日は雨が降っていた。折からの田植えの時期でもあり用水は満々と水をたたえて流れていたが、私たち二人は木切れを船に見立てて遊んでいた。

小さな泡のような水草が上流から絶えず流れてきては私たちの船にまとわりついては離れ、また新しい水草がくつつく光景をボンヤリ見つめていた私の背を叩く者がいた。当時借家をしていた大家の息子であった。

私と同級生で、これまた同じ位の弟がいたものだから、よく一緒に遊んだものだったが、彼らは裕福であったから持つてるオモチャで差をつけられることを愉快に

は感じていなかった。はたしてその日も得意そうにモーターボートのオモチャを用水に浮かせて来たのであった。モーターボートの上には鍵の手に曲がった棒があり、クルクルと回せば、はずみでスクリューが回転し、水面を疾走する優れものであった。

何度も繰り返し返し彼らは遊んでいたが、私の弟の前までモーターボートがやって来た時だった。小さな手が無意識にそれを捕らえたと思つた時には、小走りで弟が逃げ始めたものだから、オーナーである大家の兄弟はびっくり仰天、慌てて追いかけて行つた。

すぐに追いついた兄の方が私の弟に向かって罵つた言葉は忘れてしまつたが、取り上げられた途端、ワーと泣き始める弟をなだめる事は容易ではなかつた。「帰ろ」と弟の手をとり家路を急いだが、下ばかり向いて黙つて帰つた。何故か悲しかったが弟はもうケロリとしていた。その分余計に悲しかった。

用水路の側には大きな柿の木があつて、その時も例の白い花がいっぱい路上に落ちていて雨に濡れていた。そんなわけで私は柿の花が落ちる頃にはいつも悲しくなるのである。

## 夜づけ

夜づけとは、「はえなわ」のことである。木沢村坂州で覚えた言葉であったが、小学二年生のことであつた。

母が中学校の教師をしていた縁でこの村には三年間お世話になつたが、大自然の真ん中で私の情操教育上、大変な好影響を授かつた土地でもある。教員住宅からは谷川のせせらぎと共に水車の音がキーコットン、キーコットンと飽きることなく正確なりズムを刻むのを聞くことが出来たし、野や山で仲間と遊ぶ事は毎日が発明や発見の連続でもあつた。

魚釣りは上級生から見様見真似で覚えたものだが当時は魚影も濃かつたせいとか、子供の細工でも結構、釣りになつたものである。川の流れのゆるい所の岩の穴には、決まって大きなハイが集団で潜んでいる。川虫をエサに、その穴の前でチラチラさせる面白いように釣れたものだ。

夜づけを教えてもらったのも当時遊んでもらっていた六年生のお兄さんだつた。丈夫なタコ糸の片方に石をくくり付け、もう一方には板切れを結ぶ。全体の長さは四、五メートルといったところか。その糸に五十センチ間隔に枝針をつけるのだが、小学二年生の私には少々難しい細工であつた。

大きなウナギ針をタコ糸に結ぶだけでも大仕事であり、不器用に糸が針の頭のと

ころで玉になった結び目を見るにつけ、これでも大丈夫なのかと子供心に心配もした。

夜づけのエサはジンゾクという小魚だが、日曜日はこのジンゾク捕りから始まる。小さな透明の網を川底の小石に張り付いているジンゾクにかぶせると、慌てて逃げずみみ網の目に頭を突っ込み、簡単に捕れるのである。そのジンゾクを可哀想だが生きたまま大きなウナギ針につけ、夜づけの仕掛けが完成する。ここまで来るのに日曜日の夕方までたっぷりかかる作業である。夕方ともなれば何日も前からめっこを付けていた場所を目指して足取りも軽く谷川の淵へ夜づけの仕掛けを沈めに行くのであるが、今から思っても危険極まりない所へよく平気で一人で行ったものだと感じる。

翌朝は月曜日で学校がある。しかし本音は学校どころではない。なにせ早く起きて夜づけを上げに行く時の胸の高鳴りはどうしようもなく、不安と期待が入り混じったあの時の緊張感は今もって忘れる事が出来ない。

昨日沈めた位置に板切れが流れに揉まれているのでたぐり寄せ、静かに恐る恐る糸を引き寄せれば、先に結んである石の重さしか感じない。やがて一本目、二本目の枝針が現れるが、たいていの場合こちらへんでは魚はかかっていない事を経験的に知っていた。問題はそれから先の針である。ドキドキと心臓の鼓動が聞こえるほどに緊張し、糸をたぐれば、いる！ いる！ 大きなアメゴが！

後は何も考えていない。獲物を片手に山道を全力で教員住宅まで走って帰るのだ。

「母ちゃん、釣れた、大きなアメゴや！」  
その時の私の目がキラキラと可愛かったと、今も母は云う。隣の住宅の教頭先生も「大きなアメゴじゃ、ボクよくやったな」と誉めてくれた。もつともすぐ後に私の針にかかる魚も運の悪い奴だといったのは余分というものだ。

その後、何週間も経ち、谷川で大声で泣いている私を見つけ、おんぶして家まで連れて帰ったのも、その教頭先生であった。その日もアメゴが釣れたものの、岩の上で転んだはずみにせつかくの獲物を谷川に落としてしまい、ベソをかいていたのだった。

逃がした魚は大きいというが、谷川の流れに吞まれていった魚の横腹の美しい紅色の斑点が最後に岩の間の白い泡に吸い込まれていった光景は今も昨日の出来事のようにはっきりと覚えている。ほろ苦い夜づけの話だ。

## シュロの実

木沢村坂州、那賀川上流域の山村である。今でこそ徳島市より車で二時間足らずで行く事が出来るが昭和三十年代の初め頃はバスで四時間の道のりであった。如何に山奥であるかが、よく分かる。

私は小学一年生より三年生まで、母が中学校の教員をしていた関係でこの坂州で過ごした。教員住宅のすぐ下には谷川が流れ、遠くから聞こえる水車のキーコットの音に恐怖感さえ感じる、寂しく静かな土地であった。

しかし寂しく静かに感じたのも移り住んで一ヶ月ほどの間だけである。山村とは云え、戦後間もなかった当時は人口も多く子供の数も相当なもので友達が出来るときには、そう長い時間はかからなかった。それどころか都会から引越してきた私は物珍しさが手伝ってモテモテだったのである。

純朴な地元の子供達は実に親切で、遊びをいろいろと教えてくれた。中でも山の中に秘密の陣地を作り、敵味方に別れての戦争ごっこは最もエキサイティングな遊びであった。

上級生が大將となり、兵隊の我々に命令を下す様はまさに旧日本帝国陸軍のなごりのようにも思えたが、野山を駆け回るだけでも私は嬉しかった。敵を見つけるや、

即戦争となるわけだが、石ころなど危険なものを投げつけないところが戦争ごつこの由縁である。

そんな或る日、上官から私達兵卒にシユロの実が配給された。黄色のシユロの実は房になっていて少しずつ、ちぎっては敵に投げつけるのである。

やがて棚田の一角で敵と遭遇するや「我が帝国陸軍ハ戦闘状態ニ入レリ」となり、見境なくシユロの実をぶつけ合う事になったが、事件はその直後に起こった。

「ワーツ」と走りながら敵と戦っていた私（実は逃げていた）は狭い棚田の端にある畦に足を引っかけ、もんどり打って下の田まで落ちて行ったのである。途中の石垣に頭をぶつけた気もしたが、着地は田んぼの土に守られてソフトなものとなった。やがて立ち上がり上の棚田を見上げれば四く五人の仲間が心配そうに覗き込んでいた。そのうち皆が「ワーツ」と大声を上げた。同時に私も何か生温かいものが顔をつたって来るのを感じて、手で拭ってみると、その手が真っ赤なのを見て、私も「ワーツ」。血だった。

「先生の子供がケガしとるぞ」と誰かが叫んだが、その声が次第に遠くなって行き、それからの記憶は暫く無くなっている。

丸太のようなガッシリとした腕が私を抱いて走っているとところから、私の記憶は再開している。

ドストドスツと衝撃が伝わるのは村に一つしかない診療所へ急ぐ男の人の足音だった。ふと、その人の顔を見たが仁王様のように顔を真っ赤にしている。現場から診療所まで一キロもあるのに彼は私を抱いて走り続けてくれたのだった。診療所は母の勤務する中学校のすぐ下にあつたものだから、急を知つた母は、すぐ駆けつけた。母の顔を見るなり私から咄嗟に出た言葉が「母ちゃんゴメン」。何故謝らなければいけなかつたのか、とにかくゴメンだつた。

医者に運んでくれたオジサンは、どんな人かも忘れてしまつたが、あの時の太い腕の感触は本当に逞しかつた。ドストドスツと力強く走る衝撃も今もつて鮮明に思い出すことが出来る。私の眉間にはその時の傷跡が今も残っているが、口の悪い友人はそれが男の勲章のように云う。月形半平太じゃあるまいし、あまり有り難いとは思つていないが、あの時のオジサンの恩は有り難いと感謝している。

毎年、シュロの実が黄色くなる五月には、ほろ苦い味の眉間の傷をそつと見るのだが、四十余年を経過して、さすがに傷跡も薄くなつてきた。

平成九年 春

## インドりんご

りんごと言えば近頃は随分と種類も多くなったものだが、私の小さい頃は紅玉と国光の二種類しかなかった。紅玉はその名のとおり、真つ赤なりんごで見るからに美味しそうなのだが酸味が強く、私はあまり好きではなかった。私は真つ赤なりんごですと歌われたのもこのりんごのことだろう。

いっぽう国光りんごも同様に今のりんごとは比較にはならなかったが、甘味の点で紅玉には勝っていた。その分見かけが今ひとつで紅玉のように真つ赤ではない地味なりんごである。そういえば紅玉は満光とも呼ばれていた。

リュックサックの中を何度も覗き込んで、その存在を確かめ明日の遠足にはどうか雨が降りませんようにと祈った時に入っていたりんごも、この国光りんごであった。又、母が新聞紙をのりで貼り付けて勉強机代わりに作ってくれたのも、このりんご箱である。箱の横には「弘前・国光」と大きなレツテルが張られていたのが思い出される。

ところが当時もう一つ、庶民には少し縁の無いりんごがあった。インドりんごである。黄色で頭がデコボコした、とてつもなく大きな奴で、その甘酸っぱい香りがたまらなく美味しそうな代物だった。

田舎の八百屋ではなかなかお目にかかれぬのだが、或る日そのりんごを食べるチャンスがついにやって来た。その日は風邪でも引いていたのだろうか、熱を出して寝込んでいる私に母がインドりんごを一つ買ってくれたのである。

部屋中に広がる香りが何とも言えず、おまけに黄金色の果皮がすごく眩しかった。味の程は夢中だったので良く覚えていないが、とにかく美味しいと思ったし、こんなことなら何度でも熱が出てくれればいいのにと勝手な事を考えもした。

ただ一つだけ不思議に思ったのは、何故インドなのだろうという事だった。学校では既に、ミカンは南方、りんごは北方の果物であると教わっていたのに、日本よりもずっと南のインドで、どうしてりんごが採れるのかが分からなかった。そんな疑問をその後二十五年余り、実に四半世紀も持ち続けた私だが、或る日やつと解決した。インドとはアメリカのインディアナ州のことだったのだ。私もロンブスを同じ間違いをしていた事になる。

ともあれ、あの日のインドりんごの眩しい黄金色は甘酸っぱい香りの思い出と共に今も脳裏に焼き付いている。

## 特二等の切符は緑の線入り

昭和三十年代の徳島と阪神は一日三便の阿摂航路で結ばれていた。当時就航していた客船の名前もよく覚えていゝる。あきつ丸、太平丸、あかね丸、山水丸、さくら丸、舞子丸、こがね丸等々であったが、中でもあきつ丸はよく利用した。乗船する度に隅々まで探検したものだから船内の様子は当の船員よりも詳しく知っていたかもしれない。

当時の客船は千トクラスであったが、客室だけは随分と等級があつて、一等、特二等、二等、三等の四つの階級に別れていた。私の乗船券はいつも三等で赤一色の何の変哲も無い切符であつたが、この赤い切符で隈なく船内を探検するのが一つの楽しみでもあつた。

一等船室には赤い絨毯が敷かれ上部デッキにつながるホール中央の階段の両脇には観葉植物の大きな鉢植えがあつて、さながら外国映画を見るような感じがしたものだ。

二等船室までは、すべて上甲板にあり風通しもよく窓も四角いのがついているのだが、私の三等船室は地下室のような階段を下りた所にありタバコの煙が充満し、人いきれでムンムンしていても快適とはいえる環境ではなかつた。加えて小さな丸い窓が何よりも面白くなかつた。海が荒れた日などは丸い窓に波が当たり、窓

枠にそってクルクルとしぶきが廻っていたのを思い出す。子供心に四角い窓の船室に一度でいいから乗ってみたいと思つたものだった。

確か太平丸の船上だったか、こんなこともあつた。私と同じ年恰好の子供が手摺にもたれ淡路島の海岸線を見ていた。何気なく前に突き出した手には一枚の切符が握り締められていて、よく見ると私のそれとは随分違つていた。特別二等と書かれたその切符の中央には鮮やかな緑の線が引かれており、それはなんとも美しく感じられたものだった。やがて彼はデッキの奥へと消えたがその入り口には鉄柵があり、何度も塗つた白ペンキの分厚くなつた板には「特二等船客以外の立ち入りを禁ず」とあつた。

淋しくは感じなかつたし、ましてや羨ましいとも思わなかつた。ただ何故太平丸だけがこうなんだろうと不思議に思つた。私の手には例の赤切符がしっかりと握られていた。

## アイスキャンデー売り

チンチンチン チンチンチン と遠くから鉦の音が断続的に聞こえると、田んぼの青い稲越しにアイスキャンデー売りの自転車が近づいてくる。

轍を立てているが、その字が「中村屋」と読めるまでには、そう長くはかからない。

中村屋の三文字を確認するや「おばあちゃん！ ナカムラヤ来たぞ！」と家に飛び込んで行く少年。これが昭和三十年代初めの頃の私であった。まだ漢字も読めない私であったが中村屋の三文字だけは訳の分からないまま認識をしていた。

当時アイスキャンデーは専ら自転車の行商で売られていて、一日に何度もやって来る。チンチンと鉦を鳴らしながら轍を立ててやって来る。

行商のスタイルは皆同じだが、製造元によってアイスの形も味も冷たさも違っていて、例の中村屋のアイスキャンデーは総合点において他を圧倒していた。「中村屋が来たらアイスを買ってあげる」と祖母がいつも孫の私に言ってくれたものである。

朝から待っていて中村屋がつかいに来なかった日もあったが、大抵は昼過ぎから三時の間に例の自転車を発見する事が出来た。ただし発見してから祖母の家を通過するまで僅か数分の間に祖母を探し、戸外へ連れて来なければいけないものだから一秒でも早く中村屋の認識ができるように子供心にも腐心した。

それにしても美しい景色であった。真つ青な空の色は今と違ってあくまでも透明で、真つ白な入道雲が緑の田んぼと青い空を仕切っていた。

夏の日の思い出として今も脳裏にある光景である。      チンチンチン      チンチンチン

## バスの車掌さんと水筒

放浪癖というのか、旅行好きというのか私は早い時期から一人でアチコチ出かけるのが好きだった。四歳の時スケーターに乗って遊ぶうち、三宮の自宅から随分離れた布引の交差点の真ん中で進退窮まって泣いているのをオマワリさんに助けられたのが最初の一人旅であったらしいが、その後知らないお兄さんについて阪急電車に勝手に乗り、これまた訳の分からない駅からやっとなり帰って来て母にこっぴどく怒られた記憶もある。

父の死後、母の出里である徳島に帰ってからは神戸のおばあちゃんに会いに行くのが楽しみで一人の船旅も度々だった。客船に乗るたびに隣の人と誰彼となく仲良くなり、その実、ちやっかり面倒をみてもらっていた。東京の大学生もいたし、新婚のカップルもいた。

大阪の息子さんに会いに行くというオジサンとオバサンには特に長くお付き合っていた。毎年秋季には郷里で収穫する立派な柿を送ってもらっていた。

柿の来なかった秋、オジサンは亡くなった。お葬式には行けなかったが後日、お線香でもとオバサンを尋ねると泣いて喜んで下さった。

知り合った当時十歳の私も、その時はもう三十四歳、実に四半世紀のお付き合ひでもある。

五歳年下の弟を連れて船旅をすることも度々であったが、船の中で迷子になるやら、退屈してグズルやら、果ては船酔いをして背中をさするやらで非常に手間が掛かったものだから、私は自然に一人旅が好きになっていった。

しかし、例の大きなクリクリした目で「兄ちゃん」「兄ちゃん」と慕ってくるような満更悪い気もしなかった。

確か夏休みの眩しい太陽が照りつける昼下がり、バスから降りて神戸行きのお客様乗場まで弟と私は一目散に駆けていた。きつと心は神戸のおばあちゃんの家だったに違いない。

「ボクウー、水筒忘れてるじょー」の車掌さんの声が今も懐かしい。弟の忘れた水筒を見つけた彼女がバスのドアから身を半分以上のり出して、かの水筒を振っていた。

真っ白のブラウスに紺のスカートの制服がよく似合う車掌さんの水筒を振る手とブラウスの白さが、その日の太陽のように眩しかった。

## 父の思い出

父は三十六歳で他界した。当時母は二十九歳、私が六歳、弟に至っては満一歳になったばかりという状態だった。以後母の超人的な頑張りのお陰で私たち兄弟は父のいないハンデイを感じることなく立派に成人させてもらった。母には大いに感謝しなくてはならないのだが、未だに親孝行は出来ないでいる。

父が亡くなる前日が母の日であったが、神戸の王子動物園での一家揃っての記念写真が最後の父の映像である。死を予感していたのだろうか、父の表情が何かしら淋しそうなのが三十年を経た写真からも読み取れる。それにしても一歳の弟がゴムの乳首をくわえ、大きな目をクリクリさせている



姿は痛ましい。

その父との思い出は断片的ではあるが、鮮やかに残っているものがある。

夏の或る日、父と私は小松島へ向かう阿根航路の客船のデッキにいた。父が私に「あの雲は動いていると思うか？」と指差す向こうの水平線には入道雲が幾つも並んでいた。

不思議な事にこの時の記憶は情景のみならず、こころの動きまで記憶されているのである。

そのとき私はこう思った。「動かないでいるようだけれど、遠くにあるから分からないんだ。やっぱり近くへ行けば、雲だって動いていると思うな。」

そこで「動いている」と父に答えた。残念なことに父がどのように私を評価したかの記憶はないが、正解だった事は確かである。もしかすると父は「動いているように見えるが船が動いているからそのように見えるのだ」とでも言いたかったのではないだろうか。

いずれ私も天国へ召され、父と再会出来た時には「どうだ、小さい子供の割にはたいした気の使いようだろう」と言ってみよう。

少々コマツシヤクレタ話になってしまったが、可愛い思い出もある。スクーターを父は愛用していたが、ことあるごとに私をハンドルに取り付けた子供用の椅子に

座らせ坂の多い神戸の街を得意になって走らせていた。当時スクーターは貴重な存在だったに違いない。

右だ左だという父の言うとおりに私は小さな手を右に左にと方向指示するのが役目だったのだ。

後頭部に感じた父の吐息が今も蘇る。

今年、私はついに父の享年を追い越してしまった。仏壇の遺影もこれからは目を追って私より若くなっていくことだろう。

昭和六十年 著

## アーモンドチョコレート

アーモンドチョコレートなる菓子が出回ったのは昭和三十五年頃であろうか。確か今の天皇陛下が「皇太子ご成婚」とかで世の中沸き返っていた時であった気がする。赤胴鈴之助や月光仮面もこの時代ではなかったろうか。

それまでのチョコレートといえば森永や明治のミルクチョコレートが代表格であつて、いわゆる板チョコであつた。そんな常識と伝統をひっくり返したのがアーモンドチョコである。お山の中にカリツとしたアーモンドナッツが入つていて、その香ばしさとチョコレートのまろやかな甘さのハーモニーは何とも表現し尽せない美味しさであつた。

製菓会社のコマーシャルを手伝う気持ちはサラサラないが、とにかく革命的な商品であつた。しかし問題はその価格。一箱六つの山で五十円は、キャラメルが二十円、たこ焼きが六個で十円の時代だから、その高価さが容易に分かるというものである。因みに現在このチョコレートは十二個入りの箱が二百円であるから物価の優等生かもしれない。

ともあれ五十円もするこのチョコレートは私と私の弟にとつては高嶺の花で、いつかは買つて食べようねと兄弟の契りも固く機を窺っていた。

程なく三個の山だが三十円が発売されるやチャンス到来、二人は十五円づつを出

し合つて、お菓子屋へ一目散。五年生の右手と幼稚園の小さな左手が一つのアーモンドチョコの箱を大切に持つて二人はスキップしながら家路を急いだ。

たった三十円のお菓子一つでこんなに幸せになれた時代はその後全くなかつたし、これからもないだろう。そんなよき時代だった。今もアーモンドチョコレートの箱をスーパ―などで見かけるといつも、あの頃を思い出す。

つい先日も弟に確認してみたが、彼もハッキリと記憶にとどめていた。しかし一点だけ弟と記憶が違っているところがあった。曰くには三個の山のチョコを分ける時、私が二個で弟が一個だったと言うのである。私は一個の山を半々にして平等に一個半ずつにしたと記憶しているのだが曖昧で確信は持てなかつた。

最後は弟の具体性のある証言で結論が出た。つまりは私が彼に「チョコレートは子供がたくさん食べ過ぎると鼻から血ィ出して死んでしまうんぞ」と言ったのとこと。本気にした弟はこのひとことで「兄ちゃん二個食べてもええわ」と言わざるを得なかつたそうだ。

私にとつては全く覚えのない話ではあるが、弟は今も顔を真っ赤にして悔やみを言う。果ては法事で集まつた親戚衆にも、触れ回る始末である。誠に食い物の恨みはオソロシイ。

## 弟と袋入りジュース

私と弟は五歳も歳が離れているものだから子供の頃の私の兄貴ぶりは横暴を極めたものであった。喧嘩をしても歯が立たず、知恵比べでも経験に勝る私を前にして、弟はさぞかし悔しい思いに耐えて来たに違いない。

それにも拘らず「兄ちゃん」「兄ちゃん」と慕ってくる彼に、私も少しくらいは兄貴らしい事をしてやった事もある。

小学校までは距離があつた私は自転車で通学していた。弟は保育園児であつたが彼を荷台に乗せ、登下校を共にしたものだつたが、その自転車が大人用のセコハンで、背がクラスで低いほうから一・二番の私には少々どころか、異常にサドルが高すぎた。つまり私のお尻はついぞ、その自転車のサドルに腰掛けることなく左右に振り振り必死にペダルを漕ぎ続けることを余儀なくされていたのである。その後ろ姿を見た近所のオバサン連中は弟思いの良き兄貴だと吹聴してくれたものだった。

しかし聞こえの良い話はここまでで、私の良心はいつも弟いびりの罪の深さに後悔し続けている。

たくさんのいびりの中でも脳裏に焼き付いて忘れられないのが袋入りジュースの一件である。

当時、清涼飲料水といえばラムネ、サイダー、アップル水くらいなものだが、それ

でも子供のお小遣いには高すぎた。やむなく買い求めるのがビニールチューブ入りのジュースとは名ばかりで着色したサツカリン水とでもいうべき優れものである。しかししてその色彩の豊かなことにおいてはラムネ、サイダーの比ではなく赤、青、緑、黄色とほぼ原色の品揃えであり、細いビニールチューブを吸うたびに、私達の舌も夫々の原色に染められたものである。味は覚えていないが、どの色も同じ味であった。このジュースが弟いびりの主役となるのである。

二十円で四本の袋入りジュースを買った或る日の事、私は初めからおもしろくなかった。四本のジュースの色が赤、緑、うすい黄色、白となっていたのが気に入らないのである。うすい黄色はどう見ても白と同じでおいしくなさそうなのだ。気に入らなければお店で言えばよかったものをそこで言えないのが私の悪い癖でもあったし見栄っ張りなところでもあった。やむなく私は赤とうすい黄色、弟には緑と白を持たせて家路を急ぐことになるのだが、途中で私がうすい黄色の方を道に落とすってしまった。すぐ後ろを歩いてきた弟はそのジュースを思わず踏んづけるわけだが、ここで私のわがままが一気に噴出した。弟を激しく叱責した私は、ここぞと弟の緑のジュースと交換することを承知させて一応の決着をみるわけだが、可哀想にうすい黄色と、白のジュースしか残らない弟は、どちらとも見分けがつかない、冴えない色のジュースを両手にしっかりと持ち、その小さな手を並べて私に言ったものだった。

「兄ちゃん、このジュース、よう見たら色がちがうわ、うまそうやなあ。」

完全に私の負けであった。自分のわがままの罪にその時、初めて気がついた。今でもあの時の袋詰めジュースの色が蘇る。私の原色の赤と緑に比べ、弟のうすい黄色と白の配色の何とエレガントな事か、そして何とおいしそうな組み合わせの事か。

## 目から火が出た作戦

子供の兄弟喧嘩というものは年齢の差があまり無い兄弟に発生するものであって、歳の差が大きくなれば、喧嘩以前に実力差がモノを言ってしまうて、むしろ弱い者イジメの様相を呈するものである。

私と弟は五歳違いだから、どちらかと言えば後者のほうである。時には「窮鼠かえつて猫を食む」の予想もしない逆襲にたじろぐ場面もあったが、おおよそのところは何をされても我慢して、じつと耐えるのは弟のほうだった。

いじめが昂じるとなかなか手の込んだ仕掛けも登場することになり、そのダメージも比例して大きくなって行くものである。

それらのイジメの一つが「目から火が出た作戦」であった。この作戦の名は後日に私が勝手に命名したものであるが、我ながら完璧であったと今もって悦に入っている。

イジメの仕掛けはこうである。まず寝床をとることから始まるが、ここが肝心なのであって、弟の枕がちょうど畳の継ぎ目に来るように布団を敷いておくのである。

その継ぎ目に和バサミを差し込み、上から押すとハサミが自分のバネでチョキンと糸を切ることが出来るようにセットをするのである。後はすこぶる簡単で糸をハサミの刃の上に張り、糸の一方を固定し、もう一方は壁から天井へと引き回し、先

に石鹼箱をくくりつけておくだけで完了する。もちろん石鹼箱の中には新しい石鹼を入れておき、程よい重さを確保することも忘れてはいけない。また糸が切れて石鹼箱が落ちて行く所に犠牲者の頭がなくてはならないので、かなりの計算力も必要であった。

果たして、夜になり仕掛けを完了した私は弟に寝る事を勧める。当時は一つの布団に二人で寝ていたから、こちらにも命がけである。なるべく一方の端の方へ寄って背を向けて寝ていると弟がソロソロと入ってくる。弟は暫く真つ暗闇の中で枕の位置を頼りにどうやら自分の寝る場所を探している気配であったが、やがてヨイシヨとばかりに横になった。

スルスルッと糸が滑る音がしたか、しないか分からないうちに「ガチン」と音を立てて石鹼箱が弟の頭を直撃した。「成功や！」と笑いたくなるのを必死にこらえている私に、弟は大きな声で言った。「兄ちゃん！目から火が出たわ！」

真つ暗闇の中で弟は何を見たのだろうか。きつと写真のストロボを至近距離から見たようなものだったに違いない。少し可哀想なことをしたとも思ったが、成功した喜びにそんなことは打ち消されてしまった。計算どおりのピッタリの結果だった。

その日を境に兄弟は分かれて寝る事になったが、私が小学五年生、弟はまだ幼稚園児だった頃と記憶している。

## へたつきリンゴ

私と弟とは五歳も離れているものだから、お互い幼い時代はその実力差を利用してよく弟を騙したものである。騙される弟も兄貴は絶対であると信じていたのか何の文句も言わずに私にくっついてきた。今もって兄弟仲が良いと他人から言われるが、これは弟の忍耐によるところが大きく、兄の私の人格によるものでない事はよく分かってゐるつもりだ。

私が小学六年生の頃だったと思うが、当然弟は小学一年生のチビさんである。母からおやつにリンゴを一個、二人で分けなさいと渡された事があった。包丁で二つにスパッと切るのだがリンゴの中心から出ているへたまでは二つに切ることは出来ない。当然どちらかの半分の方にへたをつけたまま包丁を入れる訳だが、弟はへたつきリンゴが大きいことを知っている。

そこで私の悪知恵が働くのだが、まずリンゴを上から二センチ位まで縦に切り、次はへたのついた半分の側面より中心に向かって横に切るのである。そうすると上からへたを引つ張ればフタ状のリンゴだけが持ち上がり、大部分のリンゴは残る勘定になる。

果たして弟の目の前でリンゴを両手で包み、上から包丁の切れ目がよく分かるよ

うにして好きな方を選ばせれば一も二もなくへたつきの方を指定した。

後で文句を言ってもダメだよと念を押した上で弟にへたを引っ張らせると、パカツと音がしてフタのリンゴが手元より離れていった。作戦大成功である。

弟はまだ騙されていることも理解できずに呆然としている。最後は泣きべそをかいて恨めしそうな顔をして私を睨みつけている。あまりに可哀想だったので結局は半分ずつリンゴを仲良く分けておやつにしたが、それ以来、弟は絶対に自分から二者択一をしなくなった。兄である私も責任を感じて露骨な騙しはしなくなったが、あの時の痛快さは忘れられない。

## 弟の世話

私は二人兄弟、五歳年下の弟がいる。今でこそ、どちらが年上であるか分からなくなってきたが、子供の頃はこの五歳の差が絶対的なものであった。

喧嘩になっても実力で負けるわけもなく、弁も立つものだから弟はいつも私の下でペシヤンコになっていた。時として悪代官よろしく無理難題も押し付けるし、おやつの特取なども税金のようなもので、私のわがままは日常化していたが、弟はいつも「兄ちゃん」「兄ちゃん」と慕ってくれたから不思議と言う他はない。

母子家庭であったので、母が仕事をしている時間は兄弟二人で留守番をする事が多く、遊び相手も私しかいなかった弟にしてみれば、ひどい目に合っても文句を言えない立場にあったのだろう。



しかし、反面、私も兄としての義務を大いに果たしてきたつもりでいる。自分としてこき使ってきた罪の意識もあつた私は弟の面倒も見てきたつもりでいる。

小学五年生の時、転校の都合から当時幼稚園の弟を自転車に乗せ、まる一年間、隣町から通学した事は近所のお母さんたちの間でも評判になつた事があつた。小柄な私は自転車で乗るとペダルに足が届かない。届かない分はお尻をずらせて補うもののそれでも届かない。仕方が無いので暫くそのまま待っているとペダルの方から回転して足の届く所までやつて来る。その繰り返しなものであるから私のお尻はついぞサドルに腰掛ける事なく自転車が進むという按配なのだ。「いいお兄ちゃんだね」と言ってくれる例のおバサン達の声が私を後押ししてくれた気がするが、弟に対しては面目躍如にもなつた。今でも弟に「俺の背の小さいのは子供の頃お前に苦労をかけられたからだ」と何かにつけて言うのだが、最近ではめつきり効き目が無くなつてしまった。それじゃもつと効き目のある話は無いかと探してみても、結局威張つてばかりで、いじめつぱなしの事しか思ひだせない。

毎日、放課後に幼稚園に迎えに行くと、とつくに終わつてしまつた人気の無い教室の小さな椅子に、ちよこんと座つていたオチビさんが、目を丸くして「兄ちゃん」と、大きな声を出して走り寄つて来る光景を今も鮮明に思い出す事が出来る。もうあれから四十年経つてゐる。

平成十年 著

## 紙芝居

昭和三十年代初頭は私の小学校時代であった。正確には昭和二十九年に入学しているのだが、ともあれ三十年代初頭に私の小学時代の思い出は集中している。

紙芝居も多くの思い出の一つである。路地のちよつとした広場にそのオッサンはいつも三時にやって来た。幅の広いタイヤをつけた黒い自転車に乗ってやって来た。すばしっこい奴はどこにでもいるもので一番にオッサンの所へ行く奴がいた。彼は拍子木打ちのアルバイトにありつく事になる。つまり町内に拍子木を打って回り、紙芝居が来た事を触れて回るのが役目なのだ。給金はないが好きなお菓子を貰ったうえに一等席で紙芝居を見物できる事が報酬であった。私も一度はやってみたかったが一種の照れ臭さがあったのか実行はしなかった。紙芝居のお菓子の定番は水飴である。二本の箸の先端に水飴をつけた物だが、まず二本の箸で飴を支えた上で、残りの一本の箸を8の字状に回すのが一般的な食べ方であった。クルクルとコネテいるうちに飴は真つ白くなつて少しばかり柔らかくなる。柔らかくなつたところでチビチビとそれこそ舐めるように食べるのである。

ところが、この水飴がしばしば騒動を引き起こす。即ち紙芝居に夢中に見入っているうちに飴が溶けてきて箸から長く垂れ下がりが始まるのである。垂れた飴が時として隣の女の子の髪にくっついたりすると、もう大変。飴を回収する事しか頭にな

い悪ガキと、それでも町一番の美少女と思ひ込んでゐるハナタレ娘の一騎打ちが始まるのであつた。

たいていは紙芝居のオッサンに「そこんとこ、ドウルサイゾ！」のひとことで終わるのであるが、飴を食べ損なつた悪ガキと髪の毛をベタバタにされたハナタレ美少女の確執は翌日に紙芝居が来るまで持ち越される場合もあつた。

件の男の子が私ではなかつた事だけは名誉のためにも言つておきたい。

その他のお菓子といえばスルメの足を甘露煮にしたものがあつた。どちらかといえば私はこのスルメが水飴よりも好きだつた。ところがこれにも厄介な問題があつた。スルメを包んでくれるのが新聞紙なのである。当時の印刷技術の問題なのか、それともインクの問題なのか新聞の文字がスルメに写るのである。嫌だなど思ひながらいつも食べたものだつたが、昭和三十三年に食べたスルメに「皇太子ご成婚」と写つていたかどうかは確かめるべくもない。

もう一つ、バクダンがある。竹筒の先にイモ飴を巻きつけたものだが、くっ付かないようにメリケン粉をたつぷりと塗りつけた代物であつた。竹筒を吹くと当然の事ながらメリケン粉が飛び出すので前にいた子供の顔は歌舞伎役者のように白塗りとなる。そこで又、喧嘩が起こり場内騒然となつたところで例のオッサンの一喝があり、ジ・エンドとなる。

そんなこんなで紙芝居も終わりになるが、最後に必ずクイズがあった。クイズに正解すればもう一個、お菓子を貰えるとあって子供達は必死になる。五円玉を釣竿の先から吊るした絵があつて、オッサンがもつたいをつけながら、「お寺にある物、なーんだ」と言うと、すかさず「つりがね」といった具合にである。この答えは私が本当に当てたものだから、未だに忘れられないでいる。

悲しい思い出もある。お小遣いのない日は、ただ見と称して遠巻きにして遠慮しながら紙芝居を見るのである。いつも、ただ見は大勢いるので別に気にしなくても良いのであるが、私はことのほか恥ずかしかった。

甘酸っぱくもあり、ほろ苦くもある思い出と共に、昭和三十年代の私がそこにあつた。

カチカチカチと響く拍子木の音は最近の街角では聞こえない。

## 恐怖のハチノス取り

小学生時代の遊びといえれば釣りが主流だった。テレビのない時代のこととて、家の中では退屈で仕方が無かったので子供たちの遊びは自ずと戸外に限られた。

その釣りと云っても近所の小川で鮎やハイを釣るのであって、竹竿にくくりつけた素人細工の仕掛けにゴハン粒を付けるだけでよく釣れたものである。

夏が来て、アシナガバチが軒下や屋根瓦に巣を作り始めると私は忙しくなる。このハチノスがどれ位の大きさで、いつ取れば最高の状態であるかを把握しておかなければならないからだ。ハチの子はハイを釣るには一番の餌であって、少なくともゴハン粒の三倍の釣果が期待できた。しかしながら、このハチノス取りが大変なのである。軒下のやつは棒で叩けば落ちて来るが、屋根瓦の下のやつが厄介このうえないのである。ところがそのような所にこそ大きな巣があるものなのだ。

大抵の巣は二匹位の親バチが見張りをしているので、この親蜂を追い出すことから作業が始まる。屋根の上で忍者のように張り付いて棒でつくと親蜂は猛然と飛び出して来る。ここで慌ててはいけない。じっと我慢していると、やがてはハチノスを落とすタイミングが絶対にくるのでそこをすかさず失敬するのである。失敬した巣にはぎっしりとハチの子が詰まっついていて、その数の二倍のハイがその日の午

後には確実に釣れたものだった。

しかし、大失敗もあった。大変な目にあつたのだ。ハチノスを捕る時期を間違えたのである。つまり蜂の子がみんな成虫になって羽化している巣をついたものだから、たまらない。数十匹の蜂が群れをなして、一気に噴出してきてしまった。

真夏の炎天下、ましてや屋根瓦の上である。仰向けになり瓦にピツタリ張り付いて身動きも出来ない私の顔の上を興奮した蜂がブンブン飛び回る光景は正に地獄であつた。

汗が出て目に入っても拭く事も出来ない。手でも動かさうものならそれこそハチノスになる程、集中攻撃を受けたに違いない。情けない事になったと子供心に反省もしたが、その後数十分経って、開放された時には脱水状態になっていた。三箇所くらいは刺されていて、アンモニア水を顔中塗られて、目がパチパチしたことを昨日のように覚えている。

今時こんな事をする子供はいないのだろうか。恐ろしい思い出である。

## 弁当箱の穴

私が小学校から中学校にかけて使っていた弁当箱は少し黄色身を帯びたアルマイト製の長方形のものであった。私だけが特別なものではなく、みんな似たり寄ったりのものを使っていた。

おかず入れなる代物もあった。ゴムパッキンが蓋の内側に付いていて、両側の止め具でパチンと閉めると中の汁等が漏れない構造になっていた。止め具には小さなローラーが付いており、これが回転することによりスムーズに蓋が閉まり、尚かつパッキンをしつかりと押さえる役目もしていたものだ。

ともあれ弁当箱とおかず入れは親亀・小亀の関係で大きな弁当箱の上に小さなおかず入れを乗せて白いハンカチで包んで持って行くのが標準的な弁当であった。

しかし、おかずが少ない時などは弁当箱のゴハンの片方を斜めに押して、その空間に申し訳なさそうにおかずを同居させてもらい、弁当箱だけ持っていく日も少なくはなかった。

タクアンなど同居した日には机の中から温かいゴハンに熱せられた臭気がムンムンして困ったこともあったが、クラスでいつも同じような立場の友人がたくさんいたので別に恥かしいと思った事もなかった。

弁当箱にもう一つ共通していたことがある。それはフタの中央に決まって開いている穴である。つま楊枝が通るくらい小さな穴だが、たいていの生徒さんの弁当箱にはこの穴があった。穴をよく見ると回りが白く粉を吹いたように膨らんでアルマイトが腐食しているのだが、これは梅干のせいであった。ゴハンの真中に梅干を入れるものだから、そこに接触する部分だけが塩分で次第に腐食して行き、ついには小さな穴を開けるのである。

この穴には困った問題が一つあった。昼食時にお茶を飲む時である。ヤカンからお茶を入れるのは、たいていは弁当箱のフタだったものだから、穴のあるフタにお茶を注げば当然のことながら、漏れるのである。

仕方なしに人差し指の腹で穴を押さえてお茶を入れ、一気に飲み干すしかなかったものだから、お茶をゆっくり飲むことはできなかった。又、熱いお茶の時なんかは指を離すわけにはゆかないので、我慢しながらフーフー息をかけお茶を冷ましている光景がクラスのうちこちで見られたものだった。今となつては懐かしい。

かくして私は弁当箱のフタについて見た穴から中学時代の青春を見つめていた。小さな穴だが大きな世界を見聞きする大切な穴だったかもしれない。

最近の引越しまでその弁当箱を見かけたが、今はもうどこへいったか、無くなつた。

## 頭を使え

高校の受験勉強をしていた頃は借家住まいであった。中庭の井戸を囲んでコの字型に古い木造の家が三軒あり、その一つが我が家である。勉強をしていた部屋はその井戸の正面にあったのだが、ここで一つ困った問題が起こった。

井戸には自家用水道に供するため、モーター付きのポンプが設置されており、どこかの家で水を使用するたびにモーターのスイッチが自動的に入る仕掛けになっていた。しかし寄る年並みでモーターの音がヒューンとすこぶるうるさい。そのうえ停止する直前にはキュルキュルと叫び声が一分ほど続き、最後にパキューンとかままして事切れるのである。

もとより勉強に集中しているわけでもないのですが、ポンプのスイッチが入っている間は当然イライラするし、能率の上がらない事この上ない。三軒共用の水道だから、どこかの家で水を使えば当然スイッチが入る。ひどい時はしょっちゅうヒューン・キュルキュル・パキューンを繰り返す、誠に厄介な代物だった。

或る日の事、このポンプ君が止まらなくなった。キュルキュルとわめき続けるのである。たまらず飛び出して機械を覆っているカバーをポンと叩くとパキューンと

止まった。しかし何度も同じ事になるので勉強は寸断されてしまう。これでは敵わないと頭を使った。

まず紐にこぶし大の石をくくりつける。そして井戸を覆っている屋根の梁にクギを一本打てば自動停止遠隔装置の出来上がりとなる。つまりポンプ君の直ぐ上に石が来るようにセットしておき、梁のクギ經由で紐を勉強部屋の窓の隙間から室内に引き込み、最後は私の机に結びつけるのである。ここで再び頭を使う。輪ゴムを三本ほど束ねて机の脚に通し、そのゴムに紐を結ぶとうまい具合にクッションが効くのである。

結果は大成功だ。手元で紐を引き弾みをつけて離してやると、吊るした石が丁度良いタイミングでポンプをコツンと叩くのである。一回でパキューンと止まつてくれた。

成果はこれだけに終わらなかった。運良く大家さんが井戸端にいる時に、この遠隔縦装置が働いたものだから、大家さんはビックリ。紐の出所を辿ってみれば、そこには勉強中の私がいた。早速ポンプを修理してくれた。油もたっぷり差したのか、回転音もしなくなりこんなに静かな機械であったかと驚くほどであった。頭を使って良かったと思つた。

## ホックと肩ひも

ブラジャーなるものが一般的に使われ始めたのは、いつ頃からなのだろうか？ 語源からすればフランスの貴族が使い始めたのかも知れないが、アメリカ映画を見れば随分と昔からあったようだ。

日本にも早くから上陸していたに違いないが普及したのは、やはり戦後しばらく経った頃、或いは昭和三十年代ではなからうか。

私はことのほか、このブラジャーに興味を持っている。女性の下着もいろいろあるが、何よりも美しい下着であると信じて疑わない。女性の最も女性らしい特徴である乳房、つまりオッパイを美しく飾る、或いは美しいと欺く、この下着は他の物とは一味違う造形美を持っている。つまりブラジャーだけは着たり、はいたりする物ではなく、着ける物なのである。従ってその機能上、ホックがあつたり肩紐があつたりと誠に難解な構造を持っている。しかし、一度身に着けるや、これほどシンブルに体を飾るものはなく、鑑賞に堪える点でも他を圧倒していると思うわけである。

大学の卒業を前に就職活動をしていた私は、ワコールを迷わずゼミの教授に告げ

ていた。

理由は二つあった。一つはこの企業の将来が明るい事。二つ目は男子として女性を美しくするための仕事に就くことも捨てた物ではないという事であった。

教授も親身になって協力してくれてワコールの人事部まで電話を掛けてくれたが、今でこそ大会社のワコールも当時は京都の一企業に過ぎず、大量の人事採用の必要がないことから公募をしていないとの理由で、あっさり断られてしまった。

本当のところは群馬の駅弁大学などお呼びでなかったのかもしれないが、教授が私の事をゼミ一番の学生のように嘘をついた事が良くなかったのかもしれない。

惜しいチャンスを逃した。この会社は素晴らしく成長するだろうと予想していたが、まさしくその通りとなった。その当時、若い女性くらいしか身に着けていなかったブラジャーは、今では小学生からオバアちゃんまで皆、使っている。

白一辺倒だったのがいろんな色彩と色々な形にと発展して行くのを見ながら、今更ながらに私の判断は正しかったと信じている。

さて私の高校は男子校であった。正確にはクラスに三人ほどの女性がいたが、この女性が少なからず私のブラジャー好きに影響していることは間違いない。

私のすぐ前の席に、その少ない女性が席替えされて来たことがあった。極めて幸運なことであるが、その女性がブラジャーを着用していたものだからたまらない。

夏服のブラウスの薄い布地越しにホックとか肩紐が丸見えなのだ。

勉強になんか、なったものではない。ホックは三つあって、強・中・弱と調節が出来るんだとか何とか考えているうちに終業のベルが鳴るときが度々であった。

その頃から勉強が出来なくなったのか、もともと出来が悪かったのか、或いはその両方なのか、その後私は志望大学に二度挑戦し、共に失敗している。

志望校からならワコールに入社出来たという保証はないが群馬の大学からでは少々無理があつた事は間違いない。

ともあれワコールを諦めた私が就職したのは郷里の銀行であつた。全く脈絡のない職業を選んだものだが、もう二十七年も勤続できている。不思議なものだ。

平成九年 著

# 修行の道場

## 岡山の祭り寿し

岡山に祭り寿しという駅弁がある事を知ったのは、大学浪人をしていた秋のことだったから私が十八歳の時である。身の程も知らずに神戸大学一本勝負とカッコをつけたものの、頭の都合が間に合わずあえなく不合格。予備校へ行く金もなく、ある中学校の事務員をしながらの浪人時代でもあった。

二度目の受験が近づいた十一月下旬、東京へ遊びに行こうとフラリ乗車したのが宇野発東京行き急行「瀬戸」なる三等急行列車。四人がけの四角い椅子でマンジリとも出来ずに十六時間かけて東京へ行っていた時代である。

切符を買うだけで精一杯の私には余分なお金など殆ど無く、車中での飲食など当然考えられない状態であったが、列車が岡山駅を出る頃には夕食時となり弁当売りの声が響き渡れば、さすがに腹の虫も騒ぎ出し、思わず買ったのが祭り寿しなる駅弁だった。

祭り寿しの謂れなどを書いた小さな紙がついていて、岡山では目出度い事がある都度、この寿しを作っては近所中に配って食したとある。浪人中の目出度くない私が食べるには少し辛いものがあつたが、空腹の私にはどちらでも良かった。

今から思えば単なるチラシ寿司だが当時の私には豪華極まる弁当である。しかし、それにも増して思い出深いのが弁当を売っていた娘さんの笑顔であった。美人では

なかつたがポツチャリとした色白の人で、私よりもまだ若いように思われた。

「お弁当いかがですか」と列車の後部から爽やかな声がしたかと思うと、だんだんと近づいて来る。私は迷っていた。いま弁当を買うべきか否かを。次に食事にありつくのは明日の朝になる、深夜には弁当売りは来ない、食堂車もあるが私にその利用資格はない、等々で頭の中がいつぱいになった時、彼女が私の席にやって来た。そして向かいに座っている人が買うのを見て、たまらず「僕も一つ下さい」。彼女の笑顔が何とも可愛くて、思わず買ってしまったのだった。

束ねた髪の毛が如何にも清潔で、ふつくらとした顔の輪郭をくまどりしていた。あどけなさの残る彼女は私に駅弁を渡しながらニツコリと微笑んでくれた。営業上の笑顔かもしれないが私にとっては画期的出来事である。今もつてその時の彼女の顔をハッキリと思いつける事からしても、如何に印象的だったかが分かるとういうものである。

白い歯がこぼれ、「ありがとうございます」と言った声までが、つい先ほど聞いたかのように鮮やかに思い出す。

東京旅行を終えた私が来春の受験に向けて、もう一度闘志を燃やし頑張ったことは言うまでもないが、当初の目標は遂にながず挫折に終わってしまった。一年間の努力の後に残ったものは何も無く、辛い青春の一時代であったが、あの弁当売りの娘さんの爽やかな笑顔は今も私を勇気付けてくれる。まんざら無駄な一年でもなかつたのかもしれない。

## ルールが止まって見えた

一度だけ死にたいと思ったことがある。誰だって二度や三度はそんな気になるそうだが、幸い私は一度だけだった。

大学受験に失敗したその年は私にとって非常に苦しい一年となった。もとより浪人になって受験勉強だけに没頭出来る境遇でもなかったし、予備校など、とんでもないことであった。

初級公務員採用の新聞記事を見つけたその日のうちに応募して、採用試験の会場へと向かっていた頃に友人はといえば東京へ、大阪へと大学生活の荷物を送り出すことに余念がなく、希望に満ち満ちて徳島を去って行った。なんともやり場の無い敗北感が津波のように押し寄せたものだった。

やがて一通の採用通知が届き、某中学校の事務職員としての生活が始まったが勤務そのものは、むしろ楽しかった。しかし諦めきれないのが進学の夢であり四月からは再び受験勉強を始める事になる。勤めを終えて帰れば疲れもしていたが、夜は三時まで頑張ったものだった。夏が過ぎ秋の終わりに服のまんま乗った体重計の針は四十三キロをやっと越えていた。体は丈夫なほうだったが、ここまで来ると少々精神的にも参ってしまう。

十一月二十三日の祝日を前にした土曜日、知らず身は高松行急行の車中であつた。宇高連絡船の中でやっと自分が東京に行きたいのだと知つた。宇野駅の長い長いホームの端に待っていたのは、夜行列車の急行「瀬戸」である。

十六時間を要して東京に着いたものの、行くあてもなく結局その夜の列車まで何もしないで東京駅近辺を徘徊していた。

帰りは大阪行き寝台列車「銀河」。最上段のカイコ棚のようなベッドで寝つかれず、小田原を過ぎたあたりからデッキに出てドアを開けっぱなしにしたステツプにしゃがみ込み平行して走る二本のレールをいつまでも眺めていた。

先程から二本のレールは相変わらず正確な平行線を引きながら私の列車と一緒に走っていた。来るときの列車で弁当売りのぼっちゃりとした娘さんがニコニコしてお釣りを手のひらに乗せてくれた事を一瞬、思い出したりもしたが、やはり気になるのが二本のレールであつた。

真鶴を過ぎ熱海に近づく頃、最大の危機が訪れた。今まで猛スピードで走っていた向こう側のレールが止まって見え始めデッキからそつと足を伸ばせば、そのまま降りられるような気持ちになつてきたのだ。

なんの抵抗感もなく、前後の脈絡など考える体力もなく、不思議に周りが静かになつてきたその時、背中から大きな声がして我に返つた。車掌が見つけて注意してくれたのだつた。気分が悪くなつたので風に当たつていたので咄嗟に嘘をついた。

レールが止まって見えた

翌年の春の受験も志望校にはまたも失敗。しかし自分の実力を過信していたことにも気づき、分相応の大学へと進む事としたが、それ以後、死にたいなど思った事は全くない。いったいあの日の出来事は何だったのか。

## 高崎駅と七千円

大学入試は昔も今も厳しいものだが私は昭和二十三年生まれ、戦後ベビーブームの第一波とあって、常にも増して厳しい受験競争を強いられた世代である。頭の都合から国立大へは失敗し、かろうじて通してもらったのが群馬県の高崎経済大学であった。

実は前年の受験にも失敗しており、いわゆる一浪の身であったが浪人時代の一年間、アルバイトで少しばかりの貯えがあったものだから国立大より高い授業料を支払う事が出来たわけである。

四国の人間である私が高崎市を知る由もなかったが、合格して初めて地図帳を開き、日本のへそのような所にある高崎市を発見した時には少々の溜息が出た。

母に経済的負担をかけるわけには行かないので自活しながら学生生活を送るつもりでいたものだから、計画は最初から楽なものではなかった。一年間のアルバイトの貯えは早くから無くなってしまい、何とかなるさで列車の切符を買い、高崎駅へ辿り着いた時の所持金は、たったの七千円だった。朝夕食付きの学生寮が月四千五百円という有り難い時代だったが、入寮するや前払いで寮費を取られて、いきなり残りが二千五百円となってしまった。窮すれば通ずとはいうが、この際通じてくれ

なければどうにもならない。

考えた末に学生寮の世話をしてくれているオジサン夫婦に直訴に及んだのが正解だった。オジサン早速、学生課の上司とやらに電話をしてくれて、群馬弁でまくし立ててくれた。

「困ってる学生さんがいるんだいね、家庭教師のバイトを一つやってくんない」といった具合にである。五分もしないうちに返事があり、すぐ学生課に来いとのこと、恐る恐る訪ねてみると既に家庭教師のアルバイトを準備してくれていて、今晚にでも挨拶に行つてこいとのことであつた。有り難くて涙が出そうになつた。

しかし、一難去つて又、一難、家庭教師の家は寮から遠く、とても歩きでは無理なため自転車が必要であつた。これも投資と判断し市内の自転車屋を物色した挙句、中古の千五百円也を見つけ出し、即金で買えば残金はちよつと千円となつた。

この中古自転車は私と四年間の苦楽を共にする事になつたのだが、やはり安物は安物。三月も経たない内にカバーやらランプやら荷台が脱落して行き、タイヤとチェーンとハンドルとサドルだけのシンプルなものとなつた。学友は競輪の自転車みたいだと言ってくれたが、そんなにカッコイイ物ではない。第一雨が降ればタイヤのハネで背中が泥だらけになるのだから。

ともかくにもやっと調達した自転車で件の家庭教師の家に夕方には挨拶に行く事が出来たが、明日からでも来てくれと月謝を一か月分四千五百円頂いた。これで

助かったと実感した。きっと寮のオジサンが前払いしてくれるように頼んでくれたのに違いないと改めて人の親切が身にしみた。

今もって寮のオジサンとオバサンとは音信があるが、あの時の感謝の気持ちも忘れたことはない。反面お金の問題も一生懸命やっつてれば何とかなるさと変な自信が当時より染み付いてしまつて、今もって金が無くても平気でいられるのも困つたものである。

そろそろ老後を考えるに、慌てなければならぬ時期が来ている。あの時から三十五年経ってしまった。

平成十四年 著

## ラーメン当番

インスタントラーメンは昭和三十年代の半ば頃に発明され、昭和四十年代には爆発的に生産量を伸ばしていった食品である。又このラーメンの歴史は私の受験勉強時代、浪人時代、そして花の大学生時代の歴史とびったりと重複するのである。

この間に一体何食分のラーメンを食べたのであろうか想像もつかない。メーカーも地方の小さな会社まで含めると乱立気味であったが、次第に淘汰されて現在に至っている。戦後経済史の中の一ページを見る思いがすると、言っても過言でないかもしれない。

学生時代の群馬にも地方のメーカーが学生寮の隣町にあったが、「味一番」の名で知られていた。この商品は一袋三十円が標準であった時代にわずか十円であったため、学生の好評を博していた。しかしながらこのラーメン、三回連続して食べるとう痢をする者が出るところから、誰言うことなく「ゲリ一番」の悪名も持っていた。確か私が二年生になった頃には店頭で見かけなくなっていたので、お気の毒だが倒産したのかもしれない。

学生寮ではラーメン当番なるものがあって、毎晩、夜食にラーメン作りをさせられる係りで一年生が担当するものと決まっていた。上級生は金を出し合ってラーメ

ンを買ってくれるものだから労働力を提供するだけで一年生は空腹を満たす事が出来るという結構な仕掛けなのだが、そもも問屋が卸さない。

大きな鍋にいっぱいラーメンを炊事室で作って自室へ運ぶと大抵十人くらいの上級生が手に手に湯呑やらコップを持って待っている。「どうぞ」と部屋の中央に鍋を置くやいなやワツと早い者勝ちでラーメンを取りに来るものだから作った本人は当然割を食う。おまけに茶碗もコップも箸もないので、それらを探している間に殆どのラーメンがなくなり、お汁だけが残ることになる。誠に情けない思いをし、空腹感も倍になったものだった。

だから一年生も負けてはいない。次の機会には自分の茶碗と箸を部屋のどこかに隠しておいて戦列に加われれば少しは生存競争に勝ち残ったケースもあったが、下級の遠慮からかいつも満腹になることはなかった。

そうこうしている間に、私にあるアイデアが閃いた。炊事室でラーメンを作るのは二人の当番だけである。ラーメンを作りながら食ってしまえば部屋に帰って慌てる事もない。

それからと言うものはラーメン当番が楽しくて仕方が無かった。十人前のラーメンを一度に作るので、一人前くらい減ったところで目立ちもしないわけである。

しかし悪事は長く続かなかった。たまたま様子を見に来た先輩にバレてしまい、翌日から粉末スープを取り上げられた状態でラーメンを作らされることになってし

まった。味のついていない即席ラーメンなど食べられる代物ではない。部屋まで持っていくと先輩がおもむろにスープの素を入れ、味付けが終わってからヨーイドンとなる。結局もとの木阿弥となつてしまった。

生存競争とは知恵と知恵のぶつかり合いだとその時つくづく感じた。

## フルヤブリアキン

学生寮の一年先輩で北海道出身の古屋さんという人が居た。あだ名は「ブリキ」。ニツと笑うと前歯がみんな銀色の入れ歯であった故の命名であるが、誰言うとなくブリキの入れ歯という事になり、そのままあだ名になってしまった。

気の毒のような話であるが本人は至って冷静に受け止めていた。むしろその名を楽しんでる風でもあった。また彼の歯はすごい出っ歯であったので心無い輩はブリキデッパとも呼んでいたが人権上問題があるという事で単にブリキに落ち着いた。

短気な人で我々後輩が悪さをするとすぐに「テメーコノヤロウ」と怒り出すのであるが、その時の例のブリキの歯は正に全開、キラキラと異様な迫力があつた。その上、一緒に飛んでくる大量のツバには閉口した。

そんな彼に私は後輩の立場も省みずある提案をした事がある。

当時ナポレオン・ソロというアクシヨンスパイ映画が流行していて、主役デビッドマツカラム演ずるナポレオン・ソロの名脇役としてイリヤクリアキンというのがいた。俳優の名は忘れたがこのイリヤクリアキン氏、主役のナポレオン・ソロより男前でカッコがいいので女性の間ではナポレオンよりも人気があつた。そのイリヤ

クリアキンをもじってフルヤブリアキンにあだ名を変更してはどうかと、上申してみたのだった。

当人、最初はムツとした表情であったが、三日もすれば自分から「俺はフルヤブリアキンだ」と言い始めた。私のセンスを認めてくれたのかと思いきや、食堂のテレビで例のイリヤクリアキンを見て大いに納得しただけとの事だった。

大学を卒業して三十年以上も経て、今となつては当時の寮生で音信のある人は極端に減ってしまったが、古屋先輩とは今もつてお付き合いを頂いている。

あだ名もフルヤブリアキンは定着せず、結局は「ブリキ」のままである。

## 弥四郎小屋の男中さん

尾瀬ヶ原十字路に弥四郎小屋という山小屋がある。尾瀬沼の山小屋で長蔵小屋は「尾瀬に死す」の平野長靖さんで余りにも有名だが、弥四郎小屋は橘さんという女主人であった。もともと、この地方の苗字は九割方が平野さん、橘さん、そして星さんで占められていて、現に同じ十字路には星さんの山小屋もある。

昭和四十二年の初夏に私は初めて尾瀬を訪した。大学のクラブ活動が高山植物を研究する生物部であった関係からである。聞けば毎年、水芭蕉の頃に学生をアルバイトで雇ってくれているとのこと。奇特な女将も居たものだと思いきや、先輩に恐ろしく山好きなのがいて弥四郎小屋に住み着き、今では番頭格



にまでなっていて人事権を持っているからという理由であった。

アルバイトの内容は決して楽なものではなかった。朝は三時起床で朝食の準備から始まり夜は九時まで十八時間労働である。土曜、日曜ともなればワンサカ客がやって来て、定員百五十名の小屋に三百人を超える事もあった。タタミ一畳に二人寝て、廊下にまで溢れる事もしょっちゅうなのである。クラブの先輩からは美しい尾瀬でたっぷり自然を親しみながら、日当と交通費が支給され、これ以上のアルバイトはない、その上福島県側の檜枝岐村からは若い女性も手伝いになると聞かされていたが、自然とロマンスを楽しむゆとりなど、ハナツから無かった。

おまけに一年生の私にはキツイ仕事ばかり回って来る。食事の時間は決まって皿洗いだ。標高千四百メートルの尾瀬で、しかも水芭蕉のシーズンの水は手が切れそうな冷たい雪解け水なのである。

山小屋の朝は早く、午前四時くらいから食堂が賑わい始めるや、私の商売は大繁盛で、洗っても洗っても食器が返ってくる。こういう仕事は「お母さんの仕事」と幼少の頃以来決め付けていた私には、耐えがたい屈辱でもあった。

朝食の後はフトンの整理、部屋掃除でやっと一息つける時間が来るが、その頃にはさすがの客もカラッポになり、窓越しに見える至仏山の姿に感激し、思わず疲れも忘れるのであった。

午後は早い時間から登山客が到着し始める。私の係りは各部屋での案内係りだ。山小屋といっても弥四郎小屋は非常に大きく、部屋の種類も床の間付きの立派なも

のから大部屋まで、様々なランキングがあつた。受付の時に女将さんが部屋割りを指示するのだが老夫婦は床の間付きの部屋、行儀の悪そうな若者グループは大部屋へとといった具合である。最初は指示される通りに案内していたが、あまり混雑しない日などは若い女性で美人であれば最上級の部屋へ案内し、他の同室者のいないのを良いことに、上がり込んで話し相手をしたものだった。

午後五時から七時までが夕食タイム。これまた二時間、冷たい水とのお付き合ひとなる。片付けが終わつて最後に従業員全員が遅い夕食となるが、たいてい九時は回つていた。

腹ペコの上、クタクタに疲れているものだから食事の旨い事この上ない。おかずは毎日同じで、味噌汁にゼンマイの塩漬け、キャベツの千切り少々に、向こうが透けて見える程薄く切つたハム。ただしご飯は食べ放題だった。アルバイトだけで常時十名はいたからさぞかし米はたくさん必要だっただろう。

ところで山小屋への荷上げはボツカと呼ばれる担ぎ屋さんに頼つていた。米も味噌も野菜もプロパンガスのボンベまで、みんな人力で運ばれるのである。登山口から小屋まで我々の足では四時間もかかる道のりを、百キロ近い荷物を担いでボツカさんは毎日やって来た。さすがに「ご苦労様」と頭が下がる思いがした。

或る日の事、一人のおばあさんのボツカが到着し、荷物を開いてビックリ。ビン入りのコカ・コーラが一箱入っている。本数にしてみれば二十四本。殆どがビンの

重さであろうに、可哀想な事を頼むものだと言頼主である女将さんを非難したい気にもなった。

ところが、このコーラ、売り物と思いきや夕食後に女将さんが、「学生さん達のご苦労さんだから、今日はコーラ飲んどくれ」とポンと箱ごとテーブルの上に置いてくれたのであった。若者にはコーラが一番と思っただろうが、その気持ちの温かさに涙が出た。

その夜はことのほか、話が弾み、例の桧枝岐村から来た娘さんとも一緒になつて消灯時刻を過ぎてても、ランプの灯を頼りに遅くまで盛り上がった。化粧つきの全くない女性ばかりだったが、みんな明るく屈託がなかった。コカ・コーラのお陰だった。

コーラ一つでみんなの気持ちがこんなに変わるものかと改めて女将さんに感謝したのは言うまでもないが、山小屋まで運んでくれた年老いたボツカさんにも大いに感謝した。

尾瀬の自然は美しいが、そこにいる人も又、純粹で美しい。私がその後、尾瀬をすきになった最大の理由である。

## スピッツのジュリー

我が家で一度だけ犬を飼ったことがある。スピッツだが純粋の雑種だった。名前をジュリーとつけたのは私だったが別に大した意味があったわけでもなく、ただ何となくジュリーだった。

雑種ほど頭がいいというのは本当で、ジュリーも賢い犬だった。特に人の気持ちを探察することに関しては人一倍、いや犬一倍だった。その証拠に母と弟には彼女はなつくものの、私にはまるでダメであった。大学受験を控えて必死だった私は犬どころではなかったのだが、やはり愛情とか優しさの差が出たものと思われる。ジュリーが一番その事を知っていたわけである。私は生来、冷酷な一面を持っている。自分では悪い事だと気づいているが、やはりいろんな面でその冷たさが出てしまう。

ある夏の暑い日曜日だった。勉強に飽きた私の目の前にジュリーのご飯を入れるボウルがあり、昨夜の雨をいっぱいに溜めていた。ここで私の冷たいイタズラ心が頭をもたげて来た。ハムをサイの目に切ってジュリーに二、三個与えたところで次の一個をわざとボウルの中に落とし込むのである。

困ったのはジュリー。暫く恨めしそうな目をして私の顔と水の底のハムをかわるがわる見比べてはクーン・クーンと鼻を鳴らす。そうこうしているうちに意を決して鼻をボウルに付けてはみるもののハムまで口が届かず水を吸ってはクシャミをす

る。そして何度も同じ事を繰り返す。彼女の鼻は黒くて可愛いものだが、その大粒のブドウのような鼻から泡がプクプクと出る。まるで化学実験で水素を発生させているのに似ていて面白かった。

そんなジュリーが死んだのは次の年の夏だった。急に食欲がなくなつたその日の夕方に犬小屋の中で静かに息を引き取つたという。母と弟は交代でウチワを煽ぎ涼をとつてやつたというが、最後には例の可愛い鼻の頭に蚊が刺しても追ひ払う気力もなくそのまま死んだらしい。

私はというと学生時代をエンジョイすべく家にも帰らずアルバイト三昧の日々であつてジュリーのことなどすっかり忘れてしまつていた。最後まで優しくしてやれなかつた自分を本当に冷たい奴だなと反省した。鼻の頭に蚊が刺してもジツと耐えるジュリーと、プクプク泡を出しながら水中のハムを探すジュリーをかわるがわる連想し、このままじゃイカンとつくづく思った。犬にも慕われない人間を、人間が慕ってくれるわけがないと・・・。

ジュリーが教えてくれたもの、それは思いやりであり、優しさであり、愛情であつた。

## アルバイトアラカルト

学生時代とアルバイトは切っても切れない関係にあった。授業料の支払いのためならまだしも、食べてゆくためだけのアルバイトも数多くした。いや、せざるを得なかった。

とにかく何でも経験とばかりに手当たり次第にやってみたが、中にはひどいものもあった。

「昼食つき、半日で千二百円、酒飲み放題、先着八十名」の館内放送が流れるや、日曜日の朝の学生寮はパニックになった。私も必死だった。何せ私の部屋は食堂のある管理棟とは別棟でしかも二階の一番はずれだったものだから、パジャマのまま階段など三段ずつ駆け下りていった。あちこちの部屋から突進して来る寮生は西部劇のバッファロウの突進にも似ていて、ドドドーッと凄まじいものがあった。

幸いにして定員が多かったせいか殆んどの寮生が採用され、すぐさま出迎えのバスに乗せられた。不思議な事に誰も一体何のアルバイトをするのか知らないまま出かけたのだが、嫌な予感がし始めたのは、集合場所の商工会議所の大会議室に着いてからだった。

果たして、大きな部屋の片隅で、旅の一座よろしく役者風の男女数人がコオリを解いていた。

彼らがたった今、集合した我々を、片っ端から顔を真っ白に塗りたくるのを見て、初めて寮生全員で、これよりチンドン屋の片棒を担ぐ事を理解したのだった。

その日は高崎商店街名物えびす講とかで官軍パレードが大売出しを触れて回る仕掛けになっていたのである。どうりで学生服持参の事と但し書きがあったと思った。寮生全員赤毛か白毛を被り、顔はとうとうとオシロイで真っ白に塗られ官軍兵士に变身させられてしまった。この光景を見ただけで五名ほど脱走したと後で聞いたが根性の無い奴だとおもった。

二時間も支度にかかっただろうか、赤毛と白毛が二列に並び商工会議所前の大通りに整列した時はさすがに自分自身に嫌気がさした。私は赤毛のグループで背が低いから最前列である。私の前はさつき化粧をしてくれたチンドン屋の姐さんと月形半平太がいた。例のクラリネットとカネ・タイコがセットになった楽器が独特のリズムを作り上げ、士気の高揚を図ってはいたが、後続の寮生官軍はションボリしていた。

とにかく行進は始まった。「皆様、お待ちかね、高崎えびす講名物官軍パレードが今年もやって参りました。」と先頭の月形半平太がハンドマイクでがなりたてるや、クラリネットが何やら聞き覚えのある演歌をクネクネ歩きながら演奏し、チンドンドン、チンドンドンの姐さんが後を追う。そして八十名の寮生官軍がゾロゾロ。オマケとばかりに最後部ではテープレコーダが「ミヤサンミヤサンお馬のまーえでえ」である。生涯の思い出になったと言えればそれまでであるが、とても

じやないが胸を張って歩けたものではなかつた。

昼過ぎにパレードは終わったが街中に恥をかい廻った代償が千二百円だった。飯つき、酒のみ放題というのはウソで、アンパンと牛乳一本貰って「ご苦労さん」だった。チンドン屋の例の半平太に「兄さん、来年も来るだんべ」と声をかけられたが、官軍パレードはその年限りでなくなつたと聞いている。

## すれちがい

人の言葉と動作の間には時としてすれ違いが生ずるものである。いわゆるツーカーの仲ならまだしも、他人同士ではこのすれ違いは日常茶飯事のように起こり得る。すれ違いで思い出すのは、大阪市バスでの出来事である。御堂筋を梅田へ向っていた市バスに乗車した時の記憶だから、もう二十年も前のことであろうか。

当時の市バスには車掌が乗務していた。若い娘さんだったが「発車オーライ」の明るい声がバス中に響き、折からの五月の薫風に揺れるイチヨウの若葉にも似てなんともしゃべらない爽やかさであった。私は車掌さんのすぐ後ろに座っていたものだから、彼女の動作はよく見える。豊かな胸と大きなお尻が彼女の青春を誇張しているようでもあった。

本町を過ぎた頃だったろうか一人の男性が乗って来たが、あいにく満員で私の前の吊り手を持ち、立つはめになる。それだけでは何事もなかったのだがバスが揺れたはずみで彼の手が思わず車掌さんのお尻に触れた。当然のことながら無意識である。

ところが黙っていられないのが当の車掌嬢。キツとした目つきで振り向き、何食わぬ顔で立っている彼を睨みつけている。彼も彼とてそんな状況とは知る由もない。もちろん意識して触ったわけでもないのに、知らぬ振りも何もあったものではない。

その後も二度三度と彼女はお客を睨み続けるのだが、都合の良いことにその都度、彼はあらぬ方をみており二人は益々すれ違ってくるのであった。

ただこれだけの話であるが、知らず知らずには失礼する事もあれば、あらぬ恨みを持たれる可能性もある事を、この事件をもって勉強させてもらった。

一方、言葉のすれ違いに至ってはもっと滑稽な事があった。高崎駅のホームの立ち食い蕎麦屋での出来事である。

気の弱そうなオジサンが小さな声で「生そば一つ下さい・・・」

片や蕎麦屋の店員は群馬名物カカア天下を地で行くデブのオバサンだった。運の悪い事に後ろ向きになっていた。

オジサンの声が聞き取れなかったので大きな声で「なんだいね・・・」

けんまくに押されてオジサン、いよいよ小さな声で「きそば・・・ひとつ・・・」  
ますますワカランおぼちゃん、もう一回、前にも増して大きな声で「なんだいね

・・・」

オジサンもう真っ青な顔して、今度は勇氣を出して「あのお、なまそば・・・」

オバサンそこでやっと分かったのか、「ああ！キソバかい！」となりオジサンもやっと蕎麦にありついたのだが、背中を丸めて遠慮がちに食べる姿の一部始終を見

ていた私は笑う気にはなれなかった。

知らず知らずに人は人を傷つけている。滑稽に見えたオジサンとオバサンのやり取りの中にも人として何か大切なものが有るような気がしながら、ちようど入って来た電車に乗り込んだ。大学二年の冬だったから、もう二十歳は過ぎて、私も大人の仲間だった。

## ある青春の十九日間

東京―大阪三時間の現代、徒歩で東海道五十三次を旅行した青年がいた。何もそんなバカな真似をという人がいるかもしれないが、なぜ彼は敢えてそのバカな真似を実行したのだろうか？彼は確かめたかったのだ。果たしてつまらないものかどうかを。

その日東京の空は灰色だった。所は日本橋、三月に入ったとはいえまだ薄ら寒かったがそれでも道行く女性の装いには春は確実に感じられる日和であった。

そんな東京のど真ん中、スーツ姿の会社員やOLが足繁く通り過ぎる中、ヘンな男がしきりとカメラのシャッターを日本橋の道路原票に向かつて切っていた。背には大きなリュック、その上にはテントらしき物、腰には手拭の山ルック。道行く人も場違いな存在に一瞥をくれるものの、すぐに無視して足早に通り過ぎて行った。



彼の名は持山保信、十九歳。東京―京都間、五百十キロ徒歩旅行がいま正に始まらんとする日本橋のひとコマであった。

「ようし」、彼はそう呟くと元気に一步を踏み出した。しかしその顔には単なる遊山旅行ではないんだという緊張した気配を隠す事は出来なかつた。いやむしろこの先の長い道中、果たして辿り着けるか否かの憂いすら浮かべていた。

百メートル、二百メートル、彼はどんどん進む。一步一步また一步。右手に東京駅を見る頃には、すでに彼の額には汗が浮かんでいた。

お江戸日本橋七つ立ち 初のぼり

行列そろえてアレワイサノサ

こちや高輪夜明けて提灯消す

コチャエ コチャエ

コチャエ コチャエは昔の話、彼は華やかな銀座も黙りこくって、何も見ずに通り過ぎた。そして彼の後ろ姿を柳だけが見送っていた。

横浜、藤沢、国府津、箱根、沼津と彼は前進した。最初の三日間は足をひきずりながら歩いた。箱根では大雨と霧に泣きべそをかいた。全身ビシヨ濡れになった。静岡ではそれが祟って熱を出した。ペースも半分以下になり、もう中止したかったに違いない。今度の駅で列車に乗って帰ろうと何度思ったことであろうか。

彼は孤独であった。話し相手のいない淋しさから彼は自分とよく話をした。青春とは？ 自我とは？ 大学とは？ 恋愛とは？ あらゆることについて自分と話をした。これまで物事をこんなに深く考えたことはなかった。

砕け散って行く青春のエネルギーの一部を考える事に利用する時、彼は何かしら楽しかった。無尽蔵の若人のエネルギーをこんなにも有効に利用しているのは久しぶりの事であった。心地よい疲労が彼を包んでいった。

或る日の午後、国道一号線というのにツクシンボが一本ポツンと春を告げていた。目ざとく見つけた彼は思わず次のような会話が交わされるのを耳にした。

「危ないよこんな所へ出てきては」

「ええ、でも知らなかったの、怖いわ私」

「気をつけてな」

「ありがとう、あなたもね、さようなら」

せちがらい現代、とかく無味乾燥的な心しか持たない現代の青年にとってこれほどに潤いを感じさせる光景があっただろうか。

そうしているうちにも旅は続き、彼のテントの宿も島田、掛川、浜松、豊橋、岡崎、名古屋、桑名と移っていった。桑名で彼は二十歳の誕生日を迎えた。二十歳の

感激は彼の薄暗いテントの中でも溢れんばかりに高まっていた。彼はその夜、夢を見た。箱根峠を下る時に見た美しい富士山の夢だった。

「アツ見えた！」思わず口にした言葉だった。三条大橋が見えたのである。彼はもう殆ど走っていた。息は切れそうであった。もう新幹線も飛行機も俺を追い越せない、俺はどうとう歩き通したのだ。いろんな考えが頭の中を横切るうちにもゴールはどんどん迫って来る。あと百メートル、五十メートル、十メートル、一メートル……ヤッタ！

東京を出て十九日振りに彼はついに辿り着いた。重い荷物をしよったデンデン虫はやつとゴールインしたのである。しばし彼は呆然としていた。ただもう歩かなくとも良い事だけが事実には思えた。東京を出る時は夢にまで見た京の三条大橋に、いまさに立っているにも拘わらず何も期待したほどの感動はなかった。

やつぱりバカな真似だったかと彼はフツと思った。そしてすぐに独り言を言った。「バカな真似を確かめただけでも良かった。」

折からの夕日が橋のたもとで休む彼の瘦せた細い肩を赤く染めていた。そして彼の吐くタバコの煙は十九日間の疲労をその一つ一つに乗せて真紅の大空へフワフワと浮かんでいった。彼は黙ってそれを見守っていた。

昭和四十三年 三扇寮文集 寄稿

## 豊橋のオバサン

東海道五十三次を歩いてみたくなったのは、ふとした事からだ。お茶漬け海苔の景品に広重描く浮世絵のセットを貰ったことから始まった。単純なきっかけではあったが、小さな刺激が私の心を捉えて離さなくなり、やがてはその衝動を抑え切れなくなるまでに三か月も掛からなかった。

十九歳の春まだ早い三月五日の朝、私は日本橋のたもとよりリュックにテント、ナベ、カマ持参でヨイショと第一歩を踏み出した。京都三条大橋まで五百十キロ、十九日間の徒歩旅行の始まりであった。

概して快適な旅ではなかったものの、行く先々で暖かい人情に触れ、そのお陰で私の旅程は日一日と伸び、落伍することなく無事京都に辿り着くことが出来たのである。その十九日間の旅に人生の縮図を見て、世間の仕組みを手取るように理解する事が出来た。私は責任ある大人への脱皮を急速に完了させる事が出来た幸せ者だったのかもしれない。

旅先で出会った大勢の人の中で忘れられないのが豊橋のオバサンである。オバサンとは直接知り合ったのではないが、彼女のぐうたら亭主と知り合ったことからこの話は始まる。

豊橋にやっとの事で辿り着いた頃は、もうとつぷりと日も暮れていた。とにかく

食事をと飛び込んだのが町外れの大家食堂だったが、ここに居たのが件のぐうたら亭主である。

一見紳士風の彼は私を見つけるや、何かと面倒をみはじめた。食事はもとより酒までご馳走になり、若い頃の軍隊の話などを得意げに聞かされたものである。その時までは何処かの会社社長かと思っていた私は、酒席によって来た何やら花街のらしい女性にまでコーヒーなど奢っているのを見るにつけ、随分気前の良い人もいるものだと感心していた。

「コーヒー一杯が八十円とは安いじゃないか、皆に持ってきてやれ。」と大きな声で確かに言っていた。

食事も終わり誘われるままに彼の家に泊めて頂くことになったものの、その頃から私はなにやら一抹の不安を感じていたが、果たして彼の家に着くや愕然としたのがその住まいであった。棟割長屋の一区画はお世辞にも広いとは言えなくてオバサンと子供三人が父の帰りを待っていた。高校生を頭に三人の子供は二段ベッドを二つ並べて、父と寝床を共有している有様だった。その長男を追い払ってまで私の寝床を作ってくれるオバサンにお礼を言う言葉も失い、のこのこ付いて来た軽率さを悔いるのが精一杯であったが、歩き疲れた体は後悔の念をすぐに追い払い私は深い眠りに落ち込んだ。

翌早朝、オジサンとオバサンが激しく言い争う声で私の眠りは覚まされた。「弁当のおかずのメンチカツが六十円もするのか！」

「あんたに言われることはない！」

と、こんな内容だったような気がするが、私は自分の耳を疑った。コーヒー一杯が八十円とは安いと言つて女性に奢つていた筈のあの同じ口が、たった今子供の弁当のおかずが六十円とは高いと言つて怒鳴っている。

目は覚めていても寢床から出るわけにもゆかず、そのまま私は寢た振りをして事態の収まるのを待った。昨夜の後悔を上回る後悔が私の体を押さえつけていた。悲しい事だと思つた。

何事もなかつたような振りをして朝ご飯を用意し、昼食にと心尽くしのオニギリを下さつたオバサンの顔はまともに見られず、お礼も言えたかどうかも分からず、私は逃げるようにその家を出させてもらつた。彼のぐうたら亭主はまだ寢ていた。

しかし話はこれでは終わらない。数時間後、豊橋城の公園で草むしりをしている作業員の中に私はオバサンを見つけ、心臓が止まりそうになる。彼女も私を見つけて被つていたタオルを取りながら、恥ずかしそうにペコリと頭を下げてくれた。無事郷里に着いたら知らせて下さいとも言つてくれた。

なんと言う事かと繰り返し返し呟きながら私は豊橋を離れた。悲しかった。

旅を終え、郷里に着いた私が無事到着の旨オバサンに知らせたのは言うまでもない。オバサンには、阿波しじらの小銭入れを、子供たちには文房具を、せめてもの気持ちで送らせてもらったが、オジサンには何も差し上げる気にはなれなかつた。

## 困った時のあと一步

人生そこそこ長くやって来て「しめた」と思った時より「困った」と思う時が圧倒的に多かった。私だけでなく大抵の人が同じように感じているそうだから、やはり神様は平等に人間を支配しているのだと考えれば仕方ないことでもあるが、一方「困った」となった場合、諦めないで何かの努力、或いはあがきにも似た対応が運不運、幸不幸を左右する事もあるのではとも考える。悟ったようなことを言えた義理ではないが、私は「困った」と思った時はあと一步頑張ったりもう少し工夫してみたりする事になっている。

言葉にすれば簡単でもその場では冷静になれない時もあるれば、つい怠けたくなる場合もあるものだが、やはりひと工夫した方が結果は必ず良くなるものと信じている。

学生時代に東海道五十三次を歩いて京都まで帰った時の話だが、静岡を前にして私は高熱を出しフラフラであった。前日の雨に濡れたのが悪かったのか風邪を引いてしまったのである。もうとつぷりと日も暮れて国道を走る車のライトが眩しくて路側を歩くのは危険でさえあった。そんな状態の中、私は旅行を止める事ばかり考えていた。いくら歩いても目的地の静岡駅が見えないのである。

夜の九時になったのを機会に「本当にやめた」とついに言葉に出して言ってしまったのだが、数分間立ち止まって肩で息をしている間も思いリユックは遠慮なく私の体力を消耗させていた。もう思考力もあまり無かった。どうでもよくなっていた。その時、数百メートル先であろうか赤い信号が見えた。その信号が青に変わるのを見てせめてあの信号まで行つて考えようと歩いてみたのが全ての問題解決に繋がる結果となる。

数百メートル先と思っていたが、本当は百メートルもなかったその信号の交差点に到着した私の目に飛び込んできたのは眩しいばかりの静岡駅の照明であった。殆ど静岡駅に到着しているのに気がついていなかっただけなのだ。それにしても駅を見つけるまで何と周りの暗かったことか、今もって不思議でならない。

目的地に到着したことにより、その夜は静岡大学の学生寮にお世話になり風呂にも入った事もあって「明日も又、頑張ろう」と考え直したのは言うまでも無い。その後、旅行を止めようと思った事もなく、無事京都の三条大橋に立ったのはその日から十一日後であった。

この経験がその後の私を変えたる事になった。放り出したくなる事が起きる度に「いやもう一度」「いやもう少し」と考え直し、あの日見た静岡駅の明るい照明を思い出すのである。もうダメだと感じた時には案外、問題の答えのすぐ近くまで来ている事が多いものである。深追いしすぎて却って傷を重くするリスクはあるものの、

経験的には圧倒的にうまく解決できた確率が高かった。九切の功を一簣に虧くよ  
うな事はしたくない。せっかく努力するものは何らかの成果に結び付けたいもので  
ある。

## 学生寮のオジサン・オバサン

「何だいね、この人は、パチンコばっか行つてさ、いつも負けて帰るんだから。どうしようもナイネ！」

「何言つてやんでえ、おいらも遊びの一つや二つ構わねえダンベ！」

こんな具合に挨拶代わりの口喧嘩をよくするご夫婦が、私の学生時代をお世話して下さった学生寮のオジサン、オバサンであつた。

このご夫婦、お人柄に関しては天下一品である。私が入寮したばかりの時、金の無いのを見かねて家庭教師のアルバイトを探してくれたのがオジサンであれば、学祭に寮生全員で参加した長崎の蛇踊りの胴体を作る時、三日三晩ミシンを踏み続けたあと、ちようど一週間、寝込んでしまつたのもオバサンである。

群馬県はカカア天下で知られるが、このご夫婦も典型的な群馬式カカア天下であつた。もつともオバサンの方が体も二倍くらい大きかったので実力で喧嘩すれば絶対オジサンに分が無い事も、はつきりしていた。

因みにカカア天下の謂れは、昔、上州の男共が「オレのカカアは天下一のいいカアさ」と自慢したものが始まりとされ、決して奥さんに頭が上がらない旦那様の事ではないとのことである。

しかし件のオジサンは両方の意味でもカカア天下であつたように思われた。

オジサンとオバサンには二人の子供がいたが、上の子は女の子で、彼女が高校に上がる時、民間会社の社員寮の管理者として家族全員引越してしまった。今ではその会社を目出度く定年退職し、お孫さんの顔を見ながら幸せな生活を送られている由、その後の年賀状で知ったものだが、血の気の多い大学生百八人を抱える学生寮であったため、かわいい娘に万が一の事があつてはと職場を変えたのではなからうか。

どの寮生にも親切で、また寮生からも親のように慕われていたご夫婦であつたが、私には特によくして下さつた。

味噌汁の上澄みの好きな私ために、「持山さあん、上澄みどけてあるよ、ホラ。」と時々他の寮生に分からないように気を使いながらお椀を渡してくれるオバサンの目は母親以上に母親らしかつたのを覚えている。

ともあれオジサン、オバサンには人間性というものが溢れ出ていた。特にオバサンは何ものをも包み込む愛情に満ちていた。豊満な体つきだけではなく、肝っ玉も太くすべてを縁の下で取り仕切る迫力すら感じさせる人であつた。家計は決して楽ではなかつた様子だったが暗さはなかつた。そんな中に私は群馬女性の魅力を発見した思いもした。

この人こそ群馬のカカア天下に相応しい人だと思つた。また将来の私のヨメサンにも、こんな人を迎えて明るい人生を送りたいとも思つた。

「もし良かったら持山さんにうちの娘、貰ってくんないかねえ。」と真面目な顔してオジサンに言われた時もあったが、これはお世辞が半分以上だと思っている。

そうこうしながらも卒業前に知り合った女性が現在の私の奥様であることから考えると、よくよく群馬女性との縁が深かったのではなからうか。

結婚して二十五年以上経った今、うちのヨメさんも自分が群馬県出身であることを完全に忘れているようであるが、私は彼女の中の群馬気質に今なお惚れている。

学生であった感受性の高い時代に寮のオジサン、オバサンが、夫婦とはこんなものだと身をもって教えてくれたお陰であると思っている次第である。カカア天下バシザイ！

## 人生の意義（山本 正 君著）

三扇寮で同室した一年後輩の山本君の作品を古い文集で見つけた。京都府出身の彼は寡黙で悠然と構えているところから「グズラ」とあだ名がついていた。シャープな切り口の文章を読み、今更ながら、失礼なあだ名をつけたことが悔やまれる。彼との音信は退寮後ない。

人生とは一体何なのだろう。生きるとは何を意味するのだろうか。私はまだ自分の信念も人生に対する目的も持っていない。だからかもしれないが、私には人生とは苦しいもの、煩わしいもの、悲しいものとしてしか感じられないような気がする。たとえ楽しい時があっても、全く瞬間に過ぎない。

人生には老、病、死の苦しみがある。青春時代においては未来に対する不安があり自分というものについて悩む。壮年になれば家庭のこと、仕事のことなどに心を煩わし、老人になれば自分の老いさらばえた容姿や体力に思い悩み、若かった日を懐かしんでは現在の自分を哀れに思い、やがて襲ってくる死を考え侘しく思う。

また最大の苦しみは親しい人との永遠の別れであろう。これはいつかは必ず我々を襲ってくるのだ。人生とはなんと非情なものなのだろうか。

どんなに毎日を楽しそうに過ごしている人でも、必ずその底にはなんらかの苦し

みが潜んでいる。どんなに毎日が不快でたまらない人でも少しは喜びがある。どんな金持ちでも、名声のある人でも、貧乏人でも、名もない人でも、内容は異にしても同じように、同じ程度に悩みを持ち、人生を儂んでいるのではないだろうか。

反面、やがては皆、年寄りになり死んでいくのだから、いくら人のために生きて行こうとする人でも、所詮、人のために尽くせば、必ず自分にもいい事が返ってくるんだという下心がある。

他人が喜んでいれば自分が楽しいから人が喜ぶことをしようというふうに常に自分のためという気持ちがある。純粹に他人を思う気持ちはない。一方、正義感に走る人は往々にして神経質で排他的になり易い。どんなに自由奔放に快楽を求めたとしても、後には後悔しか残らない。

また、いくらあくせく働いたとて、どうせその将来はしれている。特別な才能もない真面目な者は一生、日の目を見ないだろう。何も悪い事をせず、人に迷惑をかけたようにばかり考えている人間は、生きていても余り価値はない。

他人にとつて、存在していたら都合がいいが、かといって別にいなくても、どうってことはないといった人間は全く哀れな存在である。

## 特急まつかぜ

男という生物は時として女性の前では見栄を張りすぎて失敗をする。そして又、学習効果が全く機能しないで何度も同じ過ちを繰り返すバカな種族である。私も例外ではない。

大学二年の春休みだったか、山陰地方を旅したことがある。ご多分にもれず周遊券と各地の学生寮にお世話になりながらの貧乏旅行であった。しかし唯一ともいえる贅沢をして出雲市から下関までは特急列車のお世話になった。「まつかぜ」という愛称が気に入っては是非とも乗りたくて予約までした特急列車であった。

その日の出雲市駅は春もまだ浅かったせいか、どんよりと曇って、うすら寒かった。一部に降雪があり山陰線のダイヤが乱れ、「まつかぜ」は三十分も遅れるとのアナウンスをホームで聞かされ、こんなことは待合室にいる間に言ってくれたらいいものをと私は腹を立てていた。しかし次の瞬間そんなことはどうでも良くなった。私の目の前を一人の娘さんが横切って行ったのである。草色とかオリーブ色というのか、きれいな緑の当時流行のパンタロン姿なのだ。とにかくベツピンさんなのだ。

腹を立てたのも一瞬の間に忘れ、たちまち気分が華やいで自然と体が温かくなる

のが感じられたが、もっと熱くなることが車内で起ころうとは、この時点では予想をだにしていなかった。

三十分も遅れた列車にやっと乗り込み座席の周りに大きなリュックとテントをどしたものかと思案していた私の側に先程の娘さんがニコニコしながらたっているではないか。一度に体中の血が頭に上ってしまった。彼女と私は、たまたま同じシートで隣り合わせだったのだ。

ここで男性としての見栄っ張りが一気に噴出してしまふ結果になる。

最初は恥かしそうに話しかけ、そのうちすっかり話が弾んでしまった私は、身の程もわきまえず彼女を食堂車へ誘う事になる。特急列車の食堂車はこの時が生まれ初めてであった。

ハムサラダとビールが私の分で、サンドイッチとコーヒ―は彼女の注文だったが本当に楽しいひとときを過ごせた。しかし幸せは長続きしないもの。私のサイフにはたったの五十円しか残らない事が分かるまでには三十分も掛からなかった。

下関駅に着いたのもう夜だった。彼女は九州まで行くとかでそのまま別れた。楽しかったと言ってくれた。男のプライドも保てたし、満足のいく別れである。その夜は下関駅のベンチで寝る事になるが、駅の入り口に屋台のうどん屋がいて、おつゆの美味しそうな匂いが腹にこたえた。

十一時ごろにはもう一人の学生がやって来て、並んでベンチで寝た。自転車で旅行

中の彼は風邪をひいていて咳がひどかったが、やはり薬を買う金がないとの事だった。似た者同士が仲良く一夜を明かした。

翌日、飲まず喰わずで山口県下を観光し、山口大学の学生寮でやっと食事でありついた私は恥を忍んで寮長に事情を打ち明け、二千円を拝借してやっと帰路の食費を確保した。

二、三週間して娘さんからは手紙が届いた。旅行の良い思い出になったらしく、嬉しかったと書いてあった。

情けない思いもしたが何故か男が守れた感じがして満足だった。次からはこんなヘマはしないと決心したにも拘わらず今もって同じような出来事が絶えないのは、あの時の満足感が非常に大きく影響しているのだろう。娘さんは鳥取の人だった。今もセンスのいい服を着ているに違いない。

春の雨 秋の雨

春の雨は うれしい  
優しく 暖かい雨は 草花の芽吹きをさそい  
人の心を 楽しくさせる

秋の雨は かなしい  
寂しく 冷たい雨は 草花の命をうばい  
人の心を 悲しくさせる

いま 私の中に 雨が降る  
寂しく 冷たい 秋の雨

いつ 私の中に 雨が降る  
優しく 暖かい 春の雨

# 菩提の道場

## 深夜の芋掘り

夜の学生寮はとにかく退屈しない所である。いや正確に言えばそうならなかった方法の必死で考える故、退屈しなくても済むのかもしれない。

秋の夜長の寮生の考える事は、例え経済論をぶっつけていようが、高邁な哲学を論じていようが最後は腹が減ったという議論に集約するのが常であった。

最近深夜営業の飲食店も珍しくはないが、私の学生時代はそんな気の効いた店など全く無く、救いの綱は高崎駅の構内にある立ち喰い蕎麦屋くらいなものだった。しかしこれとても自転車で三十分の労働を強いられるし、辿り着いたものの閉店していたりして、帰り道は死にたくなるほど惨めな思いをする事もあった。

そんな中で確実に空腹を満たすものが烏川の土手の向こうの芋畑であった。今にして思えばお百姓さんのご苦労を思い、恐縮の至りではあるが当時は生きるための闘いがそこにあった。

特攻隊二名に選ばれるのは、いつも決まって一年生だった。デパートで貰った紙袋をさげて軍手をつけ、夜陰に乗じて出撃するわけだが件の芋畑までは二つの土手を越え、さらに小川を一つ飛び越えなければ行けなかった。

群馬の秋はことさらに空気が冷えて澄んでいるものだから星は美しかった。その星明りの下での芋掘りもまたオツなものと考えるのは寮で待つ上級生のゆとりとい

うもので、当の一年生はといえば、軍手をつけて畝の横から手を差し込み芋の大きさを確かめては一つずつ収穫し、その後の穴を再び埋め直す作業の繰り返しなものだから、風流などと言ってる暇はなかった筈である。

そうした或る日、悪い奴はいるもので当番の一年坊が一生懸命、芋を掘っている現場で畑の所有者を装って「コラー！ ドロボー！」と派手にカマシタ奴がいた。おまけに持って来た木刀を所構わず振り回したものだから、驚いたのは哀れな一年生であった。さすがに折角の芋を忘れる者はいなかったが、紙袋をさげて一目散に逃げて行く後ろ姿にはインテリジェンスなど微塵もなかったという。

人は狼狽すればロクなことにはならないもの。暗闇を逃げ帰る途中の小川を飛び越えた途端、はずみで紙袋の紐が切れ、芋が全部そこいらに転がってしまった。暗闇のなかの土もぶれの芋だから探してもなかなか見つからない。すぐ後ろの追手の迫力にたまらず寮に逃げ帰って来るのであるが、待っているのは上級生のバカ笑いの渦のみであった。

私とそのバカにされた一年生の一人であった事は言うまでもないが、悔しかったのは名誉でも何でもなく、芋を落としてしまった事だったと記憶している。上級生のイタズラと判明した後、今度は懐中電灯を持って落とした芋の回収に向かったが、現場でふと見上げた星空は、本当に美しかった。

翌年、上級生になった私が逆の立場で同じ事をしたのは言うまでもないが、ただその年の一年生は芋をバラ撒いたりはしなかった。

## 三扇寮 一一号室

私が学生時代にお世話になった寮は三扇寮という。校章が三つの扇から出来ているので、そんな名がついたのだろう。何故三つの扇かの由来は最初から知らないままでいた。

定員百八名の四人部屋、二七号室まであつてA棟、B棟に別れていた。寮にいたのは三年間で、一年生のときは二〇号室、二年生のときは一四号室、三年生のときは一一号室の住人となつた。

寮では三年生は神様、二年生は平民、一年生は奴隸と決まつていて四年生になれば、ご昇天となり出て行かなければならなかつた。従つて私の寮生活における住み心地度は一一号室、一四号室、二〇号室の順となる。

私で一一号室は七代目。当主の私の他は二年生のK君、一年生のT君、M君の四人世帯であつた。もともとわがままな私は三年生になり益々磨きがかかつていたら、親切な三人の後輩のお陰で神様以上の生活を楽しんだ事は言うまでもない。

K君は長身の男前で、尚且つ気配りの出来る人だつたから一一号室の次席家老的存在であつた。後輩の二人も彼がいたからこそ私のわがままに耐えてくれたのかも知れない。四年生になり、退寮する時には彼と一緒に連れて行き、一軒家を借りて

隣の部屋に住ませ面倒を見てもらったのは正解であった。家主の親父に気に入られ、是非とも娘を嫁に貰ってくれと懇願された幸せ者でもある。

T君、M君はそれぞれ福島、北海道から来たいわゆる奴隷であるが二人とも北国育ちのせいか我慢強く、部屋の掃除からラーメン作りまで文句も云わずによく働いてくれた。不平、不満は相当溜まっていたに違いないが何故か四人は仲が良かった。K君のお陰と思っている。

一一号室時代の一番の思い出は学生運動たけなわの際の食糧不足であった。もともと寮は食事付きであったがストライキを打ったかどで大学側のしっぺ返しに会い兵糧攻めとなって、約一か月間も賄いのオジサンとオバサンが居なくなってしまうたのである。当初こそ外食で済ませていたが、貧乏だからこそ学生寮に入っている我々に金欠病はすぐにやっつて来た。四人の金を出し合って凌いでいたが、いよいよ最後となった日にT君が米を少々とカレー粉を差し出した。登山が好きだった彼が非常食として隠し持っていたものである。

野菜など有るわけもなく、お粥状のご飯に直接カレー粉をかけてT君スペシャルカレーは出来上がった。残念ながらこのカレー、食べた記憶はあるが美味しかった記憶はない。ただし四人が思い思いの食器でガツガツ食べる姿を写真に残し、色紙にサインをして部屋の天井に貼り付けた事が後日に貴重な記念となった。

四人は卒業後バラバラになってしまったが、今も定期的に再会のチャンスを作っている。平成元年に群馬の霧積温泉に集合した際、学生寮を見に行こうという事になり、二十年振りに一一号室を訪ねてみた。幸いにも一年後には寮が取り壊されるといふ事を知り、例の色紙を回収する事が出来た。セピア色になっていたが若かりし日の自分との再会に全員、涙がこぼれそうになった。

色紙は現在私の手元にある。三十年の歳月を経ても酒とタバコと即席ラーメンの匂いが染み付き、耳元に近づければ寮生の夜の喧騒が聞こえてくる。思えば歳をとったものだ。



平成十一年 著

## 龍の行進

学生時代の三年間は学生寮でお世話になったが、この寮生活が私の人格の大部分を作り上げたと言っても過言でない。四人一部屋の共同生活は過保護に育ったわがままな私にとって、ともすれば窮屈で先輩、同僚ともよく意見が対立し、生意気だとバツテンを付けられた時代もあったが、それも最初の半年間くらいでやがて世の中のルール、社会性、お付き合いというものの存在に気がつくや、にわかには明るく賑やかなものとなって行くのである。

ただし閉口したのは寮生活にはプライベートが無い事と、上級生優位の法則であった。一年生は奴隷同然、二年生でやっと人間らしく振る舞えて、三年生になると神様であった。もっとも私は三年間在寮したのでついに神様にまで登りつめ快適な寮生活をエンジョイ出来た幸せ者の一人であった。

毎年秋には大学祭と併せて寮祭なるものを催すのであったが、お祭り好きの私はいつも寮祭実行委員会でハッスルしていた。三年生の時の寮祭はこのほか気合いが入り、全寮生百八人を以って長崎の蛇踊りをやるうじやないかということになった。頭部を巨大な神輿に作り十六人で担ぐ。あとは尻尾まで八十人が一メートル間隔で胴体を支える巨大な龍である。

張子の頭部は娯楽室の中で作り始めたがあまりに巨大なため、鼻だけ家の中に突っ込んでいるだけで、庇でやっと雨露をしのいでいる状態であった。胴体の部分は木綿のさらしを大量に買い込み、青色に染めるのであったが、これには食事を作るための大なべを利用した。

少々体に悪い毒素が染粉に含まれているらしかったが文句を言う寮生は一人もいなかったし、事実その後には発病する奴もいなかった。

染め終わった布を縫うのは管理人のオバサンの仕事となった。なにせ寮の中のとった一人の女性であったのでオバサンも引き受けざるを得なかったわけである。このオバサン三日三晩ミシンを踏み続けた後、ちょうど一週間ダウンした。お気の毒であったが三十年以上経った今も年賀状をくれるところを見ると、どうやら恨みには思っていないらしい。

ともかくも完成した龍は立派だった。とてつもなく巨大なものとなった。学祭のパレードの当日、寮から持ち出す時には寮生全員一升瓶のラツパ飲みで活を入れ、堂々の行進とあいなつたが、市役所前であらかじめ仕込んでおいた発炎筒に着火し口から白煙を噴きながら踊り狂う勇姿に市民が拍手してくれるのを見て改めて感激をしたものである。学生時代最良の日となった。

しかし、この龍には悲しい後日談もある。三年後に後輩共がもう一度、蛇踊りを

しようということになり、お蔵になって  
いた件の龍を修繕しパレードするまでは  
良かったのだが、例の市役所の前での景  
気づけに発炎筒に火をつけた途端に燃え  
上がり、頭部を失った胴体だけを持って  
ゾロゾロと全寮生が帰らざるを得なかつ  
たそうなのである。消防署からのお目玉  
のオマケつきだったとか。

龍の口の木の骨組みに、直に発炎筒を  
紐で縛りつけたのが原因で  
あったそうだが、私の時は口の中で宙ぶ  
らりんになるようにハリガ  
ネを利用していたのだった。記録など残  
しておかなかったものだから  
悲しい結果となってしまうた事を今も  
って反省している。

その後平成二年に学生寮が廃止される  
まで約二十年間、蛇踊りの  
復活はついになかったとも聞いている。



## にぎりが一個四百円

私の学生時代はアルバイトの連続であった。学費のためにと言うのだろうか、それとも生活そのもののためにと言った方がよいのだろうか。講義もそっちのけでアルバイト三昧の学生生活を送っていた節がある。しかし単位も人並みに取得し、無事卒業もしているので経済学部という所は如何にも便利な所である。

昼間のバイトで足りず夜は家庭教師もしていたが、こちらの方はもっぱら夕食をご馳走になったり、夜の街に繰り出す父親のお供をするほうが本職であった気がしないでもない。

「先生、週末は家族でスキーに行くから良かったら一緒に行きましよう」と太っ腹の親父の言葉に甘えて、生まれて初めてスキーに行ったのは越後湯沢であった。

清水トンネルを越えていきなり雪国となり眩しいくらいの銀世界に感動したが、肝心のスキーのほうは何をどうしたかさ覚えていない。

ただ一つ思い出すのはホテルの寿司屋で生まれて初めて江戸前にぎり鮎をつまんだ事であり、こちらは生涯忘れる事が出来ない。

「先生トロでもどうですか」と親父さん。トロって何だろうと思いつつ、言われるままにカウンターの隅でカチコチになっている私は、もはや好奇心の塊でもあつ

た。ふと見る値段の木札にはトロは四百円とある。肉体労働のアルバイトをして千円貰えばよいほうの時代、トロ四百円に正直驚いた。しかも寿司は二個セットで出てくるので、どうみても八百円・・と考えていると金縛りにでもなったみたいで暫くは食べる気にもなれなかった。同時に涙さえ出かかった。

「世の中わからない事が多すぎる。貧乏である事は辛いことだ。にぎりのトロとはこんな物とは知らなかった」と思いつつ口に運んだトロはこの世の物とは思えない程おいしかった。

時代も移り世の中全体が贅沢になった現在、寿司を食べてここまで感動したり驚いたりする学生はいないであろうが、逆に寿司一個でこれだけ勉強できた昔も懐かしい。私はこの事がきっかけでより逞しい人間に育っていったのではないだろうか。

今でも寿司屋では開口一番「トロっ」と言いたくなるのは、あの時の夢が実現した喜びからか、それとも学生時代から続くヒガミか見栄か、私にはよく分からない。

## ケムシのガンバリ

群馬県邑楽郡明和村。たいていの人は知らない地名である。群馬県の穀倉地帯と  
のことであるが、とりわけ有名な訳でもなく大した所でもない。しかし私にとつて  
は忘れられない地名の一つである。

大学生活の大半をアルバイトで過ごした私だったが、その日も参院選の世論調査  
にこの村を訪れた。無作為に選んだ対象二十軒の戸主の意見をアンケート表に基づ  
いて取材するという簡単なものだったが、なにせだっ広い田園地帯のこと。すぐ  
隣の家と思っても歩くと二十分もかかったりして調査を終えるのに丸二日がかかり  
であった。出来高払いにしては高給だと思つて飛びついたが、どうりで話がうますぎ  
た。

二日も掛かつて、何もこんなに遠い田舎まで来なくても良かったものと思つて  
も後の祭り。歩きつかれた足をひきずりながら私は二時間に一本しかない帰りのバ  
スを待つていた。折からの太陽はもう西に傾いてはいたが、五月の日足は長く、ま  
だまだ日暮れには時間があつた。

ふと前を見ると、一匹のケムシがアスファルト舗装の道路を渡ろうとしている。  
黒っぽい大きな毛虫で長い毛がモヘアのセーターのように生えていた。もう既に三

分の一ほどを横断しているものの、残った道のりはまだ四〇五メートルはある。幸い田舎の道だから自動車も来ないが、果たして無事に向こう側に辿り着けるかどうか、私の最大の関心事になって来た。毛虫は休もうともせず、先程よりも増して一生懸命に背中を波打たせながら進んでいる。

やがて私の頭の中で、悪魔と天使が喧嘩を始めた。いつか必ず来るであろう自動車が、ケムシ君をつぶしはしないかどうかで、大揉めに揉めているのである。

そして試練は間もなくやって来た。一台の車が近づいて来たのである。悪魔は、ほくそ笑み、天使は泣かんばかりであったが私の目は冷たく一台のカメラとして機能しているのみであった。

前輪が毛虫を真中にして通り過ぎるのを確かに見たが、巻き起こされた風で毛虫は吹き飛ばされコロコロッと転がったようにも思った瞬間すぐに後輪が視界を遮り、やがて車は去って行った。ケムシ君はもう動いていなかった。

悪魔は小踊りし、天使はうなだれた。私の本心はどちらだったのだろうか？ 二日間のアルバイト代はすぐに使ってしまったが、この時の葛藤だけは明和村の地名を見つづける度に思い出す。

## 青森での泣き別れ

友人H君との付き合いは長い。大学二年生の時からだから、もう三十年を超えている。学生寮の先輩の立場で初めて彼にあつたのだが、真面目一本槍の私にとつては、あらゆる面でどちらが先輩であるか分からない人物であつた。つまり何も知らない私に遊びを教えてくれたのが彼であつたのだ。

酒、麻雀、パチンコと私に取ってはどれも革命的なことばかりであつた。お陰さまで今でこそ私も一人前の遊び人になっているが、彼との出会いがなければカチカチの真面目人間になっていたかもしれない。何が幸いするか分からないものである。そんな彼にお礼として私が学問を教えてあげたことは言うまでも無い。

彼との一番の思い出と言えば、北海道旅行である。昭和四十五年の夏、私は学生時代最後の夏休みを迎えていた。思い出作りにと北海道行きを計画したものの、先立つものが全くなく、七月いっぱいにはアルバイトで軍資金を稼ぎ出し、八月になって周遊券で全道を回ろうという事になった。そして彼は駅前の菓子店の売り子、私はデパートでバーゲンの売り子として、冴えない仕事であつたがとにかく頑張つた。一日八百円だったと記憶している。その年の夏は、ことのほか暑くクーラーの効いた所で働こうと考えた浅知恵とはいえ、あまりカッコの良い職種ではなかつた。

ともあれ、目出度く給料をもらい、北海道一周十四日間通用の切符と諸々の準備を整え、山用のリュックにテント、寝袋と完全装備で高崎駅を出発したが、ここでさつそく問題が起きる事になる。周遊券は上野駅より有効で高崎・上野間は別料金が必要とのこと。熟慮の結果、大切な軍資金を使うまいと不正乗車を企てることとなつたわけだ。

キセルそのものは上手く成功したが、とんでもない罰が当たるとは二人とも全く知る由も無かつた。上野行き列車が途中の熊谷あたりまで来た時、突然に空が真っ暗になり、凄まじい夕立となつたのだが、今から思えば起こりつつある悲劇を十分に暗示していた。

青森行の急行「八甲田」は八月一日午前零時五分に我々二人を乗せて意気揚々と上野駅を発車した。行きがけの駄賃にと十和田湖に立ち寄る計画であつたため、最初の下車駅は翌朝十時着の三戸である。一睡も出来ずに三戸で列車を降り、ふらふらと改札を出た私のすぐ後にH君が続く筈だったが、ここで事件が勃発した。

「ない！ ない！ 切符がない！」と彼、改札の前であらゆるポケットを探している。リュックの中まで探したが結局出てこない。駅員にも協力してもらい青森駅で列車の到着を待つて車内を探してみようという事になり、駅舎で二時間ほど待つこととなつた。

彼のその間のシヨンボリとした様子は気の毒で、今もって表現する言葉もない。

慰めの言葉など更々なかった。

切符は出て来なかった。一か月分のアルバイトの大半をつぎ込んだ切符である。せめてもの救いは駅員の計らいで上野・三戸間の料金は目こぼしして貰った事であった。

その後の彼はどこまでも勇気があった。立ち直りも早かったが、気配りが素晴らしかったのだ。一緒に旅行を中止すべしと考える私に、四年生の夏休みで最後のチャンスだから私一人でも旅行を続けてくれと彼は言ってくれたのだ。友情を感じた一瞬でもあった。

彼とは十和田湖で一泊だけ付き合ってもらい、青函連絡船の棧橋で別れた。その後私は無事一人で北海道一周を終え、学生時代の良き思い出を作ることが出来たが、彼はその後、新婚旅行で北海道へ行くまでは十年間ほど北海道には縁が無かった。三十年を経た現在でも彼とは酒を飲むたび、この話となる事が多い。しかしキセルをした罰が当たったという事は二人とも自分からは絶対に口にしない。

## 北海道の友

人との出会いは不思議なもので、永く付き合ったからといって強く結びつくものでもなく、よく知っているというだけで懐かしく思うというわけでもない。ちよつとした出会いなのに忘れない人はいるものである。北海道で知り合った男がそのよい例であった。

彼との出会いは小雨に煙る納沙布岬の夕刻のことである。学生時代最後の思い出に一人で北海道を周遊中の私はいつもの如くりュックにテント、ハンゴ持参の貧乏旅行であった。

そんな私が生憎の雨にウンザリしながらテントを設営している側で登山服姿の男が頭を濡らせてボンヤリと立っている。聞けば泊まる場所を探しているとのことなので、テントでよければ一緒にどうぞということになり、少々心細かった私も助かることになる。

おしゃべりな私に比して彼は無口であったが、そのコントラストが良かったのか、何故か意気投合し夜遅くまで、取りとめもない事を話し合ったものだった。

翌日の岬は良く晴れ、北方領土まで見渡せる幸運に恵まれた。彼も私も別に予定を立てていたわけでもないのです、その後は暫く二人で旅行をしようということになり根室の魚市場で買った塩茹の花咲蟹をほおぼりながら列車の中で行き先を考えた

りした。

結局その日のうちに野付岬を経て羅臼で一泊、知床岬を一回りしてウトロから網走でもう一泊、層雲峡から大雪山に登り勇駒別で最後となるまで四泊を共にした。

食事はいつも私が作る物を食べていたが、彼は別れる時、食費だと言って確か四百円を私に差し出した。魚の缶詰と、海苔の佃煮ばかりの食事だったが彼はいつも旨いと言って黙々と食べていた。いつまで一緒に居るのかも分からないままにいた私だったが、「ここらで失礼します。」と彼のほうから去って行った。

無口な彼は一緒にいる間、ボンヤリと必要なことだけしか喋らなかつた。そのため彼については何も知らないまま別れる事になったのだが、何故か学生時代四年間の中で知り合った誰よりも親密さを感じる男であり、今もって懐かしく思い出すのである。

器用に蟹の甲羅を割りながらチューチューと吸っていた仕草が面白く、また遠慮がちに私の後から鯖の味噌煮の缶詰をつついていたのも懐かしい。

大雪山に登ろうと言い出したのも彼であり、お陰で私は北海道の東西南北の果てに加えて一番高い場所へも行ったことになった。食費にくれた四百円も根拠はないが、たぶん四日間だったから四百円だったのだろう。

「じゃ」とだけ言って、やはりバツの悪そうな振りをして旭川駅で彼は雑踏の中へ消えて行ったが、その時になって初めて彼については神戸市出身であること以外、名前すら聞かなかつた事に気がついた。不思議な奴だった。

## 阿寒湖の歌

大学四年の夏休み、北海道周遊券をたよりに道内一周の旅をしたが、阿寒湖で覚えた歌を今なお忘れることなく口ずさむことが出来る。『マリモの唄』。遊覧船の中でガイド嬢が語る、悲しい恋物語の歌であった。

水面を渡る 風寂し

阿寒の山の 湖に

浮かぶマリモよ 何想う

マリモよ マリモ 愛しのマリモ

晴れば浮かぶ 水の上

曇れば沈む 水の底

恋を悲しと 嘆きあう

マリモよ マリモ 愛しのマリモ

——「毬藻の歌」(岩瀬ひろし作詞)

昔、阿寒湖畔のアイヌ部落にいたセトナという美しい娘と、マニペという勇敢な青年の恋物語は、セトナに横恋慕した酋長の息子が二人の仲を裂くためにマニペを殺害するところから始まる。

部落の掟もあり酋長の息子に嫁がなければならぬセトナは世を儚み、結婚式の前夜に阿寒湖に入水し、マニペのもとへと旅立ったのであった。

二人の霊は湖中で結ばれ美しいマリモに生まれ変わり、今も水面に浮かび、又湖底へと沈むことを繰り返しながら悲しい物語を伝えているという話である。

阿寒湖を旅して三十年が経った今、ロマンチックな話などには、とんと関心がなくなってしまうが、当時は私の心の中にも少女のような感受性があったという事か。

平成十二年 著

## 算盤の先生

算盤の練習を十分しておくように、と一通の連絡が人事部から来たのは秋風が気持ちの良い九月下旬であった。銀行に就職が内定し、さてこれからどうしようかと思っ  
ている矢先のことだった。

下宿のおじさんに、近所に算盤塾はないかと尋ねると、うまい具合に歩いて五分もかからない所にあると言う。ものは試しと早速、冷やかしに出かけた。

下駄をガラガラいわせながら尋ねたクダンのそろばん塾は、農家の蚕小屋を改造した代物で、玄関にある障子は所々穴があいている。中からは子供の声が賑やかに聞こえてきた。人の気配を感じたのか若い女性が出てきて、何か用かと聞くので「先生はおりませんか。」と返すと、「私ですが。」と女性は答えた。私は一瞬たじろいだが、ここに決めたと思うのも同時であった。



その夜、下宿の麻雀は賑やかだった。算盤の先生は若くて、その上美人でと話に尾ひれがつきすぎて、それはもう絶好調の私であった。卓を囲む友人が卒業記念に頂くものは頂けば、とか何とか喧しい。つい煽てられて麻雀には根性が入らずポロ負けだったが、何か良いことが起こりつつある予感が私の胸の中に確かに湧き出ていて負けた悔しさを打ち消していた。

翌日からの算盤の授業は正直言つて楽しいものではなかった。周りは皆ガキばかり。オジサン呼ばわりされた挙げ句、彼らの方が算盤も上手いとあつては一時間の授業が苦痛以外の何物でもなかった。

しかし私にも得意とする分野がある。早いと言えば早すぎたが、二週間目の週末にはデートに誘ってみた。ライバルは小学生ばかりだから勝負は最初からついていて。それ以来私は週末だけが楽しみの生徒になってしまった事は言うまでもない。卒業まで半年あつたが、大学時代の大半がアルバイトと金の競争だった私にとって最高に幸せな時間であつた。

先生はその後、縁があつて私の妻となつたが、群馬県から遠く離れた徳島までついて来た彼女の勇氣には、ただただ感謝するほかはない。私にとっては過ぎた女房である。

しかし、一つだけ彼女は嘘をついていた。彼女の指導で三級の実力があつた筈の算盤だったが、銀行に入った年に実施された算盤検定では、見取り、掛け、割り、

伝票算の四科目、すべて不合格となったのである。つまり三級の実力はなかったのである。

今にして思えば彼女の塾へ通った六か月間、月謝というものを払った記憶がない。だから責任を問う資格も私にはない。

## スプーン・コレクション

新婚旅行は海外だった。海外といってもグアム島なのだが当時にしてはかなり贅沢でもあった。私は卒業と就職と結婚をみんな同じ年に済ませたのだが、如何せん金だけは全く無かった。しごく当たり前の話だがとにかく金は無かった。

結婚式は親友が使ってくれと言って貸してくれた金で間に合ったが、困ったのは新婚旅行である。無しで済ますのも体裁が悪いので一計を案じた。当時初めて売りに出されたバック旅行である。国内旅行は現金が必要だがバック旅行は二年割賦が可能であつて、一時金のない私は一も二もなく飛びついた。お陰でその後二年間は苦しい家計の中から旅行代金を返済するハメになったが、妻は何も文句を言わなかった。借金付きの夫と一緒にマイナスからのスタートを強いてしまつて、男として情けなかつたが背に腹は代えられなかつたし、何も言わずに毎月返済してくれた。今もつて感謝している。

ところがこの旅行、ちよつとしたハプニングで始まつた。出発日前日つまり私達が結婚式を挙げている最中に旅行会社より連絡が入つた。「奥様のパスポートを紛失した」との事。

旅行代理店の慌てまいことか、私達にも氣遣つて日曜日にも拘わらず担当の課長

さんも一生懸命探してくれたが発見に至らず、とにかくスケジュール通り出発してくれとのことだった。

結局、横浜のホテルで三日間足止めを食ったが、その間旅行会社の横浜支店が実によく面倒を見てくれた。アメリカ大使館のビザ再発給の手続きはもとよりホテルの食事の経費もみんな負担して頂いた。私達二人にとっては四泊五日が七泊八日のデラックス旅行に格上げになったようなものだから、むしろ幸せであった。

グアムへ出発の前夜にはお世話をして頂いた課長さんと食事を共にした。その時彼が私に話をしてくれたのが、「スプーン・コレクション」である。彼は職業柄よく海外へ行くがあらゆる国の飛行機を利用するうちに、スプーンのコレクションを思い立ち、既に百本くらいは集めていると言うのである。

収集方法はひとこと言えば盗みなのである。まず食事が済むや意識的にスプーンを床に落としておく。やがてスチュワーデス嬢が片付けに来るがスプーンが足りないと言う人はまずいない。ほとぼりの冷めたところで拾い上げれば完了で、この方法は一度も失敗した事がないという事であった。

私は甚しく感動し、さっそく往路の機内で一本を誤魔化した。いい記念になったが残念なことに、その時の航空会社はもう無い。スプーンを盗まれただけでは会社の具合が悪くなるわけもないのだが、ひとこと感謝と謝罪の気持ちを伝える機会は

失われた。

その後、私のスプーン集めは次第に昂じて今では四十本を越えている。もちろん自分で集めたのもあるが、海外に出かける友人に盗み方を伝授の上、お土産にねだった物が多い。

今も懐かしく思うのは、やはりあの時の旅行会社の対応の素晴らしさである。私もサービス業である銀行員となっているが、当時駆け出しの私を十分に教育してもらった結果となる出来事であった。その時から顧客に迷惑を掛けた時は、お詫びばかりが能ではなく最善の方法でリカバリーする事が却って信頼につながるものだという事を教わった。

当時の関係者のみなさんに今もって感謝しています。  
素晴らしい新婚旅行を有難うございました。

## ちよつとおたずねします

結婚された年月日 昭和四十六年十一月十四日

お二人のそもそもの  
なれそめは？ 入行内定後、ソロバンを習いに彼女の塾の門下生になつてから。(彼女ソロバンの先生)

どんなところに  
ひかれましたか？ ご主人 ちよつぱりヤンチャだが甘えんぼなところ。  
奥 様 誠実で明るく親しみやすいところ。でもワンマン。

交際中のエピソード？ 大学の講義は時々さぼってもソロバン塾へは全出席。

新婚旅行はどちらへ  
グアム島。

またその旅の印象は？ 珊瑚礁に砕ける白い波、真っ赤な夕焼け真紅のハイビスカス、椰子の葉の緑、青い空、紺碧の海、すべてが印象的な旅でした。

お互いに何と呼んで  
ご主人 フーコ

ちよつとおたずねします

ちょっとおたずねします

いますか？

新生活の決意を  
教えて下さい。

奥様 もつちゃん

仲良くやるのみ。

昭和四十七年 行内誌「あわぎん」寄稿

## 幸せの質量

幸せには質量があると実感したことがあった。長女が生まれてまだ本当の赤ちゃんだった頃だから、恐らく昭和四十八年の話になる。

当時、私の給料は手取りで三万円強。銀行の給料だから世間様と比べれば良かったはずだが如何せん入行してまだ三年目の私には結婚、出産の負担は軽くはなかった。

妻は何も文句を言わなかったが給料前の日曜日の朝のこと、新聞代の集金が来る日なお金が無いと初めて泣き言を伝えられ、困った困ったで頭を使って出した結論がパチンコだった。今と違ってパチンコ屋は町の中心にあったので自転車に打ちまたがり、馳せ参じることとなる。

そして最後の千円札に文字通り命をかけて、勝ちも勝ったり三千数百円。急いで



家に帰れば新聞屋もまだ来ないとのことでホッとしたものであった。

芸は身を助けるとはいうが、まんざら嘘ではない。学生時代から私はパチンコがうまかった。現在のパチンコのようにコンピュータ相手ではなかったから指先一つのテクニクがモノを言った時代のことである。

首尾よく新聞代を支払って残ったお金がまだ二千円もある。どうしようかと考えた末に夕食は久し振りに近所の焼肉屋へ行こうと話がまとまった。しかしここで問題なのが赤ちゃんである。二時間おきにオッパイをねだって泣き出す子供を預ける所が無い。されど焼肉の誘惑も断ちがたい。意を決して赤ちゃんが寝付くのを見計らって、妻を自転車の荷台に乗せ焼肉屋へと走った。

久し振りの焼肉は美味しかった。腹いっぱい食べたが今度は赤ちゃんが心配になる。まだ家を出て一時間も経っていないが今頃は目を覚まして泣いているのではなからうかと私は来る時以上のスピードでペダルを踏む。荷台の妻はデコボコ道に弾むたびに、痛い、痛いと言うが頓着しないで走る。

家に着くや恐る恐るドアを開けると、そこにはスヤスヤ眠っている我が子がいた。「よかった」と二人は顔を見合わせ、つかの間の幸せな日曜日は終わった。

金は無かったが、とにかく幸せであり充実した日々でもあった。幸せというものはこんなものだと体感した。そして幸せには質量があるという事も知った。

あの時、妻を乗せて必死に漕いだ自転車のペダルの重さがそれである。

## 星と季節

私は夜空を飾る星で季節を知る事ができる。もちろん桜の花で春を匂い、入道雲に夏を見て、紅葉する木の葉の秋を憂い、そして木枯らしに冬を聞くことも出来る。

しかし星は自然現象よりも、もっと正確に季節を教えてくれる。春は北斗七星の高さでその進行が分かるし、夏には織女星と彦星が白鳥座の一等星と共に大きな三角形を作り天頂を占める。秋ともなればカシオペアが春の北斗七星と対をなすように入れ替わり、同時にペガサスの四辺形が展開する。オリオンが東より昇れば間もなく天狼シリウスがその全天一の輝きも誇らしげに冬を告げてくれる。

土星と木星の離れ具合で年の経つことを実感できるし、月の満ち欠けは如実に二十九日間の時間経過を教えるようにも思えるわけだ。もうすぐ出会えるハレー彗星は人生の平均的寿命の長さを暗示しているようにも思えるわけだ。

ともあれ星空は好きだ。太古の昔も人類は星空を見上げていたに違いない。そしてその時と現在の星空は寸分の狂いもなく同じ働きをしている事に私は戦慄さえ感じる。

今宵も夜空が美しい。何度も使い古した言葉だが、思わず言ってしまう。「時空に支配される星々の動きに比べ、何と私の人生のちっぽけなものか」と。

## 大阪寮です こんにちは

商都大阪の東南、長居の地に我が大阪寮があります。正確には、東住吉区公園南矢田二丁目一番六号。地名のとおり長居公園の南に位置し、住民は総勢四十八名、内訳は大阪支店二十八名、西大阪支店十一名、堺支店九名となっています。もちろん妻子を含みます。

大阪寮はA棟、B棟と二棟に別れ、その中に所帯持ち、独身男性、独身女性、そして単身赴任者と、ありとあらゆる形態の県外勤務者が揃っています。

昨年の外装の大改修に続き今年には内装工事が全面的に実施され、居住性も一段と向上し、快適な生活環境となりました。ひとえに関係者の皆様のおかげと感謝する次第であります。

さて寮長は大阪支店の藤川実さん、女性寮生をして「頼りがいのあるお兄さん」と慕われ、コンセントの修理から電球の取り替え、そして鍵当番と、それはもう大変な奉仕の精神の持ち主の一男一女のパパさんであります。

また、毎日独身者の面倒を見て下さる寮母の東丸さん、井上さんも長居寮を語るに忘れてはならない人でしょう。お二人のお陰でこの物価高のご時世、月額一万円でもって朝夕の食事の世話をお願いしております。

ともあれ我が大阪寮、平均年齢の若いせいか、いたって活気のある寮であり、全員帰寮の夜ともなれば、生活騒音のルツボとなるのであります。

三階からはカセットテープで郷ひろみが「HOW MANY イイカオー」とくれば、向かいの一階で子供の泣き声、二階の某氏の部屋からは、うたかたの夢を求めて「ジャラジャラジャラ」と帝国主義的中国式遊戯の音と同時に歓声とも悲鳴ともとれぬ声、負けじと向かいの一階からは、たえなる三味線のネに続き「昔の名前で出ていーまあすう」とカラオケの音、そして何処かの部屋のベランダで「ブーン」という脱水機の音を最後に長居の夜は更けてゆくのであります。この洗濯機、最近ではガタゴト、ガタゴトと暫く振動を繰り返した後、ブーンと回り始めるところから考えれば、どうやら故障寸前の様子であります。

以上枚挙にいとまがありませんが、大阪寮の一面を聴覚的視点から紹介しました。

昭和五十六年 行内誌「あわぎん」寄稿

## カレイ釣り

カレイ釣りは不精者の釣りである。仕掛けを投げ込んでおきさえすれば、後は寝て待て。敵の方から餌に飛びつき勝手に針に掛かり尚かつ平気な顔してじっとしている魚なのである。

時間を見計らってリールを巻けば、その重さでやっと釣れているのが分かる始末なのだ。

注意していれば竿先のアタリも分からないでもないが慌ててリールを巻く必要もないから結局は放りっぱなしにしておいて、時間を見ながら魚信を確かめるという事になる。

春はカレイ釣りには最高の季節となり、一人日向ぼっこを楽しみながら古い流行歌などを口ずさみ、天を仰いで昼寝を決め込む時など、まさに至福のひとつときとなる。

ともあれカレイとは、やはりバカな魚だと思う。或る日の事、三本仕掛けの最初の針に掛かったカレイが目の前ので餌につられて次々に飛びつき、とうとう三つの餌全部を平らげ、口じゆう針だらけにして上がって来た事がある。そんな時にも彼の目は背中の上でカエルのように可愛く突き出し、キョロキョロしているのである。

「なんで俺様こんな所にいるのだろう」と言わんばかりの顔つきである。

さて、呑気な釣りでも人間様のする事だから時として人のエゴも発生する。私は釣りに限っては誰よりも朝が早く、好ポイントをゲットすることには抜かりは無い。しかし五月の連休の頃だったか、まだ暗いうちから出かけたにも拘わらず、先客が座り込んでいた時があった。

「おはようございます」と挨拶はしたものの、敵さんは黙々と竿を振っている。そんな遠くに投げなくても良いものと思っても、教えてやるのもシヤクだし、こちらはこちらとソツポを向いて釣り始める事になる。

私はその日に限っては大漁であった。隣人はというと釣れた気配もなく心の中で「ザアマミロ」とも言いたくなる。呑気な釣りにしては随分貧困な発想だが、釣り人には多かれ少なかれ、この種のエゴは付き物なのである。

この日は最後までツイていた。もう帰ろうかなと思っていると、大きなアタリ、巻き上げるリールにもズッシリと魚の重さが伝わってきて、竿は真ん丸くしなる。慎重にリールを巻く私の側には、いつの間にかあの無愛想な隣人が来ていた。やがて三十センチはとづくに超える大物カレイが水面に見えた時、やっと本当の事がわかった。隣人とは口と耳が不自由な人だったのだ。

彼は身振り手振りで一生懸命、私に慎重に巻け、獲物は大きいと教えてくれてい

た。魚を釣り上げた後は自分の事のように喜びを満面に表わし両手を大きく広げ、しきりと大きなカレイだと言っている。

心の中で私はその人に詫びた。知らなかったとはいえ、つい先程まで彼を小ばかにし、釣れない事をむしろ私の幸せに置き換えていた。恥ずかしかった。

大満足の釣りを終え、帰り支度をしている時も例のおじさんはまだ頑張っていた。「おじさん良かったらどうぞ」と一匹のカレイを差し上げたが、大げさな身振りで要らないという。もう一度差し出すと、今度はニコニコと受け取り何度も頭を下げてくれる。嬉しそうに魚をしまっう彼のクーラーの底には五センチ位の小さな雑魚が一匹、ビニールに丁寧に包まれて氷の上に乗っていた。彼の人柄を象徴しているようだった。

ポイントはもう少し近めにした方が良いことを身振り手振りで教えてあげると、やはり大きく頭を下げてくれる。そのままサヨウナラをした。

あの日の私は大きなカレイも釣ったが大きな綺麗な心も釣り上げて最高に幸せだった。

## ヒコーキ

ヒコーキと書くのが私は好きです。「飛行機」では物理的で、なるほど大空を飛ぶ機械の意味がよく分かります。「ひこうき」では少々幼稚すぎて本年ミソジの私と言えたものではありません。つまる所「ヒコーキ」が一番ということになるのです。

最初からヘンな事をと、お思いでしょうが私はこのヒコーキなるものが大好きなのです。太古より人は大空への飛翔に憧れて数多くの試行錯誤の結果、ライト兄弟により発明されたこのオモチャは現在では無くてはならない交通機関として発達してきました。旅行、商用と今では飛行機を利用しない方が珍しいくらいです。

さて、航空界はボーイングとダグラスの二社に大きく分類されますが、ボーイングファミリーについて紹介してみましよう。

ボーイング社の旅客機は四種類あって、全世界の空を網羅しております。特徴としてはすべて三桁の数字の両端が7となっております。すなわちB-707、B-727、B-737、B-747という具合にです。正確にはB-707の弟分として少数ですが、B-720というのもあります。

707は最初に登場したジェットであり、今や第一世代のジェットとして次第に

旧式化しつつありますが、国際線旅客機の中では、依然としてトップの座を占めています。

727は尾翼がT字型になり、エンジンが三つともお尻についている独特なデザインで有名ですが、ベストセラー機であり千五百機以上が世界中の空を飛んでいます。

737は727の弟ですが一回り小さく、エンジンも二つです。松山空港等で見られるローカルジェットです。

747は誰でも知っているあのジャンボですが、わりと747がジャンボである事に気がつかない人も多いようです。ワイドボディ機のため居住性も良く、映画のサービス、ファーストクラスの二階ラウンジ等、最も快適な機種として国際線の女王です。

この原稿を書いた日に奇しくも大阪空港で日航ジャンボが着陸ミスでお尻を擦りむきましたが、あたかもグラマーな女性が尻もちをついたみたいで思わず自分の身勝手な想像を恥ずかしくも痛快に思いました。ヒコーキ好きとは、そんなところにも逞しい想像力を要求されるものなのです。

ヒコーキに関する事なら何でも好きな私です。乗ること、見ることはもちろん、機内の備品等にも大きな興味をそそられます。まさかエンジンを頂くわけにはゆきませんが、私は一回のフライトにつき何か一つはお土産を貰って参ります。

石鹼、コロン、アイマスク、スリッパ等々およそあの細長いキャビンには興味をそられないものはありません。申し出ればベビーベッドまで揃います。危ないところでは手斧まであるようですが、不時着時に脱出するためのもので、どこにあるかは決して案内がありません。ハイジャック防止のためでしょうか。

なかでも、よく頂くのがスプーンです。たいていスプーンには各航空会社のマークが入っていますし、柄の裏にはSTAINLESS STEEL MADE IN ENGLANDなどと書いてあつてどこの国の産かが分かつて面白いのです。

スプーンのコレクションは私が新婚旅行にグアム行きのパン・アメリカン機に搭乗した時から始まりました。事前に旅行代理店の某氏から私はあるアドバイスを受けたのです。つまり、記念にスプーンを頂いてきなさいという事でした。そのうえ彼は親切にも頂き方までコーチしてくれたのでした。

すなわち、食事が終われば故意にスプーンを足元に落としておくわけです。スチューワーズが片付けて、ほとぼりが冷めたところで失敬すれば完全犯罪成立となるわけですが、これは何回やつてもうまく行きますので読者の方も一度は試されるとよいでしょう。

足元へ落とさずとも、そのままポケットへと考えられますが、もしスチューワーズが気づいた際、「アイムソーリー」とポケットの中から出すよりは足元から拾って渡すのがスマートだというわけです。もちろん高い運賃の中にはこれ位のアロワ

ンスはありますので申し出ればニコニコとプレゼントしてくれませんが、反面スリルが無いという事になります。

最後に私のヒコーキが好きな理由は唯一、美しいからです。つまり高速で飛行するためには流体力学的に美しく調和した機体でなければなりません。そこには無駄があつてはならないのです。極端に単純化され機能化された姿が私には美しく思われるのです。

スキだらけの私、ムダ、ムリの多い私にとってヒコーキの持つ美しさは、飛行機の如くあれという自己啓発でもあるのです。何事によらず完成された姿は美しいという事ではないでしょうか。

昭和五十三年 行内誌「あわぎん」寄稿文

追記 文中登場する大阪空港での着陸ミスをした機体は一九八五年御巢鷹山に不幸にも墜落した日航機である。多数の犠牲者のご冥福をお祈りします。

ぼえむ いん まい ちやいるどふっど

人の記憶のおもしろいとこ  
ろとして大切な事はすぐ忘れ  
てしまうにも拘わらず、つま  
らない事を鮮明に覚えていた  
りすることがあります。幼い  
時の記憶ほど、こうした傾向  
があるといえましょう。しか  
し、つまらないのひとことで  
は片付けられない問題を含ん  
でいるのではないかと私は考  
えたいのです。

「ぼく？それ、なんぼしたんで？」「六十円・・・」たわいもない、しかも見ず知  
らずのおばさんとの会話。声色まではっきりと覚えているし、その時の情景もつい  
昨日の出来事のように記憶している私の思い出をお話しましょう。

私が小学二年生の時でした。当時プロパンガスもありましたが家庭の燃料は木炭、



練炭の類でしたし、米を炊くにはマキを使っていました。そのマキが燃え尽きないうちにツボに入れ、出来上がるのがケシスミ或いはケツスミといったように思いますが。とにかくそのツボのことをケシツボと申しました。各家庭の必需品であり、炭化したマキであるケツスミはシチリンの木炭の点火等には非常に便利なものでした。

ある日曜日の午後、母からこのケシツボを買って来るように頼まれ百円札を大切にポケットに入れ、炭屋へおもむきワラで編んだ縄でしばってあるケシツボを求め、ツボを振り振り家路を急ぎました。バス停を横目に何人かのおばさんが待っているなど思った次の瞬間、持っていた縄がふっと軽くなったと思った時はもう手遅れで、ケシツボは壊れ、私は縄だけを握っていました。その時のなんともいえない情けない気持ちには未だに忘れる事が出来ませんし、帰って母に何と云ってよいやら狼狽したものでした。それにも増して人の気持ちも知らず、壊れたツボの値段を無神経に質問した例のオバハンを呪ったものでした。足取りも重く、残された帰途中、私は決して言い訳をするまい、すんなり謝ろう、叱られても仕方が無い、自分が悪いんじゃないか、これから頑張つてケシツボくらい炭屋に並んでいる奴をみんな買つてやると幼な心に非情なほど覚悟をしたものでした。事実、母から不注意をくどいくらいに叱責されました。

今になって考えてみると子供の世界は大人が考えている程、簡単なものではなく、彼らには彼らの考え方や感じ方が確立されているものであつて、それらを尊重して

やるのが肝要と思うわけです。

私の娘も当年、小学二年生。私のこの思い出と同じ年頃となりました。同じ感受性を持つ我が子であるのなら不用意な私のひとことが、どれほど彼女の心を傷つけるかもしれないと、またほんの些細なひとことが、すばらしく勇気づけるかもしれないと思う時、私は親としての責任を痛感するわけです。子供の心の広がりやを理解してやり、考え方を温かく見守ってやることにより、豊かな思いやりのある女性に成長して欲しいものです。

(次回は鳴門支店、三田伸一さんをお願いします)

昭和五十五年 行内誌「あわぎん」寄稿文

## ケーキ作り

「こんにちは」と元気のよい女の子の声の音が玄関で聞こえたと思つたら、今度は「あら、いらっしやい。どうぞ、どうぞ」と妻の音がする。やがて母親と思しき女性と一緒にお客様が居間に入ってきて私の居眠りは台無しになる。挨拶もそこそこに邪魔者は退散とばかりに二階の部屋へと逃げ込んで、折りよく中継されている大相撲のテレビ機敷に座り込む。

かれこれ二時間も経つたであろうか、どうやらお客様のお帰りの様子なので、そろそろ居間に戻るとテーブルの上に大きなケーキが載っていて大半は食べた後であつた。

聞けば先程の母子が朝から一日がかりで作つたとかで、今更ながら女性の根気強さに感心をしたり、食べ損ねたケーキに少々の未練を感じたりもしていると、妻がケーキの説明を始めた。

「電子レンジがうちにはないものですから・・・」と切り出した母子の話が感動的だった。レンジなしで出来るケーキ作りという本を子供が見つけて、二人で協力して作ったのだそうだ。家庭での教育の原点を見る思いがした。

何週間か前に私の家族もケーキ作りに取り組んでいた。長時間を労し出来上がった一物は見た目はお世辞にも綺麗だとは言えず、ずっしりと重たく、まるでお好み焼きのようでもあったので、思わず「何だ、これ？」と言うと妻も娘もふてくされていたのを思い出す。

我が家でのせっかくの家庭教育の場を台無しにした張本人が他人の家庭教育に感心するとは困ったものだと思っしながら、私のためにとっておいてくれた先程のケーキをご馳走になってみた。

店で売られているものとは少々違っているが、それでもさっきの母子の笑顔がそのまま甘さになっていた。

大いに反省をした一日であったが、この時の失礼が余程こたえたのか、その後我が家の妻娘はケーキを全く作らなくなった。私は悪い父親なのだろうか。

## 好きな歌

それは さくら貝の唄。

何度も聴いて何度も口ずさむが、最後の二行がいつも歌えない。

うるわしき さくら貝ひとつ  
去りゆける 君に捧げむ  
この貝は 去年の浜辺に  
われひとり 拾いし貝よ

ほのぼのと うす紅そむるは  
わが燃ゆる さみし血汐よ  
はろばろと かようかおりは  
君恋うる 胸のさざなみ

ああなれど わが思いは儚く  
うつし世の なぎさに果てぬ

！！「さくら貝の歌」（土屋花情作詞）

## ハレー彗星を見た

確か小学三年生の頃だと思うが、ハレー彗星の存在を知った。長く尾を引いた神秘的な星の写真を見て素晴らしく早く飛んで行く星だと信じていた。こいつを見る時には、うっかりしているとあつという間に通り過ぎてしまうのではないかと本気で心配もした。

「あと三十年もすれば、君もこの星を見ることが出来る。」と教えてくれた先生の名は忘れてしまったが、教員室の中ではあまり目立たず、年取った白髪の先生である。

「あと三十年」が「あと二十年」になった時、私は大学受験に失敗し、いわゆる浪人の身であったがハレー彗星によせる気持ちは少しも変わっていないかった。

「あと十年」は既に社会人となり、銀行員五年生の時である。その間もハレーは確実にその速度と明るさを増しながら太陽へと落下し続けていた。

私にとって三十年は、たぶん人生の半分近い年月になるだろう。その半生を待つために費やしたハレー彗星に寄せる思いは又、それなりに特別な価値のあるものだった。

果たして、一九八六年三月には長い間の夢がついに実現することになる。

三月十二日の早朝、四時二十五分。私はこの時刻を一生忘れない。妻と娘と友人夫妻の五人で見ることが出来たハレー彗星は、東の空、水平線の近くに淡く、ともすれば夜のしじまにも溶け込みそうな姿で私の目に入って来た。前日の雨が幸いして大気が澄み、雲一つない無風の絶好のコンディションは、三十年間待ちつづけた辛抱に対するご褒美だったと確信している。

双眼鏡でハレーを探していた私の発見の第一声は、ため息にも似たひとことだった。

「オイツ！おるわ。」と思わず発した私の言葉が適切であったかどうかは別に頓着しないが、どうして「あつたぞ！」とか「見つけた！」の叫びでなかったのだろうか。

あまりにも神秘的な光景だった。右四十五度に尾を引いて、頭を下にするハレー彗星が、今、確かに私の目の中にいる。

私の人生で一番長い計画が、この瞬間に成就した。そしてハレーは私の生涯の中ではもう二度と帰っては来ない。そんな事を考えていると双眼鏡が曇ってきて、何も見えなくなってしまった。夜露でレンズが曇ったのではない、涙のせいだった。

「パパ！早く代わって。」の娘の声で我に返り、みんな交代で観測したが、誰も目の目が輝いていた。「今度この星が帰って来る時は、パパもママもいない。おまえは八十八歳のオバアチャンだ。」と娘に言っただけだったが、いつになく神妙な声で彼

女は「ハイ」とだけ言った。

そのうち東の空が白み始め「パパ最後だから、もう一度見ときなさいよ。」と妻に勧められ、もう一度除いた双眼鏡の中で、ハレー彗星の淡い光は、たちまち夜明けの薄明かりに飲み込まれてしまった。三十年を要したドラマがこの時、終わった。

昭和六十一年 著

## ヨット物語

四十歳から五十歳になるまでの十年間、ヨットを趣味にしていた時代があった。完全週休二日制に移行されることを機に豊かに人生をエンジョイしようとして銀行仲間四人が資金を出し合って中古、いやむしろ古ヨットを購入したのは昭和六十二年の秋である。

艇の名は「じゅげむ」と決まったが最初は出資者めいめいが勝手な名前を言ってきたり収拾がつかなくなったりした結果、縁起の良い名前を全部ならべる落語の「寿限無」に因んでの命名となった。我々に転売される以前の艇名が「ベルバラ」・「あまりの変わり」のように当のヨットもずいぶんショックを受けたのではないだろうか。

ともあれ四人のオーナーに順次クルーが集まって、じゅげむグループは十名を超えて一大勢力となったものの肝心の帆走技術の知識を持つ者は一人しかいなかった。その一人も「ダイタイのヤマダ」とあだ名される人物であって我々の「じゅげむ」はいつも危険と隣り合わせで航海をしていた。しかし幸運と強運がつねに勝ってくれたお陰で十年間、事故もなく楽しく海で遊ばせてもらった。

事故はなかったが事件は航海の都度、何度も起きた。淡路島の隣にある沼島という小さな島によく出かけたが、帰るころには風が強くなり艇を漁港に置き去りにし

たまま連絡船とバスを乗り継いで徳島まで逃げ帰ったことなどしよつちゆうの事で、何のためのヨットであるか訳が分からないと島の漁師に笑われた。おまけに帰りのバスは行き先を間違えて乗り、高速道のため洲本まで連れて行かれたうえ余分の料金を払わされるハメになった事もある。

すべてリーダーたる私の不徳の致すところであり、意気地のない消極的判断を自分でも情けないと思つたが、事故になるよりは遙かにマシというものである。

遠い所では白浜温泉まで足を延ばしたことがある。予想以上に時間がかかり白浜に着いた時にはとつぷりと日も暮れて入港を焦るあまり航路を守らずショートカットしたまでは良かったのだが暗礁にぶつかり地獄を見た。海図を見ると水深は〇・八Mとある。二メートルのキールを持つ我が「じゅげむ」が航行できるはずがないのだが、「今は満ち潮だからダイヤ大丈夫」と艇長のヤマダ君の判断を信じたみんなが悪かった。

運のない時はトコトン運がない。座礁騒ぎのあとは養殖いかだの網に突つ込み漁師にこっぴどく叱られた。しかしその漁師さんのお陰で無事に港まで誘導して貰えた。ピンチはチャンスである。着岸は午後九時にもなつていただろうか、徳島を出て十九時間を要した大航海である。温泉どころではなく、予定があつたK君父子などは慌てて電車に乗って大阪まで帰ってしまった。

翌朝目が覚めて判明したがヨットが停泊しているすぐ前は某電器メーカーの保養所である。せつかく白浜まで来て温泉の一つも入らないで帰るのも勿体無いと思ひ、

さつそく私はタオル持参で保養所に赴いたが風呂場はすぐに見つかった。「おはようゴザイマースツ！」と入つていくと皆も「おはようございませす！」と屈託がない。いい電器メーカーに違いない。お陰で昨日の地獄は今日の天国となった。ありがとうございました。

お目出度い事もあつた。クルーの塩江君は、この白浜クルージングに乗り合わせた美女と結ばれた。はからずも私が媒酌人を務めさせて貰つたが、ヨットとは違つてこちらはすこぶる安全で幸せな航海をしている。

十年の航海日誌には変な事件が枚挙にいとまが無い。しかし事件のたびに十人の絆はより固く結ばれて、今もつて楽しく付き合ひをさせて貰つている。酒を飲むたびに失敗談に花が咲き、最後はダイタイのヤマダ君の結婚話で落ちがつく。艇長の責任が重すぎたのか未だに彼は独身を貫いている。当時でも三十五歳を越えていた。

## 迷いながらの人生を

どうも人生とは いろいろな思い出を秘めて  
迷わずに 静かに 移りゆく事のようにある

日本経済新聞 私の履歴書より

元首相 中曽根 康弘

この記事を読んだのは八年も前のことだろうか。分かったような、分からなかったような文章だったが、今年五十歳を迎えて少しばかり理解出来るようになってきた。静かに移りゆくという表現に共感を覚える。しかし迷わずにという意味は正直言って同調出来ない。私はもつともつと迷いながら人生を送ってゆくような気がする。中曽根氏の年齢が来ればとも考えたが、比較にならない大人物とは同じにはいかないだろう。

せいぜい迷いながら自分だけの人生を送ってみたい。  
いろいろな思い出を秘めながら。

平成十年 著

交遊抄より

友人 熊井君について

明朗で善意にあふれ 誰にでも愛情深く

時にあわて者で 人の笑いを誘っていた

雄

日本経済新聞 交遊抄より

元慶應義塾大学長 石川 忠

この文章を見つけた時、私は自分自身の表現に頂けないものかと思った。誠に言い得て妙である。しかし、いい加減に慌てる癖は直さなければ、みつともない歳でもある。

## 釣り師は根性悪

釣りを覚えたのはいつ頃だったろうと考えてみると、小学低学年の時、上級生の悪ガキ共に川に連れて行かれて、一緒にハイやフナを釣ったのが始まりのように思う。

男の子であれば誰でも遊びの一つに釣りを楽しんでいた時代の話である。テレビゲームやパソコン遊びに熱中する現代の子供の遊びは、私は理解出来ないし、理解するつもりもない。思えば私も昔の人間になってしまったのか。

子供心にも釣りは楽しい遊びであった。小川や池の釣り場も至る所にあつて不自由はなく、十円も出せばウキからハリ、テグスマでセットになったものが駄菓子屋にあつて、竿は近くの山から失敬した竹の枝を落とした物で間に合つた。釣り場へ行くまでには田んぼの畦道にワラを積み上げている所が必ずあつて、その下の土中にはミミズがいるものだからエサも確保できて準備完了となる。

釣り場に到着するや上級生が釣り場所を決めてくれるのだが、前回よく釣れた場所はず彼らのものとなり、実績のない所や、新規の場所がもつぱら私に指定されるのであつた。

自分で言うのも面映いが、私は釣りが上手だった。上級生が一匹も釣らないうち

から大きなフナを釣るものだから、すぐに彼らがやって来て場所を横取りされたりもした。そんな事が何度も続くものだから、だんだんと私の根性も悪くなり釣れた場所を偽って報告するようになる。面白い事に上級生は私を信じて全くダメな所で根性を入れて粘るものだから、いよいよ実績が上がらなくなる。それを横目に「ザマアミロ」という事になって次第に陰湿になる。釣りは根性悪のゲームかもしれないと、その時から感づいていた。

その後、成人しても私の趣味に釣りは含まれているが根性悪は治ってはいない。人より多く釣りたい気持ちには誰でも持つているが、私のそれは通常のそれより遥かに大きいのだ。出来れば独り占めしたいとさえ考えている節もある。また他人に釣られる事が悔しくてたまらない。誠に利己主義としか言いようのない根性悪である。

或る日のこと、私の釣り根性が露骨に現れた事件があった。波止に渡してもらってチヌを狙ったのだが早朝より昼過ぎまで粘っても一匹の釣果も無く空腹にも耐えかねて帰り支度を整えて、渡船場まで来た時のことだった。

向こうからガシラを一匹、ブラブラさせてオジサンがやって来たのである。今釣れたばかりの獲物をどうやらビクに収めに来た様子である。しかし彼が引き上げた網の先にビクは無く、代わりに五十センチはあるうかというチヌが直接ぶら下がっていた。どうやら口からエラブタに綱を通して海中を泳がせていたものと思われるが、私を含めて船を待っている釣り客十人程は全員あっけにとられていた。みんな

ポーズで帰りの船を待っているのにその目の前で大きな獲物を見せつけられては、溜息の一つも出ようというものである。

大物と再会した例のオジサンは追加の小物のガシラを綱に通し、ドボンと海中に放り込んで得意満面の笑みを残し、持ち場へと帰って行った。

五分もしないうちに又、そのオジサン今度も小さなガシラをしとめたとみえて例の綱の所まで帰ってきた。さっきと同じ得意そうな顔で船を待つ私たちを見回した後、おもむろに綱を引き揚げにかかった。しかし、一回、二回と大きく手繰った後、顔色が変わり、明らかに慌てた表情で、彼は小さく速く小刻みに綱を上げ始めた。

結論はすぐに出た。引き揚げた綱の先にはガシラが一匹だけで看板の大チヌは忽然として消えていたのである。船を待つ私たちは全員見て見ぬ振りをして誰一人として言葉を発しなかったが、オジサンはポツンとひとこと「逃げてもた」と言い残してトボトボと帰って行った。

事件はこれからで、やがて到着した渡船に乗り込んだ釣り人十人が波止を離れて港を目指すやいなや、一人がプツと笑うと全員がドツと笑い始めたのである。もちろん私も大いに笑ってしまった一人であるが、これこそ釣り人の根性悪としかいえないような事件ではあるまいか。

あの日の大きな獲物を逃がしたオジサン、その後どうなったのだろうか。それよりどうやって、あのチヌは逃げる事ができたのだろうか知りたところである。

## かちどき橋のトリさん

毎日の通勤時に通るかちどき橋のすぐ横には水道管を渡すもう一つの橋が並んで架かっていて、その橋脚のコンクリートの平らになった所をねぐらにしている二種類の鳥がいる。

一つは鳩のつがいです。昼の住人である。もう一つは名も知らぬ黒い水鳥の大きい奴で、こちらは専ら夜専門の住人であり、二羽いるがどうやらオスどうしのようだ。私はこの鳥たちを「トリさん」と呼んでいる。

二種類の鳥がいつを境に入れ替わるかは分からないが、とにかく昼は鳩、夜はトリさんが橋脚を占有しているわけである。

鳩のつがいはどうやら奥さんの方が強そうで、所謂カカア天下の様子である。毎朝四角いコンクリートの上をゆったりとした足取りでクルクル回って散歩しているが、旦那様はきまつて後ろから首を前後に振り振りあわただしく奥さんを追いかけてる。

前夜の帰宅が遅くなった言い訳をしているとしか思えない体たらくで、自らの記憶と重なり何だかドキッとする朝もある。

反対にもう一方の住人であるトリさんは、いつも孤独な夜をすごしている。橋脚

は四つあるが中央寄りの二つの橋脚に毎夜一羽づつ出勤しては川面を睨んでじつと動かないでいる。きつと小魚か何かを狙っているのだろうが、その精悍な顔つきにはプロフェツショナルな魅力すらある。

長い嘴をキリツと水面へ向け、身動きだにせず、引きもきらない車の騒音もまるで気に留めない様子である。縄張りがあるのか決して二羽で一つの橋脚に居る事もなく、しかも立ち位置までいつも同じなのがプロの所以でもある。又、風の強い日と干潮で水面の低すぎる夜は彼らの姿はない。おそらく漁が出来ないのを知っているのだろう。

私と、このトリさんとの出会いは秋の初め、偶然にかちどき橋の欄干から見つけた時から始まった。三日月が眉山の上にかかり、新町川にはネオンがゆらゆらと映えていた夜である。暑かった夏がやっと終わった心地良さと、ある淋しい出来事の思い出が複雑に入り交じり、ふと橋の中央で立ち止まり、見つけたのがこのトリさんである。暫くじつと見ていたが彼らは身動き一つしない。五分ほど我慢比べをしてみたが、結局は私の負けであった。

以来、帰る道すがら、必ず彼らがいることを確かめるのが日課になったが、トリさんが魚を捕るところを見たことはない。

何を考えながらじつと耐えているのか、生きるための凄まじいまでの迫力を持っている彼らに私はいつしか友人としての親しみを感じるようになっていた。私から

の一方的なコミュニケーションかもしれないが、とにかく彼らの姿には学ぶべきところが多い。

プロとしての生きざまがそこにはあつて、男としての孤高さもあり、縄張りを守りながらも決して他の領分を侵さない律儀なところなど、かくあるべしと思うわけである。

十二月に入ったばかりのある夜、いつも二羽いるはずのトリさんが一羽だけだった事があった。

寒くなり漁も少なくなつたのだろうか、それとも・・・と私の脳裏に淋しい想像が一瞬よぎつた。

いつまでもいるはずはないと思つてはいたが、やはりトリさんとの別れは辛い。二日後の穏やかな夜には冷たい雨が降つた。私はタクシーで帰宅したので彼らの存在を知る事が出来なかつたが、この話を知る友人から聞くところ、やはり一羽だけが雨に濡れながら頑張っていたそうである。その姿は何故か淋しそうでもあったという。

## 私の好きな詩

ウイスキーのコマーシャルでいつか流れたことがある。  
私の好きな詩となった。

恋は 遠い日の 花火ではない

愛することも 愛されることも

とてつもない エネルギーがいるんだな

そのことが 感じられるようになってきた

諦めじゃないんだ 知恵なんだよ

サントリーオールドCM「人間みな兄弟」(ナレーション)

# 涅槃の道場

## 塩江家・原家 媒酌人挨拶

媒酌人といたしましてひとことお慶びのご挨拶を申し上げます。

私共は、この度ご両家のお目出度につきまして、新郎、塩江保良君の趣味でもございませよットを通じてご親交を頂いておりました関係で仲人役の榮譽を賜りました持山でございます。本日は洵におめでとうございます。

本日の佳き日を選びまして塩江保良君、原美佐子さんのご婚儀が当祥雲閣、清明殿におきまして厳かに滞りなく執り行われ、ここに幾千代かけた三国一のお似合いのカップルが誕生いたしました。偕老同穴の契りを結ばれました事を謹んでご報告申し上げますとともに新郎新婦ならびにご両家のご家族、ご親族の皆様には心よりお祝いを申し上げる次第でございます。又、本日はご来賓の方々におかれましても、お忙しい中を二人のために、このように盛大にご参会を賜りまして本当に感謝に堪えませぬ。新郎新婦ならびに両家に変わりまして厚く御礼を申し上げます。

それでは恒例でございますので、新郎新婦のご紹介を申し上げます。

ご承知の通り新郎保良君は、中昭和町にて塩江木材有限会社をご創業され三十七年間の永きに亘り徳島の伝統工芸品を生産してこられました塩江俊夫様、都志子様

のご長男として、昭和四十年十一月六日に誕生し、県立城南高校を優秀な成績で卒業後、二十歳までの熱き青春を大阪の自動車整備専門学校、或いは北海道で牛の世話をしながらの牧場の住み込み等、旺盛なチャレンジ精神をもって人間形成を図りました後、成人を機に家業を手伝うべく帰郷し、お父様の右腕として修行に励んで参りました。

その間、得意先に対して自らの存在も多く知られるところとなり、現在はその人脈を活かし住宅設備機器販売施工をなさっておりますハウジングスタジオ神田様の門下で今後の一生を託すべく、頑張っているところでございます。

新郎保良君はもちろん、現代青年でありまして自由な発想の中に奔放な生き方を求めておりますが、反面いささか古臭く浪花節的などころのある青年でもございませぬ。と申しますのも塩江木材をご創業され今日の繁栄を築かれましたお父様のご苦労と、内助の功たるお母様の思いやりの両面をご家庭の中で自然に体得され、人間関係を大切にし、人を思いやる気持ちを持たれているからでございまして、特に友人に恵まれ、集団の中で自らの責任を果たす彼の日常の態度には、洵に清々しい思いがいたします。

一方、新婦美佐子さんにおかれましては、八万町にて食料品店を経営されております原成芳様、満子様のご長女として昭和四十年十二月二十三日に誕生され、新郎と同じ城南高校を、これまた抜群の成績で卒業後、東京で美容技術の専門学校に

学ばれ、レブロン化粧品美容部スタッフとして青春の汗を流して参りました後、やはり二十歳の成人を機に徳島に帰り黒崎楽器店に勤務され現在に至っております才媛でございます。

新婦美佐子さんは皆様ご覧の通り大変な美人でございますが、残念ながらこれもともと美人なのでございまして、決して美容の専門技術を身に付けられたからではございませんので、念のため申し添えます。

又、新婦のお父様は百年続いております金物商の老舗であります株式会社ハラケイの次男坊としてお生まれになりながら志も新たに独立され、数々の労苦を越えられて現在の食料品店を昭和三十九年に開業されました。時あたかも東京オリンピックが開催されておりましたのに因みまして、店の名も五輪堂と命名され今日まで奥様満子様と共に、わき目も振らず仕事に精励され地域社会に大変な貢献をされております。仕事に対する厳しさに反してご両親の家族への思いやりは大変に理解のある温かいものでして、新婦美佐子さんの、伸び伸びとした、大らかな性格はご両親からの掛け替えのないプレゼントでございます。

美佐子さんは帰宅の際、時として「ヤッホー」とか「ハイ」とハイカラな挨拶をされるようですが、ニューファミリーを目指されたご両親の教育の賜物と本席で披露させて頂きます。

さて、お二人の出会いから結婚までの経緯もご披露申し上げなければなりません

が、そもそも二人はご紹介の通り、城南高校の同級生としてお互いに知り合っておりまして、音楽好きな二人は「サイコ」というバンドで新郎はパーカッション、新婦はキーボードを担当され、活躍をしておりました。

その時より、神の見えざる糸で二人は結ばれていたようでございまして、卒業後それぞれの道を進みながらも奇しくも二十歳をもって故郷の徳島に帰り当初は高校時代の同窓としてグループ内での交際があったようでございます。ところが昨年の夏、ヨットレースに私の船に乗り合わせたのが総仕上げの始まりでした。秋には南紀白浜まで遠出をすることになりましたが、紀伊水道の真中で、事もあろうにビニール袋をスクリューに巻き込み、立ち往生をしてしまいました。その時、新郎保良君は自ら進んで命綱をつけ、海へ飛び込みビニール袋を取り除いてくれましたお陰で難を逃れたのでありますが、その時の彼の男らしさは私共、男性から見ても惚れ惚れするものがございます美佐子さんの気持ちもクライマックスに達したに違いありませんでした。

その夜は私も、ちよつと意地悪しまして、ヨットの中では故意に二人を離して寝かしたものですから、この事も保良君の気持ちをクリックスマックスにするに十分な効果があったと私は確信しているのであります。

ともあれ二人は急速に接近し、お互いを理解した上でご両親にも紹介し合い、家族ぐるみのお付き合いの結果、本日の華燭の典を迎えた次第でございます。又、二人が知り合ったヨットの名前も「寿限無」と申しまして、寿に限りが無いと書きま

す。誠に二人には打つて付けの舟だったわけでございます。私をはじめ「寿限無」の乗組員全員も大変光栄なことと喜んでおります。以上申し上げました次第で二人は本日、固く結びましたわけでございますが、今晚より新郎新婦は白浜の夜とは違つて晴れて一つのベッドで休んで頂いても結構でございますが、どうか二人が育んでこられた愛情を大切に、又あなた方をこんなに立派に育てられましたご両親の温かいご恩も忘れる事なく良い家庭を築いて頂きたいと思ひます。

これをもちまして私のご挨拶とさせて頂きませんが、実は私共夫婦にとりまして今回が初めての仲人でございます。この佳き日の思い出は生涯の宝物になりそうです。

そして本日も列席下さいました皆様にもお願いがございます。二人の人生航路は今始まったばかりでございます。新郎保良君はヨット乗りですから大海原を航海する技術は確かに持ち合わせておりますが、まだまだ人生の荒波は未経験でございます。どうか今後とも温かく見守つて頂きますと共に厳しいご指導を宜しくお願い申し上げます。

最後となりましたが新郎新婦の今後のご多幸と、ご両家益々のご繁栄を心からお祈り申し上げます。どうも有難うございました。

## 私の嫌いなもの

私の嫌いなものは三つある。

カバーつきの電話機

羽根のはえた自動車

そして ミノ、タン、センマイ、レバー

カバーつきの電話機とは埃よけのつもりであろうか、手作りのカバーをすっぽりと被せたもので、よく玄関の下駄箱の上あたりに鎮座しているのを見かける。ご丁寧にダイヤルの上にも丸い蓋があつて、片手でそれを持ち上げながらジーコ・ジーコと回さなければならぬ。受話器にも取っ手の回りを腹巻状にカバーが着けられていて、ダックスフントが服を着せてもらっているようで、これ又あまり好きになれない。

理由は拭き取りの掃除が出来ているかどうか分からないことにある。

羽根のはえた自動車は若者の車に多い、スポイラーと称す一物とかで高速走行時に威力を発揮するそうであるが、日本の道路事情では無用の長物ではなからうか。第一、役に立つほど速く走れば交通事故の心配もある。車の掃除も面倒なのではな

かろうか。つまるところ無駄である事が嫌いな理由となる。

三つ目は食わず嫌いというもので、とにかくどこの内臓の肉であるかリアルに知ってしまふと食べられないのである。しかしロース、フィレ、カルビ等、肉の部位で言われれば大丈夫となるのだから自分でも理由はよく分からない。

## ミーとムーとクマ

我が家では生き物を飼わないとの私の意見が随分長く通っていた。少なくとも次女が生まれる迄は確かに続いていた。唯一の例外はオバアチャン（母）が飼っていた九官鳥であったが、これは治外法権で私の意見が通らない世界であるため、仕方のない事であった。

平成五年に母が他界した後も未だに達者で、亡き母の部屋で「ヨイショ」「ヨイショ」と母の声そっくりに一日中わめいている代物なのだが、専ら女房が面倒を見ている。

私が生き物を飼わない理由は、不注意により十姉妹のつがいを殺してしまった事による。

小学生の時ペットに十姉妹が流行り、母に無理を言って買ってもらったのだが、ある寒い冬の朝、可哀想だと思ひ南向きの暖かい所へ巣箱を移動してやったまでは良かったのだが、以後三日間、置き去りにし気がつけば巣箱の中で夫婦の十姉妹が肩を寄せ合って固くなっていた。もう二度と生き物は飼わないと、その時に私は十姉妹と約束したのである。

ところが、長い間守ってきたこの約束は次女が生まれた年に、いとも簡単に破られてしまう。やはり冬の寒い夜であつたらうか、一匹のトラ猫が窓の下でミヤミヤと住み着いてしまったのである。そのうちどこかへ行くだろうと無視していたが三日目を迎えても立ち去ろうとしない。さぞや空腹だろうと可哀想になりケンタツキーチキンを放り投げてやったのが運の尽き。爾来、我が家の準構成員となつてしまつたわけである。

家の中には入れず、餌を与えるだけの縁ではあつたがどこで寝泊りしているのかはついに分からずじまいだつた。ただ朝と夕には正確にご飯をねだりにやつて来て窓の外からトントンと合図する賢い猫だつた。私達はこの猫を「ミー」と名付けた。家の中で飼つてやつても良かったのだが、そうも出来ないのが、せめてもの私のポリシーの主張であつた。

ミーはメスで美人でもあつた。その証拠に近所中のドラ猫のオスがとつかえ、ひつかえ、やつて来てはプロポーズして行くのである。そのうち一番体の大きいシヤム猫の雑種と思しきが彼女のハートを捕らえボディガードを兼ねていつも一緒に居るようになった。

彼は熊のように真っ黒な顔をしていたので、名前は程なく「クマ」と命名されたが、見掛けとは裏腹に普段は気の小さな猫である。

クマは餌を与えてもミーが食べているうちは三步下がってじっと待っている。た

まらなくなつてソツと近寄れば、ミーが「ギャオー」と怒る。するとクマはタジタジと元の位置まで返り、大人しくしている。そんな猫であつた。

頼りないクマもこと恋敵に関して異常なほどにフアイトを燃やしていた。ミーに近づくオス猫には容赦なく飛び掛かり撃退するのである。男らしい事この上ないクマに私はすっかり惚れていた。男子たるもの、かくあるべしと我が身を振り返り反省させられたりもした。

そんな或る日、珍しくクマが額に傷を負つて帰つて来た。敵に爪をたてられたのかオデコをザツクリやられ月形半平太になっている。

ところが翌日にはチャツカリとカッターバンを貼り付けて、ミーの側にいた。クマはどこかの飼ひ猫だつたのだ。

クマとミーにはたった一匹、子供が生まれたが私達はその子に「ムー」と名前を付けた。理由は簡単、ミの次はムなのである。

クマ、ミー、ムーの幸せな生活が続いたのはそれから六ヶ月余りしかなかった。ミーとムーが忽然といなくなり、そのうちクマも寄り付かなくなつた。いなくなる直前、ミーはかなり衰弱しており、きつと産後の肥立ちが良くなかつたのだろう。何処かで死んでしまつたのに違ひない。一ヶ月もしない内に倉庫の土台部分から、やたらとハエが出るようになったが、ミーの亡骸がそこにあつたのかもしれない。

倉庫をどけてみようとの話も出たが、ミーの可哀想な姿を見るのも辛くてそのままにしている。

その後、二代目のメス猫、「ジュリア」が長女によって拾われて我が家にやって来た。ミーと同じで食事だけ与える付き合いだったが賢い猫で近所中の評判にもなった。しかしながら、交通事故で敢えなく頓死。現在は次女が拾ってきたジュリア二世となっている。

名前はジュリアだがレッキとしたオス猫である。そしてこの猫だけは納戸を自分の部屋にあてがわれている。先代二匹の犠牲の上に己の幸せがあることも知らずに、毎日寝て暮らしている。

先代はみんな賢いトラ猫であったのに、なぜかコイツだけはアホ猫である。どうも長生きしそうだ。

## 母の死の日

父は私が五歳のときに他界したから記憶といつてもそれほど鮮明なものではなかったし、悲しい感情も実感としては殆どなかった。反対に母の死は私を含め家族全員を非情なほどに苦しめた。

子宮癌の手術を受けた日、立会人として病院にいたのは私と弟であったが、医師の差し出す白い大きなゆで卵のような物体が母の子宮とこのことであつた。私はこの中で製造されたのだと妙な事に感心していたのだが、思わず目が合った弟も同じ事を考えていたのに違いない。

医師の話は続いた。子宮癌そのものは全く問題なく切除したがリンパ腺を調べた結果、転移の疑いもあり今後六ヶ月間は制癌剤を投与し治療をするとの事である。手術の成功そのものに喜んでいた私達には医師の最後の説明など、ほ



んの念押しが付け足しにしか聞こえず、何よりも退院後の母の回復の早さを見るにつけ、その後は全く心配などないように思われた。事実三ヶ月も経つと母は復職し、半ばで止めていた四国八十八箇所巡礼も再開し休日を利用してはバス巡礼に参加するまでになっていた。

制癌剤は結局二回投与されたが副作用の激しさから母はその後の投薬を拒否し医者を困らせた上、本人の意思を尊重するという事で治療は打ち切られた。

以後、平穩に二年の月日が流れ母も家族もみんなが病氣のことなどすっかり忘れていたのだが悲劇はもう既に始まっていた。

「フーコさん、ちよつと腰が痛いし最近歩くのが少し辛くなってきたのよ」と嫁に母が打ち明けたのは夏の終わりだった。その時には誰も気にすることなく、予定していた潮干狩りに出かけたが、あれほど好きだった母が、その日は水に浸かりもせず孫が掘ってくる貝を水辺で洗っているだけの姿を見て、私は何かの悪い予感を確かに感じていた。九月、十月と日を追って母の状態は悪くなり、杖なしで歩けないまでになるには長くは掛からなかった。

十一月に入り「今日はお四国参りが結願する」と言って朝早く出かけた母が、夜に帰るなり「お大師さんのお陰でここまで歩いて帰れた」と言うと言先で動けなくなってしまうのである。翌日病院へ行き検査をしてもらい、一週間後に医師から私は一生のうちで一番悲しいニュースを聞かされる事となった。

医師は冷静に説明してくれた。つまり母の癌の転移が早く進行し、今や手遅れの

状態であるという事だった。癌は骨盤に取り付いており、放射線治療も、除去すら出来ないとも知らされ、加えて「あと半年も持たない」とも言われた。

お正月の三が日くらいは家で過ごしてもらおうと、大晦日から一時帰宅の許可をもらい帰ってきた母であったが、腰が痛いと言われてばかりであった。病院に帰ってからは対処療法しかないとのことで、モルヒネの治療が始まり、痛みこそ無くなったものの母の運命はもはや非可逆的に死へ突き進んでいったのである。

妻と娘は毎日の大半を病院で過ごし、なるべく話相手をしていたようだが、私は勤め帰りに病院に立ち寄り、付き添い用のベッドで三十分ほど寝ていくのが私の日課となった。

話すことも無かったが、病院食の食器を配膳室に返しに行くのが唯一の仕事になった。後日親戚の一人から「あの何もしない兄ちゃんに食器を片付けてくれる」と嬉しそうに母が自慢していたと聞かされたが、私の出来る事は所詮それくらいのことと思うと改めて悲しかった。

三月半ばになり母はついに昏睡状態に陥った。前週には神戸の親類が大勢で見舞いに訪れ、昔話に花が咲き、ゲラゲラ笑っていた母だったが、週が明け再び激痛に襲われるようになり、点滴を開始した途端に意識がなくなつたそうである。もちろん家内が付き添っていたが「フーコさん、薬が効いてきたらしいわ」とひとこと言

つたきりだったそうだ。

二週間の昏睡から覚めることなく母は逝ってしまった。父の死はボンヤリした思い出だが母の死は長く苦しい思い出を残した。家族も気丈に耐えたが母はもつと耐えていたに違いない。最後まで癌であることを伏せていたが、もしかすると分かっていたのかもしれない。

四国遍路をやり遂げて倒れ込んだ日から約五ヶ月、あまりにも早い病気の進行であった。母の納経帳は葬儀の日に棺に入れてあげた。巡礼の前日、朝早くからタクシーを呼ぶのは気の毒だから徳島駅まで送ってくれないかとの母の頼みを断った事が悔やまれる。

## 母に贈ったオルゴール

オルゴールの宝石箱といえは私が高校生であった時代には、かなり高価な商品であったように記憶している。高校の授業料が千三百円の時代に、なげなしの小遣いを貯めて母の誕生日に買ったオルゴールは千八百円だった。木彫りの木の葉が一枚、蓋の上に乗っていてちよつぴりオシャレな代物だったが母は期待以上に喜んでくれた。

曲は「真珠採りのタンゴ」。当時より私が好きだったタンゴの曲である。母がこの曲を気に入ってくれたかどうかは定かではないが息子からの思いがけないプレゼントを貰う事そのものが嬉しかったのだろう。

長い間、母にプレゼントしたことも忘れていたのだが、或る日思いがけなくこのオルゴールと再会することになる。母の四十九日も済み、気持ちが悪く落ち着いたところで彼女の部屋を整理していると、タンスの中の貴重品を入れる所から出て来たのである。

一瞬、私は電気に感電したようなショックを感じた。もう三十年以上も経っている記憶が昨日の事のように蘇ったのであった。

時計店のウインドウの中を覗き、どのオルゴールが良いか悩んだこと、値段が予

想以上に高くて一時は諦めようと思ったこと、もちろん当日の母の嬉しそうな顔、あらゆる記憶がジャジャジャーとベートーベンのように私の頭の中を駆け巡っていった。

よほど大切にしてくれていたのだろう。昨日買ったばかりのように光沢を保っていて、蓋を開けるとあの懐かしいメロディーが流れてきた。母が時々ネジを巻いてくれていたのに違いないと思うと目頭が熱くなってしまつて慌てて蓋を閉めてしまった。

このオルゴール、今は私の書斎の机の上に鎮座しているが、中には壊れたタイピン、カフスポタン、飛行機から失敬してきたスプーンなどが入っている。ただしこれらの品物のご愛嬌で本当の中身は母の思い出である。

よく喧嘩をした母で、さんざん親不孝だった私だが、唯一の自慢話として私をホツとさせてくれるオルゴールである。

## 九官鳥のレナ君

母は色々のものを残して死んだが九官鳥のレナ君（オスカメスは分らない）も、その一つ、いや一羽である。先生、随分長生きで母の生前に十一年そして死後六年と都合十七歳である。かなりのババアに違いない。（いやジジイかもしれない。）

ペットは必ずしも好きではないが、母の寿命が足りなかったのは仕方のないことでありレナ君の余生は私が預かることにした。実際には私の妻の仕事となってしまうが、これが又、なかなか厄介もので餌は散らかすし、糞はするしで母の部屋の広縁は彼に占領されてしまっている。

もちろん鳥カゴに入っているが、お行儀はすこぶる悪い。

加えてよく喋る。朝から晩まであらぬ事を言つては「ワハハハハッ」と笑っている。時々「ワッション」と大きなクシヤミでする。その間には「ヨイショ ヨイショ」と四股を踏む。困った事に笑い声もクシヤミも母の声そっくりなのである。今でこそ七回忌も過ぎ、もう慣れてしまったが母の死んだ直後は元気だったころの母を思い出して家族一同シュンとなったものである。

以下、代表的なレナ君のシャベリである。

「ワッション」

「ワハハハハッ」

「ヨイシヨ　ヨイシヨ」

「オハヨウ」

「レナチャン　オリコウ」

「ニイチャン　ニイチャン　ヨビヨンノニ」

「サユリチャン」

「パキュン　パキュン　カカカカカ」

「ホナケンドナ　ドナイヤラヤケンナ」

長女の名

意味不明

かなり意味

彼の本名はレナだが、私は「ワツシ」と呼んでいる。勿論クシャミのワツシヨンに由来している。休日の朝など彼の声が聞こえない時はいつも妻に聞いている。「オ、ワツシは生きたんのか？」という具合である。

それにしても笑い声といい、クシャミといい、ヨイシヨといい母の声そっくりである。母はテレビの娯楽番組が好きだった。そして誰はばかることなく「ワハハハハッ」と笑っていた。クシャミも「ハックション」ではなく「ワツシヨン」であつたし、立ち上がる時はいつも「ヨイシヨ」と言っていた。

せいぜいレナ君には長生きして貰いたいものである。

(追記)

そのレナ君にもついにお迎えがやって来た。穏やかな冬の休日であかい昼下がりが

に、絶命しているのを妻が発見した。そういえば一ヶ月前から何となくヨタヨタしていたとの事で、得意の「ワッション」も「ワハハハハッ」もどこか母の声とは違つて調子はずれだつたそうだ。家族一同、悲しんだことは勿論であるが次女の春奈は随分泣いた。一番世話をしていた妻も悲しみをこらえ終始無言だつた。

剥製にでもするかと思つたが結局、母の部屋からよく見える庭の木の根元に埋めてやつた。母が死んで七年目を迎えようとする平成十二年二月十二日のことである。

レナ君、おばあちゃんが待つている所へ早く行つてやつて下さい。おばあちゃんも喜ぶはずだから。

## 春奈卒園のお礼文

く平成七年三月 春奈、卒園にあたって文集への寄稿文く

「そんなもん受かつとるはずがないから見に行かんでも、いいじゃないか。」付属幼稚園の入園試験の結果を確認するため、妻と娘を乗せて走る私の車のハンドルは重かった。

午前九時までに確認の事とも言われていたが、園に着いたのは確か五分前。「オイ見て来い」と言ったまま運転席で待っている私に、息せき切つて帰つて来た妻が言った言葉を、はっきりと覚えています。「おとうさん！名前が載っているのよ、どうしよう・・・」

こんな具合で始まった次女春奈の幼稚園生活だったがアツという間にもう修了、本当に短い二年でした。

「おばあちゃん、わたし、ふぞくにいくんよ」と孫からの話に目を細めた母は、残念ながら入園式を待たずに他界、悲しく苦しい時代に一筋の光を灯し、家族に常に笑いを提供してくれたのも娘、春奈の幼稚園生活の話でした。

一年目は何故かオタツキーで一人ポツンと教室に残り、折り紙ばかりしている話

を聞くにつけ心配もしましたが、飽きもせず手裏剣ばかり何十個も折ったりしていたそうです。なかなか根気があるじゃないかと思つたのは親バカだったのでしようか。

やがては必ず明るい子になると信じていました。が二年目になつてやつと本領發揮、俄然行動的になり友達ともよく遊ぶとの話を聞いてホッとしたものでした。子供の個性を重んじ自分で考へて行動する子供を育てる付属幼稚園のおおらかな懐の深い保育方針と温かい先生方の心遣いに改めて感謝申し上げる次第でもあります。

又、父兄参観に行かないことをプライドに掛けて守つてきた私も、年をとつての子供である春奈には何度か園内を拝見する機会を持たざるを得ませんでした。娘の積極性にも理由がありました。が、付属幼稚園の内部に何か息づいている空気をいかムードと申しましようか雰囲気が好きだった事も否定出来ません。園児がそれぞれの工夫で作つた工作物、大切に育てている植物、思い思いの遊具、そして小さく可愛い椅子。みんなが輝いて見えました。このような環境で娘が感受性の高い時代を過ごせたのは何と幸運なことだったでしょうか。

もう四十年も前の話です。ので些か時代がかつて恐縮ですが、私が娘と同じような年の頃、母から買ひ物を頼まれた事がありました。炭屋へケシツポを買つて来るように頼まれ、百円札を大切にポケットに入れ、ワラで編んだ縄で縛つたケシツポを求め、壺を振り振り家路を急ぎましたがバス停を横目に何人かのオバサンがいるな

と思つた瞬間、持っていた縄がふつと軽くなつたと思つた時はもう手遅れ、ケシツボは壊れ私は縄だけを握っていました。

その時にオバサンの一人が言つた言葉・・・「ボク、それなんぼしたんで？」

あの時の何とも言えない情けない気持ちには未だに忘れる事ができません。又、帰って母に何と言ひ訳すればよいのやら狼狽したものでした。それにも増して人の気持ちも知らず壊れた壺の値段を無神経に質問した例のオバサンを呪つたものでした。

今になって考えてみれば子供の世界は大人が考えている程、単純なものではなく彼らには彼らの考え方や感じ方が確立されているものであつて、それらを尊重してやる事が大切だと思ふわけです。私の娘もこの日の思い出と同じ年頃となり、同じ感受性を持つ我が子であるのなら不用意な私のひとことがどれほど彼女の心を傷つけるかもしれないし、又ほんの些細なひとことが素晴らしく勇気づけるかもしれないと思ふ時、私は親としての責任を痛感致します。子供の心の広がりを理解してやり、考え方を温かく見守つてやることにより、豊かな思いやりのある女性に成長して欲しいものです。

大切な時期を伸び伸びと、しかも遅しく成長させて下さいました先生方に、又お友達になつて頂いた園児の皆様に改めてお礼を申し上げます。

春奈パパ

## 高知の日曜日

高知には日曜日なる朝市があり、何度か行ったことがある。早朝より高知城下にならぶ露天商は千五百軒もあるという。店の種類も多く近郊で採れた野菜、果物から魚介類及びその加工品、刃物から庭石、骨董品、はては犬、猫に至るまでありとあらゆる物が売られ、その人出とあいまって賑やかな事この上ない。

この市の特徴といえば人と人の触れ合いという事になるうか、とにかく物売りの主人との対話が楽しいのである。「オツチャンまけといて」と言えばどこの店でも少々のデイスカウントはオーケーである。「オバチャン若い頃べつぴんさんだったでしょ」と言えば絶対に五個ひと盛りのミカンに一個のオマケがつくという具合である。

そんな中で私が最前に行っている店に石のオンチャンがいる。もともとは市役所のお役人だったのだが、このオンチャン、趣味が昂じて化石の世界に入り込み、アンモナイトやら三葉虫、古代魚から、はては恐竜の卵まで何億年前から数千万年前のものまで、とにかく彼の家の中は化石がいっぱいで地方都市などによくある博物館などは足元にも及ばないそうだ。

そんなコレクションの中から少しずつ日曜市に持ち出しては屋台に並べるのであるがマニアはいるもので常に店は黒山の人だかり、オンチャンもかなり儲かっているらしい。

客の中には大学の偉い先生や博物館の収集担当者もいるそうで、どちらが先生か商人か分からない会話を店先でよく聞く。とにかく面白い店である。私も一億数千万年前のアンモナイトとかアリゾナ砂漠に落ちてきたという隕石のかけらをオンチャンから買ったが、いつも決まって「あんただから、この値段、人にはナイショ」である。ご夫婦でいつもニコニコして店頭に立っているがマツコト幸せな、いい顔している御仁たちである。

店に寄れば決まって私の母のことを聞いてくれるのも有り難いが、今年はその母が昨年無くなった事を伝えるのが辛かった。オンチャンもオバチャンも共に悲しんでくれたが「あんたは十分に孝行しとる、オンチャンは知つとる」と一声掛けてくれたのは嬉しかった。

そんな石屋のオンチャンにお別れして、日曜市を先へと進むと交差点の真中で若いお巡りさんと、見るからに胡散臭いオジイチャンが何やら揉めている。野次馬根性まる出しで近くまで行って聞き耳を立てると、どうやら無許可営業をお巡りさんが取り締まっているらしい。千五百軒もある露天商はみんな県の営業許可と警察の道路使用許可を必要とするのに、このオジイチャンは、ほっかむりのタオル一つで

誤魔化しているらしいのだ。

いつでも逃げ出せる準備であろうか小さな屋台には金属製の車輪が四隅について、押せばすぐに移動出来る仕掛けになっている。にも拘わらず件のオジイチャン、お巡りさんの言葉にはまるで知らんぷり。昼食であろうかイモをかじって馬耳東風である。屋台の上にはタケノコが五本とワニの置物、大皿三枚に鉢二つと、かなり淋しい商品構成である。そのうちお巡りさんもバカらしくなったのか諦めてどこかへ行ってしまったが、これからオジイチャンの真骨頂であった。一人の客が例のワニの置物に興味を示すや、「中国製のセトモノ（？）じゃ、二千円」と一声発したまま黙っている。この論法だと皿は古伊万里、鉢は古代ギリシャ、タケノコは売れた時のオマケといったところか。思わず滑稽さに噴き出しそうになったが、オジイチャンじっと中空を睨んだまま、客に媚びる風もなく、土佐っぽのプライドがそのまま黒光りの銅像になったようであった。

一日中こんなこととしていて、一体いくら稼ぎがあるのかと、些か疑問に感じたが、それも野暮というもの、オジイチャン健康のために頑張っているのではなからうかとさえ思えるフシがある。ともあれ喧騒の中、いろいろのコミュニケーションを育みながら高知の日曜市は続くのであった。オンチャン、オバチャン、オジイチャン、みんな頑張れ。

## 祖谷倫代さん結婚式の祝辞

アヒルとかニワトリのヒナは卵の殻を割って生まれた際、すぐ近くの動く物を親と思い込む本能があるそうです。新婦倫代さんは私が阿波銀行秘書課に勤務していた時に入行して来られました、その時たまたま私が上司でございましたものから、ヒナ鳥よろしく私を親代わり、若しくは兄貴代わりとして慕って下さいました。

その結果、今日この佳き日に祝辞を述べさせて頂く事になりました次第ですが、非常に嬉しく、光栄に思っております。本日は洵におめでとうございます。

入行当時の新婦倫代さんは洵に明るく活発な女性でございました、赴任されました日には職場にパツと華が咲いたようになつた事を昨日のように思い出します。

当時は毎日、研修日誌なるものを業後に提出して貰っていたのですが、その中に「心の天気」という欄がございました。新婦倫代さんは、その欄に毎日晴れと書いてよこすものですから、一度、いつも晴れは結構なのだけれど、たまには曇りや雨も本当はあるのではないかと尋ねたことがありました。

しかしながら倫代さんは毎日が楽しくって仕方がないので、晴れとしか書きようがないとの返事でした。曇りや雨の日が圧倒的に多かった当時の私は逆に教えられ

るものがございまして、大いに勇気づけられたものでした。

人生には当然、晴れや曇りや雨、時には嵐の日もあると思いますが、それはあくまで取り巻く環境のこととして、新婦倫代さんにおかれましては、心の天気がいとも晴れの状態で新郎真一郎さんと一緒に今後の人生行路を乗り切って行かれますようお願い申し上げます。

せっかくの機会ですので、もう一つプレゼントしたいお話がございまして。

白鳥座という星座がございまして、ちょうどその嘴のところの一つの星があります。アルビレオと名のつくその星はギリシャ語でまさに嘴、あるいは先頭を行く者という意味があるそうです。実はこの星は三等星であって、あまり目立つ星ではないのですが何とも云えない美しい光を放っている事でも有名なのです。

この星を望遠鏡で見えますと実は互いに近くにある二つの星から出来ていることが分かります。そして一つはオレンジ色に、もう一つはグリーンにと夫々違った色に光っている事も分かります。私はこの星を見る度に夫婦とは、かくあるべしと思えてなりません。

つまり、お互いに違った個性を持ちながらも相和して一つの美しい光を作り出し、そしてその輝きは決して目立つものではないという事なのです。

新婦倫代さんも新郎真一郎さんと相和して、美しい光をこれから灯して下さい。決して一等星のような目立った強い光を望まなくても良いのです。地味でも味わいのある光を放つ存在になって頂きたいのです。

つまらないお話ですが、私の祝辞に代えさせて頂きます。本日は洵におめでとう  
ございます。

## ハイサイおじさん

沖縄で教わった民謡だが楽しい唄である。琉球銀行の友人が後日送ってくれた翻訳文が琉球弁の理解に大いに役立った。

一・ハイサイ おじさん（ハイイ）

一・こんにちわ おじさん（はい）

ハイサイ おじさん（アツヌガ）

・こんにちわ おじさん（なんなの）

夕びぬ三合ビン小 残とんな

・昨晚の三合ビン 残ってませんか

「ゆうびぬさんごうびんぐあ ぬくとんな」

残とうら 我んに分きらんな

・残っていたら私に 分けて下さい

「ぬくとうら わんに わきらんな」

アリアリ童 イエー童

・何言ってたんだ この子は

「ありありわらばあ いえーわらばあ」

三合ビンぬあたいし 我んにんかい  
「さんぐびんぬあたいし わんにんかい」

・三合くらいのお酒で 私に

残とうんでい言えんな イエー童  
「ぬくとうんでいいえんな いえーわらばあ」

・残ってますかなんて 聞くなよ  
お前

アンセおじさん

・それじゃおじさん

三合ビンし 不足やみせーら  
「さんぐびんし ふすくやみせーら」

・三合で 不足と言うのなら

一升ビン 我んに 呉みせーみ  
「いっすびん わんに きみせーみ」

・一升ビンを 私に 下さいますか

三. ハイサイ おじさん (ハイイ)

・三. こんにちは おじさん (はい)

ハイサイ おじさん (アツヌガ)

・こんにちは おじさん (はい)

おじさん カンパチ まぎさよい

・おじさんのハゲは 大きいね

みみじカンパチ 台湾ハギ

アリアリ童 イエー童

「ありありわらばあ いえーわらばあ」

頭ぬ禿とし 優秀やーど

「ちぶるぬはぎとし でいきやーど」

我った元祖ん むる優秀やー

「わったんがんすん むるでいきやー」

アンセおじさん

我んにん 整形しみやーい

「わんにん せいけいしみやーい」

あまくまかんぱち 植いゆがや

「あまくまかんぱち ういゆがや」

・みみずのハゲやら五円ハゲ

・何言ってるんだ お前は

・頭の禿げているのは 優秀なんだ

・私の先祖もみんな優秀だった

・それじゃおじさん

・私も整形してもらおうかな

・いろんな所にハゲを作ってみようかな

この唄にはもう一つの思い出もある。昭和五十六年頃、東京へ出張の都度よく飲みに行ったのが「那覇」というスナック。その店のバーテンダーをしている若者が興に乗ってくるといつも三線（さんしん）を弾きながら唄ってくれるのが、この唄だった。

「帰りたいんだけど沖縄には働くところがないので」といつもボヤいていた。

## M氏作、マル秘宣戦布告

私が五十歳になった時、M氏が誕生祝いにと面白い文章を送ってくれた。読後償却のこと、特高に注意とある。はてさて何を言いたかったのだろうか。以下原文であるが意味不明である。

### 尙、宣戦布告

朕、深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状ニ鑑ミ、非常の措置ヲ以テ、時局ヲ收拾セムト欲シ、世界標準化ニ向フべく市場ノ自由化、国際化ヲ行フモ、戦局必ズシモ好転セズ世界ノ大勢亦我ニ利アラズ。

尙、交戦ヲ継続セムガ我が民族ノ滅亡ヲ招来スルニナラズ、ヒイテ人類ノ文明ヲモ破却スベシ。

真ノ繁栄ハ民族ノ滅亡ニヨツテハ成ラズ、ヨツテ朕ホカ参名、ココニ新タナ宣戦ヲ布告シ、民族意識ノ興隆ト帝国文化ノ繁栄ヲ以テ世界ヲ戦慄セシメン。ヒイテハ大東亜共栄圏ヲ再建セム。

来タル小サキ玉ヲ小サキ穴ニ入レル戦イニオイテハ敵国語ノ使用ヲ禁ズ。禁ヲ破

ル非国民ニツイテハ、カガリデノ山崎保管料ヲ順ニ四千、参千、弐千、壹千円也ヲ負担セヨ。

当日、朕ホカ参名ハ堪エ難キヲ堪エ、忍ビ難キヲ忍ビ、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。弐、中部戦線異状アリ

「大本営発表、サル弐月、我が帝国部隊、中部戦線ニテ敵ト遭遇シ交戦ス。アル部隊ハ小銃シカ所持セヌガ、敵ハ大火器ナレド激シク交戦シ玉碎ス、敵ニ多大ナル損害ヲ与エリ、マタアル部隊ハ敵ノ縄文式波状攻撃ニモ堪エ難キヲ堪エ忍ビ難キヲ忍ビ、敵退散ス」

朕、コノ事実ヲ知ツテオルガ実情ハ我方ノ大砲小サク、敵ニ届カズ、空シク玉碎シタトノコト。

又一方ハ戦意ヲ喪失シ、金銭ニテ解決ヲ図ツタトノコト。ソレ以上ニ憂ウコトハ、我が臣民ヲ相手ニ攻撃シ、完膚ナキマデニ叩イタ非国民部隊モアツタトイフ、朕面目ネー。

参、五十歳ヲ祝フ

朕ノ誕生日ヲ祝ツテクレテ、アリガトウ。朕、我が朕生ヲフリ返リ朕思黙考スルニ、多クノ朕酸ヲ嘗メ、朕念ヲ以テ、朕抱強ク戦エド、我が朕国日本ノ朕民ハ朕仰ヲ亡クシ、朕滞シテイル現状ヲ憂フ。シカシ、朕、五十歳ヲ機ニ朕機一転ス、朕ノ朕朕モ朕下シ、女子ニモ朕畜無害ト朕近感ヲ与エ、朕座シテクレル。最後ノ朕判ガ

下ルマデ遊ビマクラン。  
朕愛ナル朕友達ヨ、残ル朕生ヲ互イニ朕頼シアイ、生キテユカフ。  
以上、朕  
ツクシ。

平成十年 著

## 私のお父さん

私のお父さんは、みんなのお父さんくらべて若くはありません。だけど家族のなかでも、とてもたよりになります。

その一つの例としては、どこかに行く時、道にまよっても必ず目的地に行くため地図を見たりして車をせきになん持って運転してくれることです。

しかし家事はめったにしてくれません。してくるのは、池のそうじだけなのです。池そうじだけでなく、ほかの家事もしてくれたりいのにと思つて何度もお父さんに言うのですが、お父さんは「家のことは全部お母さんがするもんじゃ」と返す言葉はたいい同じです。みんなのお父さんくらべると、ちよつとかわつてるお父さんだと思います。

そんなお父さんに一つなおしてほしいことがあります。それは、ゴルフなどに行く時、用意を全部お母さんにまかせてしまつて、お母さんが何か入れ忘れたりしたら、おこるのです。「おこるくらいなら自分ですればいいのになあ」と思うばかりです。

また、お父さんは、すぐ「ワシは世界一不幸な父親じゃ」と言うけど本当は、私

私のお父さん

や二十五才のお姉ちゃんや、やさしいお母さんを持つてとても幸せだと思えます。よくお姉ちゃんとお父さんはけんかするけど、何だかんだ言って、家族全員仲良しなのでこれからもずっとお父さんは世界一幸せな父親なのです。だから心配しないでお仕事がんばってね！

平成十年 行内誌「あわぎん」寄稿

春奈十一歳

サミュエル・ウルマンの詩「青春」

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。

逞しき意思、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない、理想を失う時に初めて老いがくる。

歲月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や狐疑や不安、恐怖、失望、こういうものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。曰く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰

その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に処する剛毅な挑戦。小児の如く求めて止まぬ探究心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く　　疑惑と共に老ゆる

人は自信と共に若く　　恐怖と共に老ゆる

希望ある限り若く　　失望と共に朽ちる

大地より、神より、人より、美と喜悅、勇氣と壮大

そして偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われない。

これらの靈感が絶え、悲嘆の白雲が人の心の奥までも蔽いつくし  
皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至ればこの時にこそ人は全くに老いて  
神の憐みを乞うる他はなくなる。

サミュエル・ウルマンは米国アラバマ州バーミンガムの詩人で、この詩はコーネ  
ル大学のW・ルイス教授が極東軍司令官として赴任するマッカーサー將軍に贈った  
ものだそうです。昭和十七年五月七日にコレヒドール島の米軍が降伏したあと、旧  
制桐生商工（現群馬大学）出の従軍記者が現地でこの文を発見、持ち帰ったと言わ  
れています。

## タケノコの話

タケノコは確かに私の好物ではあるが、たった一つの欠点を持っている。筍の字の通り旬がはつきりして出てくる時が一度になり新鮮なタケノコを食す時期が限られていることである。もちろんビン詰めなどで保存されているものもあるが、ラーメンの上のメンマを除けば概して旨いものではない。

今年もシーズン到来となり我が家にもやっとタケノコが届いた。胴回りも高さも五十センチもありそうな大物であった。季節の香りを楽しみながらタケノコご飯から始まって一通りの料理を家内が作ってくれたが、やっぱり美味しいのは単に煮付けたものとなる。

鍋いっぱいタケノコは三人家族には多すぎるため、今回も二日間ほど食卓の主人公になってしまった。例年通りであると食べ終わった頃には又、頂き物のタケノコが来て、もう二日間ほどタケノコが登場となる。そしてバツタリと来なくなるのもタケノコの特徴である。どうにかして間を取って美味しく頂けないかと毎年思うが、届けて下さる方の気持ちを考えると失礼でそんな事を言っはいられない。

私はタケノコの先っぽが好きで、あのとんがった先で、節がクチュクチュとなつた所に目が無い。当然だが一本のタケノコには一つの先端しか無いため、どうしても貴重品である。他の家族に決して取られないようにこつそり私の皿に盛り付ける

のも家内の重要な仕事であるが、逆に苦手なのがタケノコの根っこに近いところの硬いやつ。へビメタルタケノコと私は呼んでいるが、若者のバンドマンのチョッキにイボイボが付いているのが非常に似ているからこの名をつけた次第。誰も好んでへビメタルタケノコを食べないものだから、彼らは最後まで鍋の底で居残りさせられ出番を待っている。可哀想なタケノコだと思ふ。

## 薬王寺

「おめでとうございます」と元気な声が私の背中を押したのは、毎年正月の二日にお参りする日和佐薬王寺の山門に並ぶ露天商のオジサンであった。雑踏の中から私と家族を見つけ出し、店から飛び出して新年の挨拶である。心の底から清々しくなり、大変有り難い事だとも思った。

このオジサン、我が家の近所にある四所神社に夏・秋の祭りに金魚すくいの夜店をいつも出している御仁であり、私の金魚すくいの師匠である。ここ数年来、娘を連れてはオジサンの夜店に通い詰めるようになり、ついには目玉に泳がせている大きな金魚のすくい方を教示してくれた人でもある。

大きな金魚のすくい方にはちよつとしたコツが必要である。例のお菓子を針金で突き刺した道具は水に濡れるとすぐグニャグニャになり小さな金魚は別にして、目方のある大きな金魚はとも簡単にはすくえないのであるが、このオジサンにかかればいとも簡単に二匹も三匹もすくいとられるのである。

「頭の方からすくうんじゃ」「そんなに慌てたらアカン」「ソローつと近づいて次第に水を切つてやるとコテンと寝るんじゃ」との説明であるが、いざ実践となると非常に難しい。

「オッチャン、今日は成功するまで何回でもするで」と、ある夏祭りの夜、根性を入れて頑張った結果、ついに七回目にしてゲット。一匹千四百円也の超高級金魚についてしまったが成功の喜びはひとしおであった。オッチャンも商売抜きで喜んでくれたものだ。

一度上手く行くと不思議なもので次第に自信がつき何度やっても成功するようになるまで長くは掛からなかった。娘も一緒にうまくなり最近では私の失敗を尻目に自分だけすくっては得意満面の場面も少なくなない。お陰で我が家の玄関横にある小さな池には現在十五匹の真つ赤な大金魚が泳いでいる。もとより同じ夜店の水槽出身者であるから仲が良いのか徒党を組んでねり泳ぎ、先住民であった鯉は連れ合いと二匹で遠慮しながら同居させて貰っている様子である。

雑種は強いとは聞くがまさにその通りで寄生虫が発生した数年前の夏に二匹程死んだ以外は全員元気で、毎年大きく育っている。

祭りの都度「オッチャン今日も来たよ」「ようけすくてよ」がいつもの挨拶だが、葉王寺の門前で新年の挨拶を頂くとは思ってもよらなかった。しかも店を飛び出て来ての挨拶であり、最初はオジサンとは気づかなかったので咄嗟に「本年も宜しくお願ひします」と言うのが精一杯だった。聞けば金魚すくいの時期でもないのです、お面を担当していると言う。

「後で寄ってよ」「後から寄るわ」の約束通りお参りを終えて店を訪ねるとオジサ

ン、かなり繁盛してよく売れている。「オツチャン来たで」と言うと「気に入ったヤツ持つてき」と言う。商売物を正月からタダ勘とは不謹慎なので代金を払う事にしたが、結局一つオマケしてくれた。ウルトラマンとドラエモン・・・両方とも娘が喜びそうもない面であったが私には嬉しかった。

タコ焼きと温かい缶のお茶に私の気持ちを託し「オツチャン、夏、金魚いくからね、これ食べとき」と渡したら、オツチャン「却って高いモンにしたなあ」と照れながら受け取ってくれた。その後ブラブラして帰途につく頃、もう一度オジサンの店の前を通ったが、オジサン、店のテントの裏でタコ焼きを美味しそうにパクついていた。

オジサン、いつまでも元気で頑張ってください。子供にのみならず、大人にまで夢を売る商売はとて立派です。

## 印象的な言葉

最近の読書で印象的な言葉があった。気になるところである。

中村 佳子（早稲田大学 人文科学部教授）

電車の座席も地球の一部

三重野 康（著書 赤い夕日のあとに）

反骨、天邪鬼が私の心に巣くっているのかも知れない。

今になっても抑えきれない。

がまんしながら全力でくらすより、無理せずゆったりくらす生き方もある。

中島 かも（恋は底ぢから）

恋は病氣の一種だ、治療法はない、ただし世界中で一番美しい病氣だ。

お互いの無知で傷つけあって、それでもお互いを許しあって、いやし合いながら苛酷な時の流れに、いっしょに立ち向かっていくのが愛というもので無傷なツルンとした愛などは愛の名に値しない。

愛もまた始まった瞬間に終わっている。それ以外の全ては「あとくされ」だ。

北窓看春

新町水辺柳色新

新町川の水辺には柳の新芽が芽吹いている

柳糸細細軽春風

柳の枝も新芽も細く小さく春風に軽く舞い上がっている

白亜林立隔碧空

真つ白なビルが立ち並んで向こうの青空を隔て

緑波鎮静揺堅桜

川面の緑のさざ波が鎮まれば 写ったビルの影が大きく揺れる

三十星霜邯鄲夢

三十年の年月は夢のよう あつという間の出来事だった

北窓得席神愈悠

北の窓際に仕事場を得て心は悠然として屈託がない

狂奔浮世営利巷

バブルに沸く世の中を損だ得だと走り回ったものだが

餘得厚顔混白頭

残ったものは銀行員として世を経た凶々しさと白髪混じりの頭  
だけである

ある先輩が転勤する時に、記念にと頂いた自作の漢詩である。彼は俗に言う出世にはあまり頓着しない人で、静かに人生を楽しんでいた。

この詩を貰って一年後、私は「お先に失礼」と退職するのだが、人生二度目のチャレンジに何らかの影響を受けた気がする詩である。

私には自分の人生を静かに楽しむ事が出来ないのかもしれない。

## 四国霊場八十八箇所巡り

四国霊場八十八箇所巡りを始めたのは今から五年前の九七年春のこと。お四国巡りなんか年寄りのすることで、自分はまだまだ関係ない話、と決め込んでいたのに何故か突然私の巡礼は始まった。

「明日からお四国巡り始めるぞ、皆も一緒じゃ、準備しとけ！」のひとことで嫁と次女も遍路のお供に決められたが、文句は出なかった。と言うより文句も言えなかった状況だったのかもしれない。母の七回忌を翌年の三月に控えていたのが、巡礼開始の直接の理由だったからである。

生前、母はバスツアーで巡礼をしていたが、その時は既に癌に冒されていた。それも骨盤に取り付いた癌とのことで、取り除く事ができない最悪のものであった。今でもはつきり覚えているが、巡礼結願の日に夜遅く我が家にたどり着いた時は殆ど立っておれない状態で玄関に座り込むや、そのまま動けなくなり三日後には入院となってしまう。九二年の秋のことで、年が明けて九三年三月には他界してしまい、正に命と引き換えた巡礼の旅となったのである。

その母がバスまでの送迎を私に頼む事があった。徳島駅前の集合場所までである

が、早朝三時の出発の時はさすがにタクシーを使ってくれと断った。近距離をしかも朝早くタクシーを予約しては運転手に気の毒をいうのが母の本当の気持ちだったのだろうが、わたしは薄情にも断った。どうしてもと優しくしてやれなかったのだろうかと、今もって後悔している。

母が残した納経帳は棺に入れたが掛け軸は残った。暫くそのまま保管していたが七回忌が近づいたある日、ふと考えた。母の残した大切なこの掛け軸を表装してあげよう、それに先駆けて自分も八十八箇所を回ろう、母に冷たくした事がこれによって少しは許してもらえるかもしれない。

家族で回るお四国は、それなりの価値のあるものとなった。移動中の車の中では自ずと妻とコミュニケーションが図れるし、娘の社会科学の勉強にもなった筈である。四国は四つの県から出来ていて、景色も違えば風土や言葉も人柄も違っている事等々、父親の権威復活をのチャンスまで与えてもらった次第である。

最初はスタンラリー気分でのお寺巡りがそのうち次第に神妙になってきて、山門を出入りする時は自然に一礼するようになり、作法も見よう見真似で形に入っていくのが不思議でもあった。夏休みまでにはすべてのお寺をお参りし、最後に高野山奥の院の朱印を貰った時は、家族で何かの充実感を分かち合えた喜びに浸ったものである。

翌年の七回忌の法要に例の掛け軸を使った事は言うまでもない。手を合わせなが

ら、遅すぎた親孝行を恥ずかしくも思ったが、母はきつと許してくれたに違いないとも思った。

その後、私は毎年巡礼をするようになり、今年はもうすぐ五回目の遍路が終わる。般若心経も随分うまくなつたが、やはり最初の巡礼が一番敬虔な気持ちであつたよ  
うな気がする。

南無大師遍照金剛

## 托鉢の三者三様

四国遍路をしていると、時々、寺の山門の前で托鉢をしている僧、巡礼者或いはそれと思しき人、又は、どう見てもそうとは思えない人に出会うものである。

私は彼らに出会うと、必ず百円硬貨を浄財することに決めている。学生時代に無銭旅行に近いことをやってのけ、宿の便宜を図って貰い、食事までお世話になったことが度々なので、ご恩返しのできる気持ちも手伝っての行動であるが、もっと現実的な理由がある。高邁な思想のもとで自分を常に一定の状態に保つ事が、如何に難しいかを身をもって知らされた事があったからである。

あれは確か六十八番観音寺であつたか、清潔な僧衣に身を包み、直立して読経している僧に出会った時は、なんの躊躇も無く浄財したのだが、その後尋ねた七十一番弥谷寺の山門前には、見るからにみすばらしい風体の老人がござの上に座し、ブリキのお椀を前に居眠りしていたのである。物乞いにしか見えないその様子には確かに嫌悪感を覚え、咄嗟にとつた行動が、五十円硬貨をお椀に入れる事であつた。いつも百円硬貨を探しても浄財するのに、その時は反射的に五十円硬貨なのだ。恥ずかしい事をしてしまったものである。

山門から本堂までは長い階段があり、私はずっと先程のことを悔いていた。身なりだけで判断して良いのか、どうして差をつけたのか、もしかすると、お大師様が私をお試しになったのかもしれないと考えるに及び、恐怖感にも似た戦慄が私を襲って来た。

お参りもそこそこに、山門まで帰ってきたが、そこには例の老人の姿はなかった。ただブリキのお椀はそのままで、先程入れた五十円硬貨もそのままであったので、姑息とは知りつつも、もう一枚五十円硬貨を入れてその場から逃げるように離れたのであった。

ところがお話はこれでは終わらなかった。駐車場まで帰ると、そこには彼の老人が落ち葉を一生懸命掃いて掃除しているではないか。私は心から自分の取った行動を悔やんだ。許されるものではないと知りつつ、思わずその老人の背中に手を合わせたの言うまでもない。人を見掛けで判断してはいけない事は十分理解していたのに情けないと思った。

翌年出会ったもう一人の托鉢は、誠に滑稽な人であった。六十四番前神寺でのこと。この日は家内と一緒であった。山門に座っている御仁は、どう見てもウサンクサイ御仁なのだ。托鉢のお椀はなく、即席麴の発泡スチロールのお椀がおいてある。よく見ると「どん兵衛」などと印刷されている。お金は何にも入っていない。しか

し昨年心に誓った事は忘れない。百円硬貨を入れてみるが、件のオジサン知らんぷりである。

その場を過ぎたところで後から来た家内が苦笑しながら一部始終を伝えてくれたのだが、そのオジサン私が背を向けた途端、どんぶりを振ってみて、百円硬貨と判明するや、素早く回収してがま口に収めたとか。これもお大師様のお試しなのかと平常心を装うもやはり納得がいかない気持ちであった。帰り道、もう一度会った時には、門前で立ち小便までしているのを見るに及んでは、許せない気分も最高潮に達したが、結局何も言わず無視してその場を離れた。三者三様の托鉢、全てお大師様の御心なのか。

南無大師遍照金剛

## 映画「タイタニック」に学ぶ事

必要なものはみんなある 運と健康な体

橋の下で寝ていた者が今日は世界一の豪華客船で食事

人生は与えられたもの 大切に生きなくては

配られたカードで楽しむんだ

今が大切 今日を大切に

今更、映画の解説をするつもりはない。主人公ジャック・ドーソンが招待されたパーティーの席で話した言葉が印象的だった。

金持ちの冷ややかな視線にさらされる中、ジャックは臆することなく堂々と自分の気持ちを述べる。そして最後にはその場の皆が拍手を惜しまない程に感動するという一カットは今でも私の心を捕らえて離さない。

人生に必要なものが、金や能力、環境ではなく運と健康な体であるとした事も憎いが、人生を与えられたものとした上で、配られたカードで楽しむ、つまり足りない物に不平を言うわけでもなく、欲しがるわけでもない。ひたすら運命のままに謙虚に生きて行く主人公の人生観に共感を覚えたのである。

いつも、いいカードが配られるはずはない。しかし思わぬカードが配られて幸せになる事もある。配られたカードで今を最大限に楽しみ今日を大切に生きる。  
誠に示唆に富むジャックの台詞であった。

今も変わらぬ春

春風優しく私のほほをなでたとき  
私はふと思ひ出した  
いつの日か  
山へ散歩に出かけた  
あの時を  
山へ向かう 田舎道  
足元見れば 春がある  
かわいいつくし ほほ笑みくれて  
何だか楽しくなったこと  
少し行くと 春がある  
またここにも 春がある  
見わたすかぎりのれんげ畑  
一生懸命 咲いていて  
何だか元気になったこと  
忘れかけていた大事なこと  
それはあの日のことなのかな



今も変わらぬ春

次女、春奈の作品である。NHK全国  
学校音楽コンクールの平成十五年課題  
曲の作詞に応募し、優秀賞を受賞した。

ふと足元 見ると  
道ばたに咲いた 花がある  
あの時と同じ 春がある  
一生懸命咲いた花は  
生きる希望に 満ちていた  
こんなに近くに すぐそばに  
ちいさな命 春がある  
私は何だか嬉しくなった  
私はこのこと 忘れぬように  
前へ一歩踏み出した



平成14年10月14日 渋谷NHKホールにて

## 高山植物に魅せられて

趣味はなんですか？と聞かれた時、私は迷わず登山、旅行、絵画と返事する。

銀行員時代はその上にゴルフを付け加えていたのだが、これは業務上の見栄であって、決して好きでゴルフをしていたわけではない。

「好きこそものの上手なれ」と言うが、「好きでないこそものの下手なれ」という謂れはない。しかし何度やってもうまくならないゴルフは好きではなかった。ましてや趣味とは縁遠かった。登山を覚えたのは群馬で過ごした学生時代である。もともと私は徳島の海の子であるが海のない群馬県は知らず知らず私を山の子に育ててくれた。尾瀬が大好きで在学中だけでも十回以上入山している。その尾瀬は私を高山植物の



魅力の虜にし、登山そのものが趣味ではなく、高山植物を見る事が趣味であつて登山はその手段のようにさえ思うのである。

ひとことで高山植物の魅力を言い表すことは難しいが、清楚で可憐で美しく、そのくせ逞しさも併せ持つという事であろうか。

約一万年前に氷河期が終わり、地球には温暖な気候がもたらされたが、それまで繁栄していた動植物は急激な環境変化について行けず次第に高緯度地域、或いは高山へと追いやられることとなる。逆に高山では当時の環境が残されているという事になるのであるが、とにかく一万年をかけて彼らは徐々に山を登り現在に至つたのである。清楚で可憐だけではこんな離れ業は出来ない。逞しさを併せ持つと言われる所以である。

逞しい彼女達ではあるが、謙虚で慎ましい面もある。つまり毎年同じ所に同じ規模の群落をつくり花を咲かせ、決して他のテリトリーを侵さない。混生している場合もあるがその割合がまた同じである。

登山をしていて、以前はここにあの花が咲いていたと思つていたり、やっぱり同じ場所と同じ花と再会する。半年間も雪に埋もれ、強風にさらされる場所にも拘わらずにである。コンニチハの一声もかけたくなるというものだ。

好きな花はたくさんあるが、一番好きな花が「チングルマ」。全国どこの山でも

見つけられるが、イチゴの花に似た清楚な白い花が、お花畑一面に咲き夏の終わりにはタンポポの毛玉のような種子を結ぶ。その実が風車にも似ているところから、「稚児車」とも呼ばれ、訛って「チングルマ」となったとのこと。とにかく可愛い事この上ない。

その他にはエゾコザクラ、ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、ヨツバシオガマ、ヒメシヤクナゲ、タテヤマリンドウ、ホソバウルツブソウ、コマクサ、タカネバラ、等の高山常連組から水芭蕉、ニッコウキスゲ、ヒツジグサ、オゼコウホネ、ザゼンソウ、リュウキンカなどの湿原組。果てはリシリヒナゲシ、シレットコスミレ、ホソバヒナウスユキソウのレア物まで、誠に多種多様である。

私が十八歳の時、初めて出合った高山植物であるが、もう既に三十八年のお付き合いと



なる。体力の限りこれからも山を目指し、清楚で可憐で美しく、尚かつ逞しい彼女達との恋を続けて行きたいと思う今日この頃である。

平成十四年 著

## かがりび

人はその一生を、自分だけの力では生きては行けない。この世に生を受けた時より何らかの援助、愛情などの恵みを受けながら、又、与えながら死に至るものと思われる。

太陽とか水、空気の恩恵も大切な要素であるが、これらはすべての生き物に共通の要素であって、人のみ形而上的な力を必要とするのではなからうか。私はそんな力を人一倍頼りにして育ち、また現在もまだ必要としている過保護の人類を自認している。

幼い時より、一人でいるのが淋しくて友達をたくさん持ちたかった。話し相手が常に欲しかった。そのために自然と心配りすることに堪能になり、一見しただけではリーダーシップを発揮する大物としてよく勘違いされたが、実は一人になるのが淋しくて、仕方なく周りに媚を売るだけの小物であったのかもしれない。しかし、そんな事はどちらでも良い。

私はいつも人からの愛情という輻射を受けながら幸せな人生を歩んで来た。さながら潑標（みおつくし）のように人生の航路上にかがり火があり、その灯火に導かれ勇気づけられながら生きて来た事に間違いはない。

生まれたばかりの時に見たかがり火は、当然両親という二つのかがり火であったろうが、一つの火は私が五歳の時に、またもう一つの火は九年前に消えてしまった。かがり火は永遠に燃え続けることはない。薪がなくなれば自然に消えるものである。ただ幸いな事に次々と新しいかがり火を見つける事も出来る。即ち人との出会いである。

現在までたくさんの人と、ご縁を持つ事が出来た。中には不愉快なご縁のままになつてしまった人もいるが、概ね楽しい思い出と共に今に至っている。私はたくさんのかがり火に囲まれた幸せ者である。一つ一つの火に心から感謝している。

そして尚、願いがある。ひときわ明るく暖かく照らし続けてくれる妻のかがり火だけは、私より一日でいいから長く燃えていて貰いたい。多くのかがり火に囲まれる事を望む私だが最後まで妻のかがり火の下で居たい。

## あとがき

昭和六十年の春のことだったが三十八歳の誕生日を前にふと考えた。私に如何ほどの寿命が与えられているかは神のみぞ知るが、平均的にはちようど半分が経過した頃ではなからうかと。

幼い頃からいろんな思い出を作ってきたが、この辺で整理保管する必要があると感じ、「思い出集」を考えついた。私の頭の中に古い記憶が充満し、新しい知識の吸収に悪い影響が出ないかと心配になった事も執筆を促している。つまり古い記憶を文書化して保管し、空きになるサイトに新しい知識を詰めようと考えたわけである。

ところが当初は一年もあれば書き尽くせると思っていたものが結果的には十八年を要してしまった。この先の人生においては、もう目新しい思い出など作れないかもしれないので、私の半生を綴る予定であった作品集は私の人生の大部分を集大成する結果ともなってしまったのである。

そんな或る日、四国八十八箇所にこだわるわけでもないが、ようやく八十八編の作品が出来上がったところで一締めしたくなった。

巡礼は四国を右回りに徳島・高知・愛媛・香川と一周するが、それぞれ「発心の

道場」「修行の道場」「菩提の道場」「涅槃の道場」とも呼ばれている。霊場を一回りする間、巡礼者は弘法大師と二人連れであり、身も心も昇華して行くという教えに因んで私の作品も四つの道場に分類してみたのだが独り善がりであって深い意味はない。

ただ菩提、涅槃の道場の名をお借りするには余りにもおこがましく、現状はずつと修行の道場にいることは本人の私が一番よく知っている。

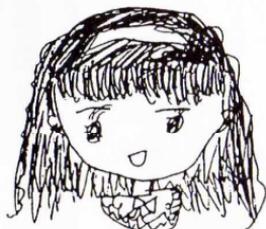
「あまやどり」に始まり「かがり火」に終わる八十八の思い出語りは、概ねその出来事が起きた年代順に並んでいる。ただ「あまやどり」は偶々最初に「かがり火」は最後に執筆した作品であるためこの二つは例外だ。全作品を通して底流には私のエゴが存在し少々屈折している何かさえ感じられる私の人生であるが、困った時には雨宿りをし、周囲の暖かいかがり火に導かれながら生かされて来たことを幸せに思っている。

最後に今まで私に軒を貸し、灯火を差し向けて下さった多くの人に感謝申し上げます。

そして今まで受けた数々のご恩に報いるため、今後は私自身が人のために軒を貸し、かがり火を焚くことを心がけて行きたい。

平成十五年一月吉日

(持山家の親子)



ママ



パパ



春奈ちゃんです。



おねえちゃん

イラスト／次女・春奈(6歳のとき)

# 付録 「あまやどり」に頂いた礼状集

## 葉書 編

立冬ともなり野も山も錦に秋の深まりを感じております。この度は長年の越し方、想い出の数々随筆に執筆され、ご本とされてご惠贈有難うございました。かがり火のご心痛切に胸を打たれ感動しております。ぼつぼつ読ませていただきます

花・山野草が好きです 寒さに向かいご健勝を心より祈っております

先は御礼まで申しあげます 敬具

奈良県香芝市穴虫 H様

秋深くなり山歩きにはよい季節になりました。このたびはすばらしいご本をお出しになり、本当に驚いております。人生の中の人との出会いがその人の人生を豊かにすること私も感じております。かがり火の最後の三行は感動的です。

このところかぜをひいて二週間も熱は下がらず咳は止まらずでひどい目に合いました。やっと治りましたがとすね。

西乗京市保谷町 W様

拝啓 晩秋の候 益々御清祥の御事と存じます 比の度は思いがけなく御労作の御自身の半生記とも云うべきご本、お送り下さってありがとう存じました。

節々の思い出を中には重いテーマとも考えられることも前向きの人生観で見事に乗り越えられ読む人も明るくしてくれます。軽妙な文章で見事に綴られているのはほんとうに感銘いたしました。

所々に散りばめられた先達の名言も浮くことなく、納得させられ大いに改めて人生の教訓として胸にしみ込んで参ります。何よりも楽しい前向きな御家族のお互いつくしみ合い相互の尊敬、信頼に満ちたご様子が印象的です。

すばらしい御本の御出版を心からお祝いお歓び申し上げますと共に御恵送下さいましたことに心から御礼申し上げます。 皆々様の御清祥を折ります。 敬具

徳島市通町

K様

深まる秋の中 おだやかな毎日です。今日は金比羅宮の祭礼で神輿を担ぎに行っておりました。 帰宅すると貴君の「あまやどり」が届けられており驚きました。 本当に有り難く頂戴致します。まだ拾い読みしかしていませんが、優しさ、広さを感じゆつくりと拝読させていただきます。私は十月から大工修行中です。末文ですが、ご家族のご多幸をお祈りします。

徳島市川内町

T様

御無沙汰しています。このたびは随想集「あまやどり」をお送り下さりありがとうございます。うございませす。さっそく読んで見ました。軽妙洒脱な筆運びに持山にかくも文才があつたことを初めて知りました。

学生時代の所は特になつかしく思い出され貴君の記憶力の良さに舌を巻いた次第です。まずはお礼まで。

十一月十二日

丸亀市土器町

T様

拝啓 初冬の候、朝夕の犬の散歩にフリースが要るようになりました。さてこの度は貴兄の八十八の思い出語り「あまやどり」をご恵贈下さり洵にありがとうございませす。二度までも秘書をした方のどこにこんな時間があつたのかと只々驚くばかりです。波乱の人生を歩んで居られる貴兄に敬意を表する機会もなく、昨日N氏より託されました。

いや！ 立派。お見事の一言ですが、貴兄を讃える詞とさせて頂きお礼とさせて頂きます。

敬具

徳島市川内町

M様

「あまやどり」の恵送を有難う御座いました。活字を目で追ううちに、何と本日は結婚記念日。三十年経つても「フーコ」「もっちゃん」でしょうか？

高崎へお越しの節は、もう一足延ばして、当地へもお寄り下さい。雰囲気はK君

にでも聞いて。随所に、同感多々有。人生の幸は、お金や物で解決不可能なことにこそ、その真がありますね。ジャイチも後任に委せたのですが、自分が隣りなもので、つつい引張り出されてます。

高崎市武石村 K様

前略 ご壮健にてご活躍のこと拝察致します さて過日は「あまやどり」をご恵贈頂きありがとうございます。拝読致しまして文筆の冴え、考え方にあらためて敬意を表したいと思えます。有難うございました。愚息も銀行を退職し新たな道を進むことになりました。今後ともご指導の程よろしく願います。

向寒の砌ご自愛專一に折り上げます

徳島市吉野木町

K様

前略 感動しました

すばらしい持ちっちゃんの人生感そして家族の一体感

最後に書いてあった「かがり火」を これからも灯し続けてください  
頭を灯された Nより

徳島市南福島

N様

「困った時のあと一歩」この稿を拝見して三十三年前のある出来事が鮮やかに蘇ってきました。大一ワンゲルの夏合宿の最中、所は飯豊山中でした。三日続きの雨で体力を消耗、ザックはずっしりと重くおまけに丸木橋が流されて、断崖絶壁をよ

じ登っていた時のことです。足元（下）は川の濁流が渦を巻き、思わず頭上の不安定な草を掴み登ろうとしていました。この草に身を任せていたら結末は明白、まっ逆さまに転落でした。周りをもう一度見直し、左側に僅かな足場を見つけて体を移動、事無きをえました。

正に困った時のあと一歩！山で苦労したことは数多くあれど、死を意識したのはこの時だけです。最後まで諦めないで頑張ることの大切さを学んだ山でした。

持山さんの人となり随所に表れ、素晴らしい作品集が出来ましたね。只々「尊敬」の一念です。これからも私たちの「かがり火」として人生航路を照らし続けて下さい。後ろをトボトボと歩いていきます。ありがとうございます。

相馬市小泉

T様

「ご出版おめでとうございます」お休みの日にゆっくりと読ませて頂きました。持山さんの、そしてご家族との大切な思い出にふれるとともに、それぞれの時の背景なども目にうかび、また私自身の家族との思い出なども思い出しながら楽しい時を過ごさせて頂きました。本当にありがとうございます。

奥様のやさしいタイトル文字もすてきですねご家族思いの持山さんらしいと思いました。

どうぞ奥様や皆様によりしくお伝えくださいませ！！

徳島市南佐吉

Y様

拝啓 初冬の候、持山様におかれましては益々ご活躍のこととお喜び申し上げます。この度は貴重な書籍をお送りいただき、ありがとうございます。折角ですので読み終えてからお礼申し上げます、このように遅くなったことをお許し下さい。

拝読後、持山様とは少し世代が違いますが小生が昔、感じた事と似たような状況も一部あり、小生の過去に置きかえて読むこともでき、懐かしく楽しく読ませていただきました。それにしても、いつもながら持山様の才能には脱帽いたします。是非、次作もお願ひします。期待いたしております。

小生はあいかわらず、微力ながら四国産業界発展の為に、頑張っているつもりですが、力不足は否めません。これからもご指導願ひします。末筆ながらご家族の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

敬具

香川県香川町

F様

拝啓 朝晩めっきり寒さを感じるようになりましたが、お元気で過ごすごのと存じます。このたびは高著「あまやどり」をご惠贈下さいましてありがとうございます。ございました。どれも心に残る文章で改めて持山さんのお人柄と真摯さを強く感じました。折々にたいせつなことを書きとどめ、それを出版されたこと大変素晴らしい、感嘆いたしました。また、毎年新たな目標をたて、それを実現するという実行力にも敬服いたします。これからもぜひ益々幅広くご活躍されることを祈念しております。

す。敬具

東京都練馬区

K様

「あまやどり」有難うございました。昔から言葉の端々に文才が感じられました  
が、本を拝見し、なるほどと感心した次第です。

さまざまなエピソードのなかに同感する部分が多くありました。持山さんの好き  
でないゴルフが私との接点でしたが、これからもご指導下さい。又、一杯ゆきまし  
よう。

徳島市住吉

A様

寒中お見舞い申し上げます。先日の同期会でお話の「あまやどり」送って頂き  
ありがとうございました。封を開けその場で座りこんで読んでしまいました。  
私も幼き時のおもいが懐かしく思い出されました。お友達にも見せてあげようと思  
っています。

今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。右、とり急ぎ心からのお礼のご挨拶  
まで申し上げます。かしこ

徳島市南内町

T様

前略 先日は同期の方々と久々にお会いし、楽しいひと時を過ごすことができました。  
た。

さて、この度はご本を送付頂きありがとうございます。早速拝読しております。でもまさかエッセイをお書きになるとは思ってもみませんでした。(失礼致しました)ともかく歌の文句ではありませんが、やはり人生色々あるものですね。この私も孫が一人いるそんな年令となりましたが次回、又皆様方と再びお則こかかる日を楽しみにしております。

寒さ厳しき折、お身体ご自愛下さいませ。かしこ

徳島市富田橋

H様

まだまだ寒さ残る毎日ですが、ご家族の皆様においては、ますますの、ご健勝のことと存じ上げます。お送り頂きましたご本をたいせつに愛読させて頂いております。早くお礼をと思っていたのですが、実家の両親の介護で今日に到った事をお詫び申し上げます今後とも、お仕事と共にご活躍を心よりお祈り致しております。

阿波郡市場町

T様

拝啓 若葉の美しい今日この頃、その後お変わりございませんか。同期会では楽しいひとときをありがとうございました。又、本を送っていただき、お礼が遅くなりました。

子供の頃を思い出しながら楽しく読ませていただきました。小さい時の頃をよく覚えていた事、また、経験豊富な事に感心致しました。梅雨のうっとうしい季節になります。ご自愛下さい。

敬具

徳島市住吉

H様

前略 ご無沙汰ばかりで申し訳ありません。「あまやどり」出版おめでとうございます。

本当に多才な方だと、あらためて感服致しました。これから一頁づつ大切に読ませていただきます。私の方は、失業状態ではありますが「楽学研究社」という会社を設立したばかりです。先輩に負けないよう楽しもうと思えます。

とりいそぎ、御送付のお礼まで。

那覇市

K様

前略 この度は あまやどり お送りいただきありがとうございます。 じょうずな文章で感心しました。もっちゃんはやさしさがにじみでています。

ところで会社をやめたのですか。電話したら8月頃退社したとのことでしたが・

ファイリピンからのメールに返事を送りましたが届いていません。私は先日長男が結婚し何か年を寄ったなと思っっているところです。いっしょに八十八ヶ所巡ってみてくださいね。

奥様によりしくお伝え下さい。

敬具

東京都台東区

M様

前略 長い間、ご無沙汰してはいますが、お変わりないことと存じます。先日は出版された御本をお贈り下さり、有難うございました。

多趣多才とは思ってましたが、失礼ながら文筆にも長けていたとは、本当に驚きました。持山さんを見習って誕生した三男も三歳になり、元気に幼稚園に通っていません。ミニSLも大きくなり、鉄道イベントの折など十人位の子供達を乗せて走っています。

時々徳島での会議のため出かけておりますので今後、機会をつくり(夕刻から)是非お会いしたいと存じます。

高松市屋島東町

K様

## 書簡 編

秋も大分深まり紅葉も色こく美しく目を楽しませてくれます。秋には本を出しますよと云われていましたが御出版おめでとうございます。

お忙しい中ほんとうに生い立ちから現在までよくどこ迄と感心しながら娘と共に読ませていただきました。文才のない私としては唯々感じいるばかり、また私共夫婦のことも事実以上に評価されて恥ずかしく思います。

一大決心して三扇寮に就職して一日一日必死の思いで過した六年間、大学の紛争に振り回されながら何とか遠く親元を離れて淋しい思いをしている寮生のささえになればと思い、子供にも辛抱してもらいました。娘にはお手伝いばかりさせてお友達と遊べなかったと今でもくどかれていきます。私としては寮生の皆さんと過した六年間の出会い。何にもまさる人生最高の宝だと感謝しています。来年は八十才になります、良くぞここまで生きてこられたとつくづく思います。来年は八十才にならず、良くぞここまで生きてこられたとつくづく思います。日本中から来られた学生さんに会えたのだから。持山さんのお陰で古屋さん始め十一号室の皆さんに会えたり、便り電話など頂いて生きていてよかったなとつくづく思います。

宮塚さんも北朝鮮の問題などのテレビで懐かしい姿を見せられますし卒業生の皆さんが社会の第一線で活躍されているのだと陰ながら応援しています。健康には十分気をつけて益々本分を發揮して下さい。ご両親もきつとよろこんでいますよ。

優しい奥様とお二人のお嬢様に恵まれて末永くお幸せにとお祈りいたします。末筆ですが奥様にくれぐれもよろしくお伝え下さいませ。有難うございました。

平成十五年十一月十四日 群馬県高崎市 S 様

又、新たな肩書きが：・作家・持山さんへ

すばらしい本、ありがとうございます。昨夕、岡山から吹屋のショートトリップから帰り郵便受けをのぞいて見ると、懐かしい署名の小包みが入っており、家事もそこそこに一気に読ませていただきました。私の知らない魅力一杯の持山さんが飛び跳ねておりました。叙事詩でもあり叙情詩でもあり、非凡な持山さんの感性が光っております。幼年時代、少年時代、学生時代、社会人時代、歴史のフィルムの中に持山さんが駆け巡っています。その文才は春奈ちゃんにも受け継がれていきますね。

サミュエル・ウルマンの詩は建築家の安藤忠雄氏がよく講演で話されます。また、ハイサイオジサンも当時、印象深かったですね。共有の時代だから私もよく理解できます。サントリーのCMも大好き。この本を読ませていただき、一層、持山ファミリーと持山さんのファンになりました。

PS 今、大学の三回生の息子にこの本を紹介したいと思えます。残りの一年をこの様な視点で、エネルギーッシュに生きて欲しいからです。

重複致しますが、すばらしい本、ありがとうございます。私にとつても徳島の野や山、町並み、会社等、想い出一杯の青春時代を振り返らせていただける一冊です。大切に、何度も折にふれて読ませていただきます。乱筆をお許し下さい、とり急ぎ御礼まで。

平成十五年十一月二日

大阪市港区

Y様

拝啓 野山の紅葉も一段と深みを増す頃となりました貴兄にはご健勝のことと存じます。

「持山君、すごい。」

貴兄から厚みのある郵便が届き、何かと開封した時の心境です。失礼ながら貴兄に文才があるとは知りませんでした。早速、拝読し学生時代を思い起こして同じゼミ生でありながら貴兄についてほんの一面しか知らなかったのかと、認識を新たにす次第です。

しかし、これだけの執筆は埋没せず日頃の努力があつてこそと感心いたします。

大学最後の冬にゼミ有志で行った尾瀬戸倉スキーの出来事が懐かしいです。記憶誤りかも知れませんが、スキー場から山中の連絡路を宿へ戻る際であつたか、何度かこけたがヤツケのポケットが開いていて、お金を落としたのは貴兄ではなかつたと。尾瀬と言えば、学生時代は三回経験があります。燧岳には登つたが至仏山に登つていないのが心残りです。後年、子供にも見せたくてH3年夏に車回送サービスを

利用し大清水から鳩侍峠まで父子三人（当手中一と小五）で通り抜けをしました。（早朝発・夕刻着）卒業から三十二年が過ぎました。先年ご相談したゼミ同窓会が未だ実現できず心苦しい限りですが、私、現在は行動できる状況に無くご猶予を願いたい。

貴兄の著書出版にあたり、貴兄の更なるご活躍とご健康を念じつつ、お祝いとお礼を申し上げます。 敬具

平成十五年十一月十七日

名古屋市中村区

M様

始めまして、私は持山桂三郎様のヘルパーのMと申します。先日、部屋を片付けてたら「あまやどり」？「持山」？「これはどなたですか？」「四国に住んでる甥が書いたんや」と言われ、早速パラパラとめくると読み易い字で私と同じ年代だし。  
・  
・  
・

お借りして”オッサンの思い出集”一気に読ませて頂きました。おもしろかったです。そして何か嬉しくなつて筆を取らせて頂きました。北海道の蟹族と言うのが流行つてたなあとか、私も青春時代にしばしタイムスリップ。

人生は「しめた！」と思うより「困った」と思う事の方が多いと言う所「フンフンそうそう」と一人で頷いたり・・・最終章の「かがり火」も月一回、京都の家元にお花の稽古に行き、昼休み大急ぎ一人で息を抜きに行く喫茶店が「箸火」です。関係無いか！

暫くお借りして又、読み返すつもりでいます。

今度は目のぼちりした弟さんの攻防編を読みたいと思っただけでしょうか。伯父様は昔は相当頑固で羽振りも良かったと聞いておりますが、現在は入歯も合わず、上をはずして好々爺の雰囲気で、それなりの老後を過されています。お姉様の田中様とも時々顔を合わせ、私達にまで気をつかった言葉で話をさせて頂いています。お元気ですよ。

伯父様には出掛けにくい状況で親戚や友人の声が唯一楽しみの様です。是非一度いや二度・三度電話してあげて下さい。どうも勝手な手紙で大変失礼致しました。今夜も人生に乾杯します。

平成十五年十二月十八日

神戸市灘区

M様

ありがとうございます。御自身で出された本をいただけるとはなんて・・・感激です。すぐにお返事をお思ったのですが・・・本を先に読む事にしました。

持山様からの重い封筒・・・何かしらさわると本でした。封を切ってうっとりする題字と並んで持山さんの名前にドキッとしました。思わず平成八年八月十四日の写真で持山様のご家族の中に入れてもらっての記念写真を見直しました。

あれからもたびたびステキなポストカードを送っていただき、思い出しながら読ませていただきました。巻頭の写真はいただいたものですよネ。持山さんは何かを使うように言ってくれていましたが私はいたましくて大切に保存です。本の巻頭

写真に使用されているポストカードを持つているなんてまたまた感激です。

本当にありがとうございます。でも、やっぱり何かする方だったのですネ。自分で本を出すなんてステキですネ。私も以前から思っていたけど、できずに現在に至るです。

この仕事に入ってからいろんなお客様との出会いが沢山あって仕事のひとつひとつにドラマがあります。五年と想って入った仕事も十年を過ぎお客様との思い出を一冊にまとめたと思います。三年前くらいからパソコンに残すように計画していますがいざ始めてみるとなかなか進まず机の横に山になっています。

そうしているうちに平成六年知床などご案内させていただいた方が亡くなり、お嬢様から連絡をいただいたり、平成九年「北海道三十三観音巡り」で一緒にさせていただいたご夫妻のご主人が八月に亡くなったとの知らせをうけて淋しく思っていました。

そんな時に持山様からの素晴らしい本にはうれしい限りでした。いただいて以来、大切にもち歩き読ませていただきました。

持山さんが十八年も必要でしたら私なんていつのことか判らないですネ。仕上がらないうちに人生終わってしまうかも・・・

私は平成十二年十二月十一日に母を六十八才で亡くしました。これから少しでも親孝行をと思っているころでした。今年八月、夫の弟が五十六才で亡くなり、千葉にいたのですが、七月十四く十五日とお見舞いに行ったのですが八月九日になく

なつてしまいました。身内があまり淋しいことになる。次は自分がなんて考えてしまいます。

本のうしろはご本人様ですか？何度もお会いしていません。本を読んでいるとやっぱり持山さんだつて思つてしまいました。

乱筆乱文で済みません。最近はお客様へのお礼とか、ご連絡はほとんどワードを使っているのですが手紙はやっぱり自筆という方で・・・

十月十三日～十月十七日仕事で礼文から知床へ行った時の雪の積もった知床連山なんです。上川で焼いたらもう少し明るかったのに真つ暗で・・・春にプライベートルで行つた時の一枚入れます。雪の利尻富士も（十月十三日～十月十七日）のものです。

北海道は雪も遅いですが明日は雪のようです。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ステキな字のもち主の奥様によろしくお伝え下さいませ。

平成十五年十一月十五日 北海道上川町 H 様

持山さま 本ありがとうございます。しゃべるのが上手な人は書くのはへたという小生の持論をくつがえす大作すぐくおもしろく読ませていただきました。

目の前にそれぞれの光景が見えるようで、神戸で戦時中育つた人が数年前同じようなのを書いてすごいベストセラーになったのを思い出しました。もっちゃんか

もうちよつと有名人だったら大いに人気が出たろうにと惜しまれます。彼と同じような才能はあると思いますので今からでもやれるかも。

小生もそのうち書きたいことがあるのですが人に読んでもらうには程遠く、とりあえず骨組みしかできていません。その内容は「阿波弁を含む西日本の言葉とフランス語は、進行形と現在完了形で1・1対応している。英語ともそうだ」というものです。

できればこれを金にできないかとねらっています。

平成十五年十一月十三日 東京都世田谷区

A様

持山君 ご本ありがとうございます。まあ愉快々々。時々「ブツ」と吹き出して、とに角読みやすいし、おもしろい、楽しませてくれてありがとうございます。

少年の頃のキカン坊のガキ大将「弟の目から火が出た」には吹き出しました。私は大学生下宿「かおる荘」昭和四十一年〜六十二年頃まで二十年位、高知大学の下宿ををして、十八名位ずっと学生と共の生活をしていたので持山君の姿が手に取るように解りとっても深く思い出して楽しませてくれました。

日曜市のオッチャンの事も書いて下さってありがとうございます。この本を読んだ人は日曜市に来て店をのぞいて下さり、オンチャンに声をかけて下さる事と思います。

ソロバンの先生が嫁さんだったと始めて知りました。春奈ちゃんの文章とっても最高ですね。やはり御両親の遺伝子を受け継がれて、どのお子達もすばらしい方ば

かりと思います。何から何まで明るい楽しい最高の御本です。本当にありがとうございます。

オンチャンもとっても喜んでいきます。  
高知新聞社からの募集「心にひびくいい話」の中に私の「いたわり合う心」が出ていますのでコピー送らせて頂きます。

持山君 奥様 御家族様

高知市・日曜市

〇様

寒中お見舞い申し上げます。先日は、久しぶりに同期の皆様にお会いできて楽しい時間を過ごすことができました。

持山様が本を出版されたとお聞きしましたが早速にお送り下さいましてありがとうございます。本が完成するまでは、大変な時間と労力と根気が必要だったと思います。

筆不精の私には頭の下がる思いです。

毎晩、少しずつ読んでいますが、一遍一遍が短くてとても読み易いです、又、ユーモアのある文章に次々とページが進んでいきます。

一番最初に読んだのは、八十八ヶ所巡りの編からでした。実は私も今年から主人と二人で八十八ヶ所巡りを始めたからです。七番までお参りをしましたが般若心経もぎごちなく、まだまだ新米の巡礼です。持山様の五回にはとても及びませんが、私共も無理をせず、マイペースで全てを巡り、高野山の朱印をいただきに行きたいと思っています。

「あまやどり」も半分近く読み終わりましたが残りもゆつくりと楽しく読ませて頂きます。この度は本当にありがとうございます。

平成十六年一月三十一日

小松島市

M様

「同期会で話した本です、ご笑読下さい」 ん？これは何だろう？ あれっ  
一月にあった新年会のことかな？なぜ、私に？誰かと勘違いでは？住所・名前合  
ってるし。

ま、いいか、読んでみよう。 と、様々な憶測のもとに読み始めたのですが、これ  
がなかなか楽しくて、暖かくて、やるせなくて・・・夜、ふとんに腹ばいになっ  
て隣の主人のいびきにも負けないほどの御本でございました。

私、一月の新年会は欠席致しておりましたので、どなたかは存じませんが「持山  
さんたら、送るって話ばかりだったなあ」と言ってる方がおいでだと思いますよ、  
きつと。

私にはステキなお年玉でしたが・・・。

同期会でお会いできませんでしたので、私の近況をちよこつと書かせて頂くと、  
退職してから四カ月半になります。真正正銘の三食昼寝つきの座を手に入れ、家族  
から、顔が丸くなり、おなかも丸くなり、気も丸くなつたと好評です。このまま維  
持、継続していいものかどうか、悩める日々を送っております。この度は、ひよ  
んなことからお近づきになれて、嬉しく思っております。ステキなプレゼントをあ

りがとうございました。

いつかお会いできる日を楽しみに、ゆったり流れる時間にあぐらをかいて生きていきよります。(阿波町弁) それではごめん下さい。

阿波町

S様

拝啓 立冬も過ぎ、日増しに寒さが加わって参ります。皆様お健やかにご活躍のことと存じ大慶至極に存じます。

さて、このたびは、「あまやどり」の書籍をお贈り下さいまして有難うございます。早速拝読させていただきました。持山さんにこんな文才があるとは思いませんでした。

読むほどに次第に吸い込まれていくようで本当に楽しく読まされてしまいました。我が部屋の本棚に宝物として末永く大切に保存し、持ち続けたいと思えます。

本年もあと一ヶ月余りとなりました。いよいよ寒さに向かいます折柄、くれぐれも皆様自愛なさいますように、まずは、ひとことお礼申し上げます。 敬具

平成十五年十一月十二日

鴨島町

U様

持山様 気に掛かっていましたが、随分とご無沙汰をしております。昨日はご本を有難うございました。早速読ませていただきました。持山さんは銀行の方にしては変種と拝察してはいましたが通読して、ハハんと納得をするものがあります。

今後ともどうぞよろしくおねがいます。

恋女房で、ソロバンの名手、多分頭の上からぬ賢夫人の奥様にも拝眉の機会を得てまた何か面白いお話を伺いたいものです。

持山さんに随分と可愛がっていただいたあの桜、守る会の方々のお力で段々と名を知られるようになってきました。最近では来年一月にバチカンやスペインまで請われて移植の話がある由、連絡がありました。

平均して月に一回ぐらいは帰省していますので、ご都合よろしければUさんと一緒に一杯やりたいと思いますが如何でしょうか。ご健勝とご発展をお祈り致します。

平成十五年十一月八日

大阪市住吉区

H様

この度は「あまやどり」の出版おめでとうございます。

本をお送りいただいてから十日間ほど母に取られてしまい、読むのが遅くなってしまうしましたが、今年最後の連休が始まる前の二十一日夜、一気に読ませていただきました。

もっちゃんの氣質が見事に表現されており、ついつい自分の過去が、そして、もっちゃんとの共通点や相違点が頭の中を巡っていました。

すっかりとした文章に感心しながら読んでいると寝付けなくなり、結局ほとんど徹夜になってしまいました。でも、それもやむを得ないかな、なにせ経済誌と趣味

の科学雑誌以外の本を読んだことのない無精者だから。

明日は仕事をさぼって久々の山行予定なのに眠れないとは、ここにも、もっちゃんの側倒し犠牲者が発生してしまったのか、でも徹夜くらいでしおれないのが私のとりえ、二十二日は土佐矢筈山に行き四時間ほどの山歩きを楽しみました。

空はどこまでも澄み晩秋色に包まれて・・・しかし、顔を向けることが出来ないような猛烈な寒風、途中で逢った老夫婦などは相当疲れた様子でしたが、これくらいの際しさがちょうど良いと勝手な解釈をして、徳島の名山の大パノラマをしつかり堪能してきました。

秋の山行は繁忙の中、月一回の息抜き程度で、三年程前に剣岳に行つて以来、四国から一步も出られない状況ですが定年後に向けて更に体力脚力を向上させようと思つています。

お送りいただいた本を取りあげて私より先に読んだ母（田舎の農民歌人）も、もつちやんの文才に感心していました。チラシの裏に書いた母の読書感想文も同封します。

精神年齢は三十代、まだまだこれからの気持ちで、いたずらと冒険を楽しみますよう。

（チラシの裏面に書いて下さった、ご母堂様の読書感想文）

比の度は御立派な御本「あまやどり」の御上梓おめでとございます。大変読みごたえのある内容で時にはほほえみ、時には涙し、時には感動し、すばらしい人生

経験を作品とされた項ばかりで頭の下がる思いで衿を正して読ませて頂きました。すぐれた文才をお持ちの著者に感服のみでございます。ありがとうございます。

平成十五年十一月二十三日

鳴門市

N様

ありがとうございます。「あまやどり」届きました。たいへんきれいなカバーや読みやすい文章で、また本のサイズも良かったです。完成本当におめでとうございます。

どのページを開いても持山さんが生き生きしゃべったり、動いたりして、とても楽しかったです。持山さんが銀行を退職され新しい道を選択された時に、たいへん驚きましたが、少し分かった気がしました。読んでいて、自分が銀行に入行し、山川支店に配属された初日に、とつ然、持山さんから「自分は君の大学の先輩である、ガンバレヨ」とお電話いただいた事を思いうかべました。又、県庁（かちどき橋）支店で一緒に仕事をさせていただいた時、持山さんが朝礼のわずかの時間に、自然の事、宇宙の事を話されていた事が思い出されました。持山さんや、ご家族のみなさんの大切な思い出を見てしまつて、申し訳ない気持ちと、読んだ後の「あたたかさ」と「うらやましさ」を感じています。

本当にすばらしい本を送っていただき、ありがとうございます。近々の続編を楽しみにしています。ありがとうございます。おめでとうございます。

平成十五年十一月十六日

徳島市

F様

持山様 思ひ出のいっばいつまった本、ありがとうございます。持山様の御人柄が分かる楽しい本でした。一度しか逢ったことのない私にまで送って頂いて本当にありがとうございます。濱田さんのおかげですネ・・いつか又、お逢いできるの楽しみにしています。まずは、お礼まで。

平成十七年八月二十三日

北海道愛別町

S様

拝啓 山に初雪の便りが聞かれる季節となりました。高崎で暮らしております。頃は誰よりも早く初滑りの自慢がたくて、新聞の積雪情報を頼りに、谷川・天神平を目指して車を走らせておりました。

持山先輩におかれましては、世界を股にかけて御活躍のこととお伺いいたしております。ずいぶん御無沙汰をしております、失礼をお詫び申し上げます。また、このたびは、「あまやどり」の御出版まことにおめでとうございます。思いがけず私のような者に入魂の一冊をお送りいただき、誠にありがとうございます。光栄に存じますとともに、たいへん恐縮しつつも、楽しく拝読させていただいた次第でございます。

持山先輩の暖かいお人柄に今更ながら感動するとともに御母堂様やご家族に対する愛情や様々な人々とのふれあいや思ひ出の豊かさに感動しました。私も、友達はさておき、もう少し家族や両親を大切にしないといけないと反省させていただいております。

また、尾瀬ヶ原、至仏山、弥四郎小屋、三扇寮や家庭教師のアルバイトなど、久しぶりに私なりの青春時代の思い出をたぐり寄せたりしております。私、昨年より、人事課でお世話になっておりました、我ながらつくづく似合わない仕事だと感じておりますが、まじめな顔をするにも少しづつ慣れてきて、それらしく振る舞っているつもりでいます。今、県庁は日本一若い飯泉知事の下、行財政改革に取り組んでおり毎日、改革改革で少々食傷気味ではありますが、個人的にはなんとか元気に暮らしております。

先輩におかれましても、くれぐれも御自愛いただきまして、ますますの御活躍をお祈りしております。またお会いした際には、あらためてお礼を申し上げねばと考えておりますが、まずは書簡にて失礼をさせていただきます。ありがとうございます。

平成十五年十二月五日

徳島市

N様

前略 立春も過ぎましたが寒さが厳しい毎日でございますが御健勝の事と存じます。

私も毎日 日曜日で何とか体調維持に努めております。 昨年はお陰げでゴルフも五十回くらい楽しみましたがスコアは何時も同じです。

貴兄の立派な本を出版され御恵贈賜り、ご労力、前進、驚嘆申し上げます。何時までも大切に拝読させて頂き保存させて頂きます。有り難く御礼申し上げます。

御礼と思いながら遅くなりましたが何時までも御元気で第二の人生を頑張つて下さい。先ずは御礼迄。

平成十六年二月七日

高知市

K様

前略 貴著拝受。通読させていただきました。ありがとうございます。

高崎の懐かしい光景を思い出しました。人生の節目節目に思索し、それらを心の糧にしてきた真摯な生き方に共感しました。貴重な「青春の道標」ですね。

庄子さんに頼んだとしても結構なコストだったでしょう？ありがとうございます。ほんの印ばかりの御礼を同封します。

平成十五年十一月二十一日

東京都

Y様

大分寒くなり、秋らしいこの頃、貴殿ご健勝の事とお喜び申し上げます。先日思いがけなく貴殿の著作本「あまやどり」をご送付頂きありがとうございます。第一回の発行おめでとう御座います。早速読ませていただきました。

幼い頃の思い出などよく記憶しているのに感心しました。又、学生時代の苦しい生活など等、よく体に残っていますね？なかなかか文章の語らいも豊富で文学的に綴られていますね、まだ充分に読んでいませんので本を開くのが楽しみです。

人が好きな貴君ですね。皆に好かれて人生楽しく生き生きと宝石を散りばめたようにキラキラ輝いていますよ！私も自治会に関与して小さい図書室を設置した

り、新聞にて報道されて阿波銀行より本を寄贈されて蔵書としています。小説を書いて本を出すか？と言うと自治会長に笑われましたが、ここに貴殿が本を発行して大いに希望がわいてきました。私が考えているのは、絵画の作品の写真とか、写真の傑作の画集とか、写真集とか、先の先かも分かりませんが夢を暖めていきます。JAFメイト11月号に私本の発行についての広告が掲載されていましたが価格が高価で大変です。絵画の作品と写真類が大量に家の中に保存しており、場所を取って大変ですので整理しようと思っています。

次回の貴殿の第二回発行を期待していますよ！自身で描いた絵とかで表紙を飾って下さい。まずはお祝いまで。

平成十五年十一月 吉日

徳島市

K様

拝啓 秋深まり紅葉の美しい気候になりましたが、お元氣でお過ごしのことと思  
います。

この度は素晴らしい回想録「あまやどり」お送りいただき厚くお礼申し上げます。  
早速拝読させていただきました。

改めて持山様の日ごろからの感性・行動哲学に深く感銘いたしました。持山様に  
初めてお会いしたのは昭和五十四年六月ですから、今から二十四年前になります。

私どもの事務所では雑談の中で今でもはつきり覚えていましては東海道五十三次を  
走破したお話です。数多くの出会いを書物にされたことうらやましく、また、感動

を頂きました。ありがとうございます。またお会いできる日を楽しみにしております、感動の余韻深まるような心ばかりのワインをお送りします。ご笑納ください。ワインとともに人生・出会いに乾杯したいと思います。乾杯

平成十五年十一月二十三日

八幡市

T様

前略 先日はすばらしい本を頂きありがとうございます。早々にお礼の返事を差し上げなければならぬのに、娘の出産で大阪の方へ行って留守にしていたもので、おそくなりすみませんでした。さっそく拝読させていただきました、持山さんの人生の生き方、何事にも積極的に取り組む姿には感動いたしました。これからはらしい奥様と共に色々とチャレンジして下さい。私も主人と共に、これからの人生自分達らしく、悔いのないように送りたいと思います。

それと、尾瀬には元気なうちにぜひ行って見たいと思います。同期会に出席できて本当によかったです。まずはお礼まで。草々

平成十六年二月二日

徳島市

N様

拝啓 紅葉の美しい季節になりました。先日は「あまやどり」の発刊おめでとうございます。その上にご恵送賜り厚くお礼申し上げます。

貴殿の少年から青春時代が良く表現されており、本当によく纏められたものただただ感心するばかりです。

阿南でお会いしたのも何か縁があつたのでしよう。Aさんがグループのお話にお邪魔した事が昨日の様に思い出されます。あれから何年たったのでしよう色々な事がありましたね、それもこれも良き思い出になってしまいました。

いま、ここ錦帯橋は第四橋・第五橋の架け替え工事に入りました。来春には全て新しく生まれ変わります。少しは観光に役立つものと期待されているところです。機会がありましたら是非お出かけ下さい、見る所は少ないかもしれませんが。

重ねてお礼申し上げます。奥様によろしくお伝え下さい。敬具

平成十五年十一月十五日

岩国市

M様

先日は「あまやどり」を頂戴し、ありがとうございます。

元来、読書を苦手とする（本当は、同じ作業に飽きがくるのか、小学校時代の図書室委員との苦い思い出からか？）私としては珍しくも日曜日一日で読み終えました。

まず、「もつちやま」氏の記憶の確かさや博学博識に感心し、翻って、高崎経済大学生としての自分は真理を求めて常に高尚であったか、そして、現在も貪欲に知識を吸収しようとしているか、反省も交えて考えさせられた一日でした。

読み進むにつれ、同じ様な思い出や情景が次々に浮び、楽しく懐かしくもあり時には、ほろ苦い想いをしながら、善し悪しは別に、 「もつちやま」にない自分、自分がない「もつちやま」を見いだして、中身の薄い半生をおくってきた自分に何となくそれなりに納得もした一日でした。

また、幼き時代の些細なことでの女性への関心や大学時代の諸先輩等々との頭の隅に追いやられ忘れかけていた出来事を、活字から目を難し、思い浮かべたりした一日でした。

それにしても、社会人になってから、無為に日々を送ってきたものか、読み進むにつれ後悔と恥ずかしさが募るばかりでした。

私だけかもしれないませんが生きる事は職場・家庭その他もろもろの場で多くの悩みと同居しているようなものです。しかしながら「もっちゃま」の家庭、家族に対する想いは本当にすばらしいなと心底、感心するばかりです。

とりあえず、心の熱いうちにお礼の気持ちをお伝えします。また、しばらくたつてから、ゆつくりと読み直したいと思っております。過ぎ去りし日々を思い起こす機会を与えていただき本当にありがとうございます。

貴著「あまやどり」ならびに「もっちゃま」氏に感謝！

平成十六年一月二十五日

鳴門市

Y様

前略 この度は思い出集「あまやどり」の出版おめでとう。先日、奥様よりいただき家に持ち帰って家内に、持山さんがこんな本を出版したよと云うと「どれ？見せて！」と云って読み始めたきりしばし沈黙。次々に先が読みたくなる、優しい人柄だなあ、面白いなあ、と一気に一晩で読み通しました。

世代が同じだからか（実際には大分開いているが）共感できることが多かった

のか、素晴らしい、感性が豊だ、優しいとしきりに感心していました。

そんな前批評を聞いて私は読み始めましたが、読み進んでいくうちに私はもつちやんが例の歯切れの良い、早口の特徴ある口調で目を輝かせて次々と思ひ出話を語ってくれているような、そんな錯覚に落ち入りました。

大変気持ちよく心が安らぐ思いで聞いていました。人の気付かない処に優しい気を配りそれでいて意地を通す処では我慢ができて意地を通して後から反省する。優しい人間性と豊かな感性にひかれて私も一日で読み終えました。

もつちやんがいつも離さず大切に持ち歩いていた、あの黒い四角いカバンには思ひ出や感想を書き溜めていた一冊のノートが入っていたのではないかと、ふと勝手な想像をしました。これからも奥様や家族を大切にして豊かな生活を送られる様、祈っています。

次回のエッセイ集の出版を楽しみにしています。

草々

平成十五年十一月九日

石井町

W様

遅かった紅葉もやつと見られるようになりました。この度は「あまやどり」ご出版お目出度うございます。私方へも頂戴し読ませて戴いておりますが、どのページを開いても心温まる随筆が楽しいご本でございます。

私方として何かお役にたつものをと考え、住所判を作らせていただきました。しかしお気に召すかどうかかわかりませんが先ずは電話番号を入れたこと全体の大き

さの件（普通、大は小を兼ねるといわれますが、判は小を大に兼ねるのではと思ひ、小さ目の判にしました）使用道も体裁もいろいろです。ご希望ございましたら遠慮なくお申し付け下さい。御意に添えるような判を作らせて頂きます。お役にたちますれば幸せです。

寒さ増しますこと、ご健勝を祈っております。

平成十五年十一月二十日

奈良県香芝市

H様

拝啓 「あまやどり」お送りいただき有難うございました。少年時代の出来事は私の想い出とダブル部分も多く有り大変なつかしく心に染みました。

意味不明のまま持山氏の美声で聞きほれていた「ハイサイおじさん」、これから一層楽しくきけそうです。

「あきつ丸」友人との希望と涙を乗せた別れのテープを思い起しました。年少の頃「鉄の船が浮く」不思議さを感じたのも「あきつ丸」でした。

「四国巡礼」私も見よう見真似で頑張りました。少ないお賽銭で願ひ事の多い事、多い事。心の狭さを反省する巡礼でしたが感動と達成感をも得る事が出来ました。

家族を愛し、人が大好き、自然を大切にの心が読みとれる事が出来ました。

「かがり火」を絶やさずにいつまでも健康で輝いた「もっちゃん」であって下さい。本当にありがとうございます。

平成十五年十一月十九日

徳島市

H様

前略 御無沙汰致しております。如何お過ごしでしょうか。懐かしい持山様には特に神戸支店在任中は格別のご配慮を頂き誠に有難うございました。

先日お送り下さいました「あまやどり」を読ませて戴きました。本当に幼少の頃やまた人生のきびを多彩に記憶された本に感動致しました。今後とも益々の御活躍、新たな著作に励んで下さいませ。

季節も本格的な寒さに向かいますのでお体ご自愛の程を。

敬具

平成十五年十一月二十四日

神戸市

T様

前略 先日は優しく柔らかな感じで装丁された「あまやどり」持山さんの「思い出集」をご惠贈頂きありがとうございます。

早速、二日をかけて、脳裏に持山さんを想いながら読ませていただきました。

隠れた才能と形容しますか・・・文才豊かな表現力に引き込まれて拝読しました。

私の知る持山さんのお人柄とは随分と違つて遅まきながら不明を恥じています。どうかこれからも溢れる多才を存分に發揮され健康でご家族様お揃いでお暮らし下さいますよう、ご多幸をお祈りしています。小生、貴兄と違い能もないままに健康維持の為に晴耕雨読の毎日を送っています。家内は老健施設に入所六カ年になります。晩年の生涯は「神のみぞ知る」です。御奥様をお大事に頑張つて下さい。

重ねて貴重なるご本を不肖までにご惠贈頂きましたこと厚く御礼を申し上げます。  
敬具

平成十五年十一月十一日

阿南市

F様

昨日、東京駅南口ベックスで、打ち合わせ相手を待っている間、「あまやどり」を読んでました。母の死や、母にプレゼントしたオルゴールあたりの三編続けて泣けて、泣けて、涙の話が連続だったもので、やや号泣状態になってしまいました。多くの人がいるベックスで、むさ苦しいオヤジが一人紙ナプキンで涙を拭きまくっていました。私の涙は知る者ぞ知る、安い涙なんですけどね。

思わず涙した作品

- 一・柿の花
- 二・弟と袋入りジュース
- 三・母の死の日
- 四・母に贈ったオルゴール

思わず笑った作品

- 一・ゴリ金と小夜子ちゃん
- 二・アーモンドチョコレート

ほのぼのとした気持ちにさせてくれた作品

- 一・弟の世話
- 二・幸せの質量

懐かしさが込み上げて来た作品

- 一・恐怖のスキップダンス
- 二・紙芝居
- 三・フルヤブリアキン
- 四・レールが止まって見えた

教訓を得た作品

- 一・豊橋のオバサン
- 二・困った時のあと一步
- 三・カレイ釣り
- 四・ケーキ作り
- 五・サミュエル・ウルマンの詩「青春」

ありがとうございます。

平成二十一年四月二十一日

東京都

I様

持山様

この度は随筆集「あまやどり」の御上梓おめでとございます、そして奥様より頂きました事、厚く御礼申します。

その夜から読み始め、始めから又、後から、中程から読んだりしました。十一月十五日の早朝にすっかり読み終えました。

途中でその感動の一端を述べさせて頂きました。楽しくて、面白くて、暖かくて、さわやかで、ほのぼのとして、やがて悲しくしみとおる慈雨のように感じました。

珠玉の粒を連ねたネックレスの様にどの編にも感動に輝いていました。まぶたを熱くしました。

群馬の大学もこんな素晴らしい方の出身校である事を思います時に誇るべきであると痛感致しました。全編を通してあふれている「愛」に感動致しますと共に母上

様はこんな優しい、そして聡明な息子さまをどんなに心強く頼もしく、ご自慢であられたことでしょうか。私も母でありますので、よくわかります。親孝行されましたね。

そして弟さんを可愛がり、お友達を大切になさり後輩にもお心をつかつて頂きましたこと、私は忘れていません。

奥様をふかく愛され、お子様のよきお父様として持山様の人間像をうかがわせて頂きました。そして、そのご主人の愛に応えられていて清楚で可愛く美しい奥様の、おやさしい「かがり火」に照らされながら持山様のお心が今、開花されました。「あまやどり」の一冊、素晴らしいご本でございます。躍動感に満ち満ちて豊かな表現のいっぱい詰まった持山さんのいくつもの引き出しを折々引っ張って覗かせて頂こうと思います。

生意気ですが、文章の展開の見事さ、結びのくだりの文章に「舌を巻く」というのは、こういう事かと思つた次第です。

素晴らしい奥様をのぞかれた群馬の大学は最高の学府だと思つています。貴方様に洗われた心を保ちながら、私もこの年を終えられましたなと思つています。

持山様ご一家の益々のご健康とご多幸をお祈りして、つたない七十二歳バアのことばを終わりたいと思つています。「山が好き、花が好き、そして人が好き、みかんもちよっぴり好き」とおっしゃって下さいませ。

平成十五年十一月十五日

小松島市

N様

ふじ子ちゃん元気ですか。暮れには美味しいの送って下さり、ありがとう。竹ちくわ、なつかしく思いました。「これは珍しいのよ」と言って焼きたての熱々を駅前で食べたの思い出しました。

又、ご主人の本もとても感激しました。最後には涙してしまいました。小さい頃の事、良く覚えていて感心してしまいました。その時の状況や弟さんと二人の姿が浮かんで来ます。ご苦労され、また色々と経験、チャレンジされて凡人でない事、また面倒見の良さがうかがえます。(北海道・大雪山の時の事が浮びます)

色々と豊富な人生にユーモアが入り、次は何か書かれているのかと目先が急ぎます。

とても勉強になり特にわがままで自分の事しか考えず自分の事しかしない私には、これからの人生を直して、人に少しでもやさしく、柔らかく私に出来る事なら手を差し伸べたいという気持ちになりました。よい時期に読ませて頂きまして、ありがとうございます。

ご主人に感謝します。又、会いましょうネ、楽しみにしています。ありがとう。

平成十五年十二月二十四日

昭島市

Y様

あまやどり

平成十五年十月一日 初版第一刷

平成二十四年十月一日 改版第一刷

著者 持山保信

発行者 木場 薫

発行所 有限会社 楽学研究社

沖縄県那覇市宇栄原三丁目二十一番七号